神様のメモ帳4
杉井 光
イラスト✻岸田メル
電撃文庫

神様のメモ帳4
杉井 光
イラスト✽岸田メル

Characters

アリス Alice

ひきこもりの自称《ニート探偵》。PCとぬいぐるみで溢れた自室で、ネットを駆使して真実を暴きだす。普段はいつもパジャマを着て、栄養の大半をドクターペッパーから摂取している。

藤島鳴海 Narumi

本作の主人公。転校を繰り返し人付き合いを避けるようになっていたが、とある事件をきっかけにアリスの助手となる。なにごとにもやる気がなさげなニート予備軍だが、口八丁だけは一人前。

ミンさん

ニート探偵事務所があるビルの1階に店を構えるラーメンはなまる店主。アリスはじめニート探偵団の面々を生温かい目で見守っている。

彩夏

ナルミのクラスメイト。とある事件で重傷を負い、記憶を失ったものの生還を果たす。明るく素直な性格だが、どこかずれてるところも。

平坂組 Hirasaka-gumi

いまどき任侠を気取る不良少年グループ。しかしその実力は侮れない。

四代目

平坂組リーダー。冷徹な性格だが、趣味特技が手芸という隠れた一面も。ナルミと義兄弟の杯を交わしている。

電柱

平坂組、四代目麾下のツートップその1。組の中では縦幅最大。

岩男

平坂組、四代目麾下のツートップその2。組の中では横幅最大。

ニート探偵団 NEET Detectives

アリスのもとで合法・非合法を問わず捜索活動をするニートな野郎ども。

テツ先輩

元ボクサーで荒事にたけた武闘派。その一方、パチスロや競馬などに精を出すギャンブル狂。

ヒロさん

女のもとを渡り歩くヒモ。卓越した話術でたくみに情報を引き出す（ただし対女子限定）。

少佐

童顔で小学生にも見えかねない外見をしているが、盗聴・盗撮・爆発物のエキスパート。

Designed by Toru Suzuki

ALICE&
AYAKA

HIRASAKA-GUMI
FOUNDERS
&
NARUMI

Contents

さらば赤い髪のエイリアン　きみのつくったロケットに愛をこめて――

"ROCKET DIVE" hide／布袋寅泰

1

探偵(たんてい)事務所に久々の依頼客が来たとき、僕はアリスと大立ち回りを演じていたせいで、全然それに気づかなかった。

「きみはぼくの友人たちを、あの風呂(ふろ)などという、この世で三番目に残虐(ざんぎゃく)な拷問(ごうもん)にかけるつもりかっ! 冷酷(れいこく)で没義道(もぎどう)な人間だとは知っていたが、これほどとは思わなかった!」

探偵事務所の六畳(じょう)間を占領(せんりょう)するベッドの上に仁王立(におうだ)ちになり、アリスは黒蜜(みつ)の髪(かみ)をびりびり震(ふる)わせ、病的に白い肌(はだ)をほの赤く染めて怒った。背後で、クマやイルカや猫(ねこ)といったぬいぐるみの山が崩(くず)れてシーツの上に広がる。ぬいぐるみをクリーニングしようか、と言い出しただけでこれである。探偵などと名乗っていて口調は大仰(おおぎょう)でえらそうだけれど、案外見てくれ通りのちんまい女の子らしい面が多いのだ。

「ところで二番目と一番目はなに?」

まともに取り合うとなにを言い返されるかわかったものではないので、僕は話をそらす。

「二番目は愚昧(ぐまい)な人間と押し問答することで、一番目は、その愚昧な人間が自分の助手だという事実に耐えなければいけないことだよ!」

「悪かったよ。耐えなくてもいいように、ミンさんが作ってくれたこのアイスは持って帰ることにする」

「それを先に言いたまえ！」アリスはベッドから僕の目の前に飛び降りた。「黙っているなんて卑劣にもほどがある」

「いいの？　ミンさんは『アイスを釣り餌にすればほいほいベッドから下りるからその間にシーツもぬいぐるみも回収できるぞ』とか言ってたけど。言う通りに乗せられちゃって」

「うぬぬぬぬぬ」

ベッドの端に腰を下ろし、アリスは歯噛みして両足をばたつかせる。その間に僕はアイスクリームのカップを冷凍庫に入れて、かわりにドクターペッパーを持って戻ってくる。

「そもそもっ、ぼくの友人たちも、シーツも、汚れてなどいないぞ。見たまえ、生まれたての新月のようにきれいじゃないか」

「見た目はそうかもしれないけど、そろそろ夏だし、寝汗とかあるだろ」

「そんなに言うならにおいを嗅いでみたまえ」

僕はプルタブを上げようとしたドクターペッパーを落っことしそうになる。

「……いや。いやいやいや。なに言ってんの」

「きみが汚れてるなどと言い出したんじゃないか。証明義務はきみにある。ほらほら」

アリスはベッドの前で正座していた僕の太ももを踏んづけて逃げられないようにすると、手にした巨大なクマのぬいぐるみを顔にぐいぐい押しつけてくる。

「や、やめろってば」

「言ってみたまえ、どんなにおいがするというんだい」
　アリスのにおいがする、とはとても言えない。窒息しかかった僕が仰向けに廊下の方へ倒れると、真上からのぞき込んでくる狼の鋭い目と出逢った。
「なにやってんだおまえは」
「――四代目ッ？」
　跳ね起きた。膝を持ち上げた勢いでアリスがベッドにひっくり返って抗議の声をあげるけれど、それどころではない。
「い、い、いつの間に？　い、いつから見てたんですか」
　思わず向き直って再び正座してしまう。少年やくざ組長の夏の装いは、素肌が透けそうな黒いメッシュ生地のタンクトップに、ペインターデニムのルーズパンツ。
「おまえがシーツのにおいを嗅いでるあたりから」
「シーツは嗅いでませんよッ」
「二人ともなんの用だか知らないが、そこの小うるさい助手をつまみ出してくれるなら、大歓迎だよ」と、アリスはベッドの上に座り直す。二人？　と僕が四代目の肩越しに目をやると、軽く染めた髪と、真っ白な歯が映えるきらきらした笑顔が見える。
「ヒロさんまで、み、見てたんですか」
「あー、うん」

苦笑いしながら四代目の隣に出てくるヒロさん。こちらもかなり大胆なUネックの辛子色のシャツで、首に光るジゴロの風情丸出しの金鎖がまぶしい。
「なんか愉しそうだったから声かけづらくて」
「愉しそうに見えるなら替わってくださいよっ」
「でもそれナルミ君の特権だろ」特権じゃないよ、アリスの風呂とか洗濯とか食事とかの世話なんて、投げ出せるなら喜んで投げ出すよ！
「においを嗅ぐくらいならいいが、洗濯などさせないぞ。ヒロ、きみにもだ！」
「いや、あのさ、アリス」
ヒロさんは僕の隣を通ってベッドに近づき、アリスのそばで身をかがめる。
「ナルミ君ににおいまで嗅がせるのはやめた方がいいよ」
なんの話してんのあんた。さっきから四代目の狼みたいな目が細くなりすぎて僕の頬に突き刺さりそうだから、もうその話引っぱるのやめようよ。
「なぜだい。ナルミは魯鈍すぎて言葉では理解できないのだよ。ぼくの言いたいことをデータにして鼻の穴からUSB接続で流し込みたいくらいだ」
「いや、だって、パジャマとかシーツはアリスがずっと触れてたものだろ」
「ふむ?」

「ぬいぐるみはアリスの半身みたいなものだろ」
「それがどうかしたのかい」
「ナルミ君がアリスの素肌(すはだ)のにおいを嗅いだらどう思う?」
　唖然(あぜん)とする僕の目の前で、アリスの顔はきれいなグラデーションを経て唐(とう)辛子みたいな色に染め上がった。
「ナルミっ、こ、この恥知らず!」
「恥知らずはおまえだ!」そこまで言われてようやく気づいたのかよ!
　言い返したところにドクターペッパーの空き缶(かん)を次々と投げつけられたので、僕はたまらず四代目の背中に逃げ込んだ。狼のすさまじい反射神経は、片手だけで缶を残らず撃墜(げきつい)する。
「馬鹿やってんじゃねえ。ヒロ、お勉強の時間は俺(おれ)がいないときにしろ。こっちは仕事の話で来てんだ」
「ああ、そう、そうだった」
　アリスの両肩を手で押さえつけてなだめながらヒロさんは言った。……仕事?
「あいかわらず仕事熱心でけっこうなことだね!」アリスは顔から湯気でも出しそうな口調で言った。「この破廉恥漢(はれんちかん)をぼくの事務所から叩(たた)き出してから話を聞こう!」
　ひでえ言われようである。
「ちょうどいいや。四代目がナルミ君をしばらく借りたいんだって。夏休み中ずっと、くらいの話になるんじゃないかな」

アリスの表情から蒸気が抜け、跳ね回っていた黒髪がシーツの上に落ちる。
「……ナルミを？　どうして」
「前に少し話しただろ。今、インディーズバンドのプロモを請け負ってる」
四代目が僕を突き飛ばし、寝室に踏み込んで言った。
「八月の末に都内で連発ライヴやる」
「あー……ひょっとしてあのバンドですか、名前忘れちゃったけど、女の子ばっかりの」
僕は思わず口を挟んでいた。
「ほら、やっぱりナルミ君も知ってたよ」とヒロさんも顔を近づけてくる。「ネットでえらい話題になってるからね」
プロモーションビデオをいじくったＭＡＤムービーばっかり見ていて、実は原曲を聴いたことがないのだけれど、それは黙っておく。
「……これのことかい」
アリスはさっとキーボードに指を走らせ、壁面を埋め尽くすモニタの一つに検索結果を呼び出した。さすがネットの海にあふれるあらゆる情報を、その小さな両手に掌握するニート探偵。オンラインでは無敵である。表示されたのは僕にも見憶えのある動画だ。黒いギブソン・レスポールを掻き鳴らすギター・ヴォーカルの女の子が印象的なＰＶである。

「四代目が芸能ゴロの真似事(まねごと)まで始めているとは思っていなかったよ。いったいどういう風の吹き回しだい」

「趣味でやってるみたいに言うんじゃねえよ。ビジネスだ」

　四代目は不機嫌(ふきげん)そうに腕組(うでぐ)みし、頭の後ろで壁をごんごんと叩(たた)いた。

「うちもいつまでもゴロツキ商売でしのいでるわけにはいかないんだよ。手ぇ広げなきゃしぼむだけだ。イベントコーディネイトの会社はもう作ってあるから、これを踏み台にする」

　僕は思わず姿勢を正して聞いてしまう。この街のニートの王様である四代目は、その実、正真正銘(しょうしんしょうめい)の事業家なのである。

「うちの組員はこういう仕事には役立たずだからな。俺(おれ)一人だと手が回らない。ヒロは勝手に借りるが、園芸部はアリスの助手なんだから一応許可が要(い)るだろ」

「えっと。ヒロさんはわかるけど、なんで僕」

　ヒロさんはとくに女の子にめちゃくちゃ顔が広い。インディーズのミュージシャンを口コミで売り出すとなったら、心強い味方だろう。でも、僕？

「ネットでＤＪと接触(せっしょく)して売り込みたいんだが、そういうのに強いやつがいない」

「んん。それで僕ですか」

たしかに、サブカルチャー方面には多少詳しいけど。アリスはネット上で無敵とはいえ、敵がいないだけであって味方もいない。とすると、僕しかいないか。

「夏休み中、ナルミをあっちこっちのクラブに使い走りにするというわけかい」

「そうなるだろうな」

「冗談じゃない、じゃあぼくの事務所の家事はだれがやるんだ！」

おまえさっき僕のことつまみ出せとか叩き出せとか言ってなかった？

「べつにここに寄るひまがなくなるわけじゃねえよ。学校あるときだって助手やれてんだろ」

「むむむむ」

今日のアリスは、なんだか切れが悪い。相手にやりこめられてばかりである。

「なぜにヒロとナルミまで使うんだい。たかがインディーズバンドだろう？　乏しい資金でも動くフリーのプロモーターくらい知り合いにいるだろうに」

「絶対にでかい仕事になる。だから、できれば根っこのとこでは玄人は嚙ませず、この先のプロモは全部うちで引き受けるようにしたい」

びっくりするくらい力強い言い方に、僕もヒロさんも、四代目の顔を見た。あいかわらずむっつり口を引き結んで目を細めていたけれど、透明な精気がみなぎっているように見えて、なんだかまぶしい。

「大きい仕事になるなどと、どうしてわかる」とアリスは眉をひそめて首を傾げた。

「聴きゃわかる。ネットに上がってる音源じゃねえぞ。ライヴのリハだ」

そう言って四代目は、ポケットから取り出したなにかをアリスに投げつけた。このパジャマ娘は身体能力ゼロなので、もちろんキャッチするなんてことはできず、その小さなものは額にぶつかってぬいぐるみの上に落ちる。USBメモリだ。

「野蛮人！　普通に手渡したまえ！」と憤慨しながらも、アリスはそれをハブに差し込んだ。

僕はその日そのときまで、このNEET探偵事務所のサイバールームに設置されているアンプとスピーカーなど意識したこともなかった。でも、部屋が熱い霧のようなピンクノイズで満たされると、アリスの背後、黒い機器で埋めつくされた壁の左右に、脈打つ巨大な音源がそそり立っていることに気づく。やがて近づいてくるのは、レスポールとマーシャルアンプのにらみ合いから生まれる強烈なフィードバック音。

音楽でぶん殴られる、ということが、ほんとうにあるのだ。

えぐるようなビート。薄汚れたつぶやきから夢見がちの祈りまで、ダイナミックレンジの荒野を駆けめぐる歌声。ときに残酷に、ときに甘く身を切り刻むギターリフ。

そのとき僕を打ちのめしたのは、そんな音楽だ。

僕と四代目とヒロさんがそろって探偵事務所を出たときは、まだ昼過ぎで、夏のはじめの無遠慮（ぶえんりょ）な太陽がペンシルビルのひしめく路地（ろじ）をじりじり焦（こ）がしていた。

「屋外ライヴとかやんないの？　今年の夏はほんと夏らしくなりそうだし」

　ヒロさんが非常階段を下りながら四代目を振り返って言う。

「どこでやるんだよ」

「野音（やおん）とか」

「野音が今からとれるわけねえだろ」

　日比谷（ひびや）野外音楽堂は屋外ライヴの聖地、なのに音楽系のイベントは土日にしかできないので、基本的にスケジュールは一年先までぎっちぎちである。

「ううん。惜しいなあ。あのバンドは――」

　ヒロさんが歌うようにつぶやく。

「外で聴きたいよ。暴れたくなってくるじゃん」

　ヒロさんの言うことはわかった。血の色に染まった真夏の太陽がビルの間に沈んでいくのを背にしてあの歌を聴いたら、たぶん三日間くらい現実に帰ってこられないだろう。四代目が意気込むのも理解できた。

　しかも、アリスでさえ、リハーサル録音の曲が終わってからも、しばらく沈黙（ちんもく）にひたっていた。そして僕の貸し出しを認めた。

あの歌は、ほんものなのだ。

「売れなかったら俺の責任だからな」

四代目が階段の手すりの向こうに目をやって言った。なかなか言えるせりふではない。

非常階段の足下、ビルの狭間のたまり場におりてきた僕らは、朽ちかけた木台を囲んでビールケースや古タイヤやドラム缶に腰掛け、作戦会議。勝手口からはラーメンのスープを煮込む湯気がたっぷり流れ出てあたりによどみ、めちゃくちゃ暑い。

「それと、アリスには言わなかったが」四代目の声は重たくなる。「どうもきな臭い。ゴタ起きるかもしれない」

「なんで」

「この仕事、もともとはべつのプロモーターが請け負ってたんだ。バックに柳原会ってやくざのついてるクズ連中で、ろくな仕事もしなかったんで、バンドのリーダーがキレて契約ぶち壊して俺んとこに持ち込んだ」

うわあ。きな臭いどころじゃないよ、もう煙くすぶってるよ。

「予定してた会場のうち、一つが使えなくなった。どうも因縁つけられたらしい」

「大丈夫なの？　もう火が点いてるじゃん」

「柳原会が直接動いてるわけじゃないが、やばいのにはかかわりないな。だからおまえらに頼んでるんだ」

いざとなったら探偵団の出番、てことか。

「なら、最初からアリスに言っておいた方がいいんじゃないですか」
「そしたらヒロはともかくおまえを貸し出さねえだろ。あいつ心配性だから」
　そこまで心配するかなあ。またやくざがらみだから、たしかに危険な感じはするけど。
「おれもそういうの向いてないんだけど、おれの心配はしてくれないわけ」
「そっち方面の心配も期待もしてねえよ。ジゴロはジゴロらしくしてろ」
「はいはい。そんじゃいつも通り、おれはこのへんのクラブとか回ればいいの？」
「いや、店は回らなくていい。最初はてきとうに女引っかけて話聞け。どのへんの層がこのバンド知ってるのか、まだつかめてない」
「おいおい、あと二ヶ月なのにそんな段階か。アルバムも出すんだろ」
「だから、話を持ってこられたのが最近なんだっつってるだろ。しょうがねえんだ」
「あのう、僕は？」二人のマシンガントークの応酬(おうしゅう)に入れなくて、つい情けない声で割り込んでしまう。四代目はこっちをじろっとにらんだ。
「サイト持ってるDJとかWEBラジオやってる連中に片っ端(ぱし)からあたれ」
「なんか地味につらそうな作業……」
「その前に、報酬(ほうしゅう)の話しとく。日給でいいか？」
「え、あ、はい」
「四代目はしっかりしてんなあ、お金の話。さすが関西人」

「関西は関係ねえ。おまえらニートが金にルーズ過ぎるだけだ」
　この人、やくざの四代目だとみんなから思われているのだけれど、その実は大阪の旧い商家の跡取りだったのだそうだ。すでに勘当された身だけれど、流れる血は商売人のもの。
　四代目から給料の額を聞いて、唖然としながらもOKした僕は、二人が路地裏を抜けて行ってしまってからも、しばらくドラム缶に座ってうなだれていた。
「ごめんごめんみんな注文取りにくるの遅れてーって、あれっ？」
　勝手口が開き、ショートカットの髪と、子鹿みたいな瞳が現れる。厨房から噴き出した湯気に、真っ黒なエプロンが舞い上がる。夏服のセーラーを着た彩夏だ。
「ヒロさんと四代目もいたんじゃないの？」
「ああ、うん。二人とも仕事だって。さっさと行っちゃった」
「ニートなのにっ？」ニートなのにねえ。「それでニート候補生の藤島くんはまだ夏休みでもないのにぶらぶらしてるわけ。なにか食べる？」
「候補生って言うな。あと、食欲がない」
「どうしたの？　あ、わかった、洗濯物回収しようとしてアリスにさんざん言われたんでしょ、あのねコツがあるんだよ、こないだミンさんに教えてもらった。アリスは首筋が弱いから後ろから抱きついてふうーってやってその隙にパジャマ脱がせてシーツをひっぺがすの。って藤島くん話聞いてるっ？」

「聞いてる聞いてる」そんな真似ができるわけねえだろ。
「なんでいつにも増して人生全般にやる気なさそうなの？」
「人生全般は余計だよ！」
「そ、そうだね。ごめんね。言わずもがなだもんね」もっと言い方ひどいよ！
「いや、まあ、そうじゃなくてさ。……彩夏、『はなまる』の時給いくら？　僕と同じかな」
「え、え？」
　そのとき、彩夏の身体を押しのけて、長身の女性が顔を出した。ポニーテイルの髪にきつそうな目に、引き締まった健康的な肩がむき出しの灰色タンクトップ。『ラーメンはなまる』の店主、ミンさんである。
「八百五十円だよ。なんだ他人の給料なんか気にしやがって」
「な、なんで僕より百五十円も高いんですか」
「へえ？　おまえ理由訊くわけ？　丼いくつ割ったか憶えてないのか？　ラーメン入ってるのにひっくり返したこともあったよな？　頭からスープぶっかけられたら思い出すか？」
「いやいやいや。ごめんなさい」
「あー、エプロン汚れてるの藤島くんのせいか。染みになっちゃって落ちないんだよ」
　僕は頰をふくらませる彩夏の腰エプロンをぼんやり見つめる。『はなまる』の白いロゴは茶色になって、まわりの黒に埋もれそうだ。三回くらいスープをこぼした記憶がある。

まあ、百五十円の差くらい大したことではない。なにせ、四代目に提示された日給は、彩夏を五人雇ってもまだお釣りが来るくらいなのだ。それでちょっと虚無感に襲われていたというわけ。

　しかし、当たり前のことなのかもしれない。四代目は賭けをやっているのだ。聞けば、最初はかなり杜撰なイベント企画だったのでバンドのリーダーが業を煮やして当初のプロモーターをクビにし、直接四代目のところに持ち込んできたのだそうだ。四代目はそのやる気を見込んで出資までしてるという。僕への分不相応な高給も、投資なのだろう。持っている力で働いたぶん与えるのではなく、与えたぶん力を引きずり出して働かせる、とかって理屈。

　いわゆる『リスクをとる』という生き方は、たぶん僕には生涯理解できないものだ。そう考えると僕はニートにすらなれないのかもしれない。

「そんでアリスのシーツとぬいぐるみは洗濯してきたんだろうな」

　ミンさんが僕の頭をはたいて、物思いの沼から引っぱり上げる。

「あー、すいません。なんかめっちゃ機嫌損ねたんで、ひとまず逃げてきました」

「おまえアリスの面倒見る以外になんの役にも立たないって自覚してんの？」

　生きててごめんなさい。

「そんなことないよ、いつ作ったか忘れたチャーシューが冷蔵庫から出てきたときとかに藤島くんは役に立つよ。胃袋強いから」

時給七百円ももらっててごめんなさい……。もうクビになったけど。あまりにいたたまれなくなった僕は黙って立ち上がった。もう一度、非常階段に向かう。

四代目からの報酬にびっくりしたりわくわくしたりなんてのの前に、自分の本来の仕事をまず済ませよう。僕は探偵助手なんだから。

階段の手すりをつかんで、ふと僕は根本的な疑問に立ち返る。

……洗濯って探偵助手の仕事？

二階と三階の間の踊り場まで戻ってきたときに、上の方からなにか危険な感じの機械音と水音、ごんごんとなにかを蹴飛ばす音、それからうめき声が聞こえてきた。アリスの声？　僕は残りの数段を駆け上がる。308号室前の洗濯機から白いニーハイソックスに包まれた二本の細い脚が生えてばたばたしているのを見て、自分でもわけのわからない叫び声をあげながら駆け寄った。パニックになっていたので電源を切るということを思いつかず、プラグを引っこ抜いて洗濯機を止めると、アリスの腰を抱えて洗濯槽から引きずり出す。

「アリス！　おいアリス！」

びしょ濡れの黒髪をかき分けると、目を回したアリスの顔が出てくる。

「う、うううううう……水が、水が……」

「大丈夫、もう息できるから！」
　頬にべとつくピンク色のソフト剤をぬぐって、背中をさすってやると、ようやくアリスは脚をばたつかせるのをやめて僕にしがみつき、シャツの胸に湿った吐息をつく。
「……ぼ、ぼくの生涯、最大の危機だった……　広がり続けるサハラ砂漠や大地を失った皇帝ペンギンや空爆の続く中東、救えなかった世界中の哀しみが脳裏によぎったよ……」
「走馬燈回してないで自力で出ろよ。洗濯機で溺れるなんて聞いたことないよ！」
「ぼくの腕力を考慮したまえ、あんな体勢で体重の半分を持ち上げられるわけがないだろう」
　なんでえらそうなんだ。
「だいたい洗濯機でなにしてたんだよ」
「洗濯にきまっているだろう！」
　アリスは急に髪を跳ね上げて身を起こすと、ぼくの身体を押しのけ、ふらつきながらも立ち上がった。散らばったパジャマやタオルやシーツの上に、水滴がいくつも落ちる。
「き、きみみたいな恥知らずに、ぼくのっ、肌に触れるようなものの管理を任せるなど、風紀的に大問題だと気づいた！　これからは自分でやる！」
　今さら気づかれても困る。
「洗濯のたびにあんな事故起こされてもいやだし、僕がやるよ。アリスには無理だって」

「なんだとっ。ばかにしないでくれたまえ、こんな原始的な機械くらい扱える」

「扱えてないよ、背丈足りてないじゃん」

　たぶんそれで洗濯槽に落っこちたんだろう。信じられないが他に理由を思いつかない。

「あとソフト剤はじめから入れちゃだめ。すすぎの水がきれいになってから」

「むむむむむ」

　濡れ鼠のまま真っ赤になったアリスは、廊下にへたり込み、手をぱたぱた上下させる。

「だ、だからって、きみがぼくの服を、なんて」

「いや、あの、いちいちにおい嗅いだりしてないからね?」

「当たり前だッ」

　僕の腕を振り払い、散乱した洗濯物を気丈にも拾い集めようとするアリス。

「僕がやるからさ。とりあえずシャワー浴びて着替えてきたら」

「言われなくてもそうする、彩夏を呼んでくれたまえ!」

　口だけは達者なニート探偵、風呂はひとりでは入れないので彩夏の役目。僕がため息をつきながら立ち上がったとき、アリスが急に青くなって洗濯機に走り寄った。

「リッリリルウがっ」

いつも外出時に抱(だ)いている中くらいのクマのぬいぐるみが、洗濯機の足下に転がっていた。アリスが持ち上げると、頭部のてっぺんの縫(ぬ)い目がばっくり開いて、おまけに眼(め)のボタンが片方なくなっている。落っこちかけて暴れたときにやってしまったのだろう。
「四代目を呼びたまえ大至急ッ」
　アリスがクマをきつく抱きしめながら泣きそうな顔で叫んだ。

＊

　そんな事件はさておき、翌日から、僕の山手線行脚(あんぎゃ)計画が始まった。
　あのバンドはまだ一枚のレコードも出していないはずなのに、僕がネットで接触(せっしょく)を試みたセミプロのミュージシャンたちはみんな『知ってる知ってる』と食いついてきたのだ。素晴(すば)らしきネット時代である。
　真夜中まで四代目と打ち合わせして、どう見ても女目当てな連中を排除(はいじょ)したり、費用対効果の悪そうなルートを剪定(せんてい)したりと、協力依頼相手を絞(しぼ)り込む。
「この人たち七月にイベントやりますよ、ここでコラボしてもらって」
「バックにメジャーがついてる。難しいな」
「またそうやって儲(もう)けを独占しようとして……」

「当たり前だろが。うちで独占できなきゃやる意味がねえ」
「でも音源以外の物販は、ものによっちゃイメージ悪くなるから慎重にしましょうよ。それより曲をＵＳＢメモリで売るのはどうです？」
「試算してみる」
　僕が勝手に思いつきを口にして、四代目が商売人の立場からばさばさ斬り捨てるのは、なぜか楽しかった。有意義な仕事をしているような錯覚ができるからだ。
　ただ、話し合いの場所が平坂組事務所というのは勘弁してほしかった。僕らが打ち合わせに使っているのは事務所の奥の倉庫兼仮眠室兼ＰＣ置き場で、表の応接間にたむろしている組員どもがこっちを覗いてひそひそやっているのである。正直なところ、たいへん鬱陶しい。
「さすが兄貴。俺たちにはびたいち理解できない話を壮さんとしてるぜ」
「喋りながらキーボード打ってるぜ、神業だ」
「すげえ、ゴーグルで検索してるぜ！」「俺たちが三時間かけてもできなかったのに！」
　そんなアホな会話が、背後のドアの隙間から聞こえてくる。頼むから静かにしててほしい。あとゴーグルじゃなくてグーグルです。
「組員のみんなは、なんか仕事任せるんですか？」
　後ろに聞こえないように小声で四代目に訊いてみると、苦い顔をされる。

「……会場の設営と警備とゴミ拾いだな」
　うわあ。思いっきり雑用。
「おい、てめえら、騒いでねえでマニュアル読んでろ」戸口に向かって四代目が怒鳴る。
「押忍ッ、すみません！」
　扉は閉まるのだが、声は漏れ聞こえる。
「いいかおまえら、むかつく客がいても殴るなよ。まずその訓練だ」
　これは四代目側近の一人、岩男の声だ。
「よし、おまえ客の役をやれ」「押忍」「むかつく感じでなんか言え」「オゥ、ちょっとうんこしてえんだけどトイレどこだ」「てめえの口の中にしろ！」「あんたが真っ先に殴ってどうするんだよ！」
　僕と四代目は顔を見合わせてため息をついた。このイベント、大丈夫だろうか。
「俺はちょっと家に戻る。あのアホどもの面倒を頼む」
　四代目が立ち上がってジャケットを羽織る。ＰＣの時刻を見ると、もう日付が変わっている。
「僕を置いて帰るんですか、連中がまだいるのに？　あいつら十分に一回は漢字の読み方がわからないとか言って訊きに来るのに、僕ひとりで対応しろってんですか！」
　我ながら情けない泣きそうな声で訴えると、四代目は渋い顔をして声をひそめる。

「おまえメールの返信まだたっぷり残ってるんだろ。俺はアリスに頼まれた仕事をやらなきゃいけないんだよ」

「あ、ああ……あれですか」

　四代目は驚くべきことに手芸が趣味で、プロ顔負けの腕前を持っている。ビッグビジネスを差し置いてでもやらなきゃいけない仕事というのは、あのクマのぬいぐるみの修繕なのだ。

「かなり破れ方がひどいし、眼のボタンに合うやつが見つからない。手間取りそうだってアリスに伝えとけ」

　そう言って苦労性のやくざ組長は書庫を出る。僕がため息混じりにPC机へと戻ろうとしたとき、閉じかけたドアの隙間から、四代目側近のもう一人、電柱のひそめた声が聞こえた。

「壮さん、池袋のライヴハウスからさっき電話あったんですが」

「面倒ごとか」

「俺らのことをスタッフにしつこく訊いてきたやつがいるって。追い返そうとしたら、凄まれたそうスよ」

「……柳原会の三下か？　やくざ対処のマニュアルあるだろ、あれ回して」

「いや、それが——俺らくらいの歳のガキだったみたいで。しかも五、六人で」

　四代目は目を細めてしばらく考え込み、不意にこっちを向いてドアを引き開けた。意図せずしてのぞき見しながら立ち聞きしていた僕は、うろたえてベッドに尻をぶつけてしまう。

「なにこそこそしてんだ。おまえにも無関係じゃねえんだから聞いとけ」
「え、あ、あの、すみません」
開いたドアの向こう、さっきまではしゃいでいたはずの黒Tシャツたちが、組長に険しい視線を集めている。
「そいつら、平坂組のこと知っててふっかけてきやがったのか」と四代目。電柱はうなずく。
「壮さんとか、俺とか、他にも何人かの名前出して根掘り葉掘り」
「ふざけてんな」「いい度胸だ」「なめやがって、こっちから教えてやる」
部下たちが毒づくのを聞きながら、四代目は額に拳をあてて、しばらく考え込んでいた。
「俺たちを名前まで知ってて、ゴタ起こすような根性あるチームは、もういないはずだろ」
黒Tシャツたちは、そろって勢いを殺がれた顔になる。
「……そうっスね」岩男がぼそっとつぶやく。「そういう連中はだいぶ前に、壮さんが残らず叩き潰したはずだし」
「俺ひとりでやったわけじゃ——」
四代目はそう言いかけ、言葉を呑み込む。
「——それはもういい。とにかく園芸部、おまえも気をつけろ。素人なんだから臭い気配がしたら関わるなよ。てめえの仕事だけやれ」

僕はためらいがちにうなずく。なんだろう、なにを四代目は言いかけたんだろう？ ひどくいやな予感がした。やくざからの妨害が入るかもしれない、という不安だけではない。口中に残ったのは、もっとざらざらした、苦い味だ。

四代目の言う通り、自分の仕事だけに集中しよう、と言い聞かせ、僕は書庫に戻った。

＊

翌日の放課後からはライヴハウスやクラブ、デザイン会社を回ることになった。広告を含めてイベント全体のデザインコードはプロに任せたのだけれど、なぜかウェブサイト管理だけは僕の担当にされてしまったからである。なんかこう、文化祭の準備みたいな気分ではいられなくなってしまった。もらっている額が額なだけに、手も気も抜けない。

「ウェブデザイナーに頼むと、FLASH使って見栄えよくすりゃいいと思ってクソ重いデザインにしやがる。俺はあれが嫌いだから、おまえに任せる」と四代目。ものすごい理由だったけれどいくらか同感だった。

そんなわけで西は吉祥寺から東は上野まで、都内を飛び回る羽目になった。ひょっとして自分はちゃんとニートにならずに就職してやっていけるんじゃないか、と思ってしまうほど忙しい日々だった。

錬次さんにはじめて出逢ったのは、そんなせわしない七月半ばの金曜日のことである。

その日の夕方、僕は原宿に来ていた。八月末に企画された連発ライヴの中でも、原宿公演は目玉の一つなので、色々な根回しと下準備が必要だった。会場は、明治通り沿いのビルの地下にある、ライヴハウスとコンサートホールの中間くらいの大きさを持つ箱だ。その日は中を覗（のぞ）いてちょっと写真撮影をするだけのつもりだった。

　銀と青のカラーリングを基調としたしゃれっ気たっぷりのエントランスを抜けると、歯切れの良いカッティングギターのリフが大音量で身体（からだ）中の皮膚（ひふ）に突き刺（さ）さる。ライトアップされたステージは真夜中の水族館みたいで、ひしめきながら腕（うで）と髪（かみ）を振り回す観客たちのシルエットの上で、こまっしゃくれた原宿ファッションのバンドマンたちがコーラスを重ねている。

　白い電灯の柱で囲まれたドリンクカウンターに寄って、大声でトマトジュースを頼む。デジカメを取り出して見せると、スタッフの若い女の子が渋（しぶ）い顔をした。

「写真撮（と）るのだめなんですけどぉ！」

「許可もらってます！」

「ええぇ？　なんですかぁ？」

「昨日（きのう）電話した藤島（ふじしま）といいます！　チーフの方を呼んでくださいませんか！」

「ですからカメラだめです！　お断りしてるんです！」

「許可もらってるんですってば！」

バンドサウンドのせいでお互いの声がよく聴き取れず、噛(か)み合わない問答をしているときだった。ライヴハウス内の暗く煮詰まった喧噪(けんそう)を突き抜けて、その声ははっきり聞こえた。
「せやから記憶力(きおくりょく)悪いんや、かんにんなぁ。どういう知り合いやったっけ」
僕は思わず振り向いた。

稲妻みたいなメッシュを何筋か入れた髪は、長身とも相まって、ライヴハウスの暗がりの中でもくっきり見えた。ゴーグル型のサングラス、不敵に歪んだ口もと。ひどく目立つ男だった。二十歳過ぎくらいだろうか。

「あれか、借金してたか。それとも遊びに行く約束すっぽかしとったか?」

「ふざけてンじゃねえ」「こっちはしっかり憶えてンだよ!」「てめえに鼻折られて戻んねえやつだっているんだッ」

罵声が飛ぶ。サングラスの男を囲んでいるのは、そろって髪をがさがさになるまで脱色し顔をピアスまみれにした目つきの悪い男たちだ。

「あんなあ、東京は五年ぶりやで。五年前の総理大臣とか憶えてへんやろ?　ほな、ここで逢ったのもなんかの縁やし、仲直りしよか。おごるで」

妙に耳に残る関西弁。それからサングラス男は包囲網をかき分けてこっちに寄ってくる。僕はあわてて場所を空けた。

「水割り四つちょうだい」

カウンターの女の子は迷惑顔でバーボンの水割りを四つ並べる。

「おいてめえふざけんな」「逃げてんじゃねえよ」「表出ろ」

因縁をつけていたピアス三人組がしつこく人垣を割って追ってきた。

「まあまあ、乾杯して友達に戻らへん？」

頭おかしいんじゃないのかこの人。そんなこと言ってる場合じゃないだろう。巻き込まれるのもいやだったので、僕は自力で責任者を捜そうと思い、ドリンクカウンターを離れる。関西弁の入り混じる言い合いが騒がしい暗がりに呑まれかける。

そのとき僕の耳に、平坂、という単語が引っかかった。振り返る。たしかに聞こえた。人垣の向こうで、サングラス男とピアスの連中がまだ唾を飛ばしながらなにか言い合っている。どっちだ？　どっちが口にしたんだ？　平坂って平坂組のこと？

平坂組のメンバーの顔はもうつきあいが長いので全員よく知っている、だから四人とも組員でないのはすぐにわかった。でも四代目はめちゃくちゃ顔が広いし原宿はテリトリー内だから、関係者の可能性はじゅうぶんにある。

まずい。もし関係者だったら。ライヴ予定の会場で、平坂組に関わってる人間が喧嘩騒ぎなんて起こしたら——四代目の営業努力が無駄になってしまう。

ピアスの一人の口から、今度ははっきりと、平坂、という言葉が発せられた。声の後ろ半分は演奏にかき消される。僕は人の背中を搔き分け、テーブル席の方に近づこうとする。

「てめえ！」「わいたこと抜かしてんじゃ——」

両手でグラスを一つずつ持った関西弁男に、ピアスのうちの二人が左右からつかみかかったその瞬間だった。紙風船が割れたときのような音が二つ連続してライヴハウスの暗い天井に響き渡り、二人が右手

を左手で押さえて悶えながらうずくまった。悲鳴があがり、関西弁男のまわりに空間があく。僕は目を剝いていた。とてつもなく正確で鋭いハイキックが、つかみかかってきた二人の手をそれぞれ撃ち抜いたのだ。けれどさらに恐ろしいのは、関西弁男の手にした水割りが一滴もこぼれていないことだった。

「ありゃ。つい足が出てもうた。大丈夫？　かんにんな」

　グラスをドリンクカウンターに戻し、関西弁は二人のそばにかがみ込もうとする。

「い、痛ぇ」「指折れてんじゃ……」「て、めぇッ」

　残った一人が仲間の間を割って関西弁男の肩をどやしつけようとする。そのとき、見えた。関西弁男が腰を上げながら、サングラスを喉までずり下ろしたのだ。

　現れるのは、磨きあげた鋼鉄の球のような冷たい眼。

　やばい、と直観したのはこのときだ。

　なにをしようか考えていたわけじゃない。足が勝手に動いた。人間、追い詰められて思考が回らない状況で、稀に一瞬にして最適解にたどり着くことがある。このときの僕がそうだった。手にしていたトマトジュースを、横から関西弁男の胸にぶちまけたのだ。

「──のわあああっ？」関西弁の素っ頓狂な声があがり、ピアス男が手を止めてびくっと跳び退いた。その一瞬をついて、二人の間に割って入る。

「ああすすすみません大丈夫ですか大丈夫ですか？」

　ものすごい早口になっているのに自分でも気づく。

「濡れました？　濡れちゃいましたよねほんとすみません弁償するんであのとにかく外に出ましょう外に！」

「ちょ、わ、押すなや」

　僕は関西弁男の胴にほとんど張り手をかますようにしてエントランスの方へ押しやった。背後で人垣が閉じて、「てめえ待てッ！」というピアス男の声を遮る。分厚い防音扉を開いて店を出るときには、関西弁男も笑って駆け足になっていた。

　竹下通りのマツキヨまで逃げてきた僕らは、路地を入ったところでようやく一息ついた。

「ナルミ？　ナルミいうんか。それ苗字？　あ、名前か。俺、レンジいうねん。れんじ。次の金は東にあるって書いて錬次な。そやから東京戻ってきた」

　その解説は意味わからんが、からから笑う錬次さんにはとてもつっこめない。

「にしてもナルミのおかげで助かったわ」

「ええと。錬次さんを助けたわけじゃないんですけど。どっちかっていうと相手の方を」

　錬次さんはきょとんとした顔になって、サングラスを額までずり上げた。僕は手の汗をジーンズの太ももにこすりつけながら言う。

「頭突(ずつ)きする気満々だったでしょ」
「よぉわかるな」
「普通、ゴーグルは少しの間外すだけなら、そうやっておでこに上げますよね。わざわざ首まで下げない」
あと、鼻折ったとか言ってたし。あんなところで怪我人(けがにん)を出されたら困る。
「おー。おーおぉ!」
鍊次さんは僕の頭をなで回した。やめてください恥ずかしいから。
「じぶん、目ざといなあ」
しかし止めに入ろうとしたほんとうの理由は、そんな細かい点じゃなかった。鍊次さんの眼(め)にどろりと溜(た)まっていた、殺気だ。へらへら笑っているところを見ると、勘違(かんちが)いだったのかなと思いたくなるけれど。
「俺(おれ)なあ、すぐ手が出るねん」と鍊次さんは言う。「ほんでもう少し上品に生きよう思てな。どんだけ怒っても手は出さんようにって心に決めたんや。ほしたら蹴(け)りと頭突きが無意識に出るようになったわ。意味あらへん」鍊次さん、大笑い。とんでもねえ人である。
シャツは弁償(べんしょう)する、と申し出たところ、「そか! ほな買いに行こか、原宿回るの久しぶりやねん」と大喜びされてしまった。いや、あの、加害者の立場で言えることではないが、普通こういうところって固辞(こじ)しない?
おまけに、服屋を五、六軒回って試着しまくった上に、三着も買わせやがった。
「おおきにな。値段気にせんと買い物するんは気分ええわ」

真新しい海老色のシャツに着替えて店を出た錬次さんは、僕の背中を叩いて言った。こっちは値が張る服を「全然似合ってませんよ！」と力説して財布を守るのに必死だったのに。

「この世で三番目に幸せなのは他人の金で買い物することやで」

どこかで聞いたようなせりふだったので、僕はため息をついてスルー。

「二番目は他人の金で飯食うことや」

「訊いてませんよ」

「ほんで一番目は他人の金でディズニーランド行くこと」

「なんでっ？　どういう脈絡で出てきた話？」

「せっかく東京戻ってきたんやし、やっぱあそこ行かんと」

「もう七時ですよ、ディズニーランドどこにあると思ってるんですか！」

「カリフォルニアやろ？」

「せっかく東京戻ってきたって話はどこいったんだよッ」

「ええよええよ。つっこみの波長合ってきた」

「波長合わせる前に話合わせてくださいよ！」

錬次さんは僕の憤懣をさらっと無視して、お茶しよう、俺がおごる、と言い出す。暑いし喉が渇いていたので、ご厚意に甘えることにした。というか、少しでも服の代金を取り戻さないと。平坂組となにか関係があるのか訊かなきゃいけないし。

原宿駅の周辺を歩き回り、陽も落ちて混み合い始めたドトールコーヒーになんとか二人分の席を見つける。
「汚れちゃった服、クリーニングに出しましょうか」
僕がジュースをぶちまけてしまった服は、紙袋の中に入れてテーブルの下に置いてあった。白地に染み込んでしまって、普通の洗濯はしない方がよさそうに見えたのだ。
「ええよ、そんな気ぃ遣わんでも」
「その優しさは一時間前に発揮してほしかったな……」
「したら服買ってくれへんやん」
ですよね！　わかってたよ！
「この店は俺のおごりやから、なんでも食って飲んでええよ」
ドトールでそんなこと言われても。しかしこの人、けちなわけではないらしい。たぶん金銭感覚が盛大におかしいんだろう。
「さっきの、からんできた三人にも酒おごろうとしてましたよね。なに考えてんですか」
「一期一会いうやろ。出逢いを大切にせな、思て」
「明らかに喧嘩の流れじゃないですか、ああいう出逢いは大切にしなくていいですよ！」
ところがそこで錬次さんは、ゴーグルの奥の目を柔らかく細めるのだ。

「出逢いはみんな大切なんやって、だれか言っとった」

僕は毒気を抜かれて、錬次さんのサングラスの表面に映る歪んだ自分の顔を見つめながら、アイスコーヒーを両手でそっと包み込む。

「俺なあ、なんでもすぐ失くすねん」

錬次さんが、笑っているのか頬を引きつらせているのかよくわからない表情でつぶやく。

「たいがい自分のせいやけどな。記憶力悪いし、銭にルーズやし。東京にいた頃のダチ、もう一人もおらへんし。ほんで反省したんや。もう完全にぶっ壊れたんはしかたないから、そうでなかったら、逢えたときにちゃんとダチになっとこう、て」

どうしてそんな優しいことを、そんな線香の灰みたいな口調で言えるんだろう。

「……しかたなくないですよ」

思わず、そんな言葉が漏れた。

「ん？」

錬次さんに顔をのぞき込まれそうになり、僕はアイスコーヒーの水面に視線を落とす。なんでそんなことを言ってしまったのか、自分でもよくわからない。

「生きてれば。……完全にぶっ壊れるなんてこと、ないです」

「……あるやろ。俺、もうなんべんも自分から」

「ないですよ」

生きてさえ、いれば。どれだけ形を変えてしまっていても。
「変なやつやな。なんでさっき逢ったばっかりの俺の前でそないな意地張るんや」
ほんとにね。自分でもそう思うので、僕は恥ずかしくなって、ストローで必死にコーヒーの氷をかき混ぜる。ていうか、なんのためにドトールに入ったんだっけ。そうだ、この人が平坂組となにか関係があるのか訊こうとして、それで——
　錬次さんの声が僕の思考にかぶせられる。
「したら、俺とナルミ、試しにダチになるか」
　僕は顔を上げる。錬次さんは意地の悪そうな笑みを浮かべている。
「俺、ろくでなしやで。たぶん一月でぶっ壊れるで」
ゴーグルの奥の瞳に、ほんのひとつまみのさみしさを読み取ってしまい、僕は弱い笑いしか返せない。
「あんなあ、口では一期一会言うとるけどな、俺ほんまクズやで。どんだけひどいことも平気でやるで？それでもぶっ壊れないてナルミが言うなら、試しにダチになってみるか」
「いや、あの」
　僕は両手を何度も組み替えて言葉を探す。
「友達って、試しになるものじゃないですよね」
「……それもそか」錬次さんは苦笑する。「悪かった。忘れてな」
「あの、そうじゃなくて。試しに、とかじゃなくて。いいんじゃないですか、そのまま」

普通に、今ここで携帯番号を交換して。友達になればいいんじゃないのか。僕がそう言おうとしたときだった。錬次さんが目を上げ、僕の肩越しに店の出入口の方を見やった。その口元が苦々しく歪む。

振り向くと、ガラスの自動ドアが滑り、浅黒く日焼けした何人もの若い男が入ってくるのが見えた。手前の二人がこっちを指さして、後続になにか言った。さっきのピアス男たちだ、しかも仲間を呼んできたのか人数が増えている——と気づいた瞬間、僕の傍らをさっと影が通り過ぎる。錬次さんだ。

今度は、止めに入るひまもなかった。錬次さんは「ひつこいなあ」とつぶやいただけだった。僕が椅子をがたつかせて立ち上がろうとしたとき、ピアス男が錬次さんの胸ぐらをつかんだ。続いて起きた出来事は、錬次さんの広い背中に隠れて、よく見えなかった。

ただ、鈍い音が響き、ピアス男がだらりと錬次さんの身体にもたれかかって、床に崩れ落ちただけだった。店内でいくつも悲鳴があがる。

「てめぇなにしやがッ」

続くもう一人の顔面に錬次さんが拳を叩き込むところは、はっきり見えた。怒声を張り上げながらつかみかかってくる連中は、錬次さんの腕がひゅッと鳴ってしなうたびに鼻血を散らしてうずくまる。しかし錬次さんのなにより恐ろしいところは、倒れそうなテーブルを支えて立て直す余裕すらあることだった。

立ちすくんだ僕は、ぞわぞわする既視感に襲われていた。

この喧嘩のしかたは——この強さは、どこかで、見たことがあるような気がする。

床に転がった男たちがうめき声をあげながら起き上がろうとしたとき、錬次さんが顔を店のドアに向けた。ガラス戸の向こうに紺色の人影がある。警察官だ。

「やばっ」

　錬次さんは自分が殴り倒した相手の頭を踏んづけ、遠巻きにしていた野次馬たちの壁に突っ込むと、脇道につながる出口専用の戸から飛び出した。足音を自動ドアが断ち切り、店内のざわめきがものすごい勢いで揺り返してくる。制服姿の警官がドアから入ってきたのを見て、僕もまったくなんのためらいもなく逃げることを決意した。出口に向かおうとして、足先をなにかに引っかける。

　見ると、テーブルの下に置いた紙袋だ。

　ドトールから逃げ出し、そのままライヴハウスに戻った僕は、我ながらなかなか根性が据わっているのではないかと思う。なにせ、僕だってあのピアスどもに顔を憶えられているかもしれないのだ。でも、仕事で来たのに一枚も写真を撮っていないし、しょうがない。

　すでに観客の入れ替えが行われて、次のバンドの演奏が始まっていた。僕はみっしり人の熱気で埋まった狭い暗がりの隅っこで、壁にぐったりともたれてサウンドの奔流に身を任せながら、無気力にデジカメのシャッターを何度も切った。

足下に目を落とす。紙袋の中には、錬次さんの服が入っている。これ、どうしよう。連絡先なんて聞いていないから、返せない。でもなあ。

取り出して広げてみる。白地で、袖口と襟だけが黒い。肩や背中、脇腹のあたりに、和風っぽい柄が散らしてある。黒や紫が不規則な放射状に散っている、不思議な模様だ。なんだろうこれ、花火じゃなさそうだし。なんか、どこかで見た記憶があるパターンだ。そう思って柄を指でたどったら、プリントではなく刺繍だったので、びっくりする。何種類の糸を使っているのかわからないくらい複雑な柄だし、これ、けっこう高い服じゃないのか？

もし、縁があってもう一度逢ったら、返せるように、洗濯しておこう……なんて思っている自分に気づいて、少し驚く。また逢いたいのか、あんなのに？　どうだろう。わからない。

変な人であった。もちろん僕の知り合いは、哀しいことに変じゃない人の方が圧倒的少数派なのだけれど、それにしても錬次さんの歪み方は方向が全然ちがう。そう、歪んでいて、危ういのだ。強酸と濃アルカリが薄い紙で仕切られて同じ瓶の中に入ってるみたいな。一緒にいた時間はほんのわずかだったけれど、ひどく不安定な気持ちがずっと続いていた。

とにかく、暴力的な世界の住人で、近づかない方がいい人間であるのはたしかだった。

でも、演奏に集中しようと無理矢理顔を起こしてステージに目をやり、ふと気づくと、音楽なんて耳に全然入ってこなくなっていて、あの大げさすぎる関西弁と、猛禽みたいな眼を隠すサングラスと、人懐っこそうな笑い顔を思い出している。

けっきょく平坂組と関係があるのかどうか、訊けなかった。でも、もし関係があるのだとしたら、望むと望まざるとにかかわらず、また逢うことになるだろうか。
そうしたら、あの言葉の続きを言えるだろうか。
ずっと後になってわかることだけれど、僕らの出逢いは偶然ではなかった。だから、錬次さんとは後にほんとうに再会することになる。思っていたよりもずっと、奇妙な形で。

✲

次の日からついに夏休み。でも僕の日常は代わり映えせず、『ラーメンはなまる』に顔を出す時間が昼過ぎに早まっただけである。
夏なのにラーメン屋は店外にまで客があふれている。スープの味が向上して最近けっこう話題になっているというのもあるけれど、主因はやはりアイス。
「柚子シャーベットだけくれ」「チョコミントアイス」「おれバニラ」
「うちはラーメン屋だ！」常連客に向かって牙を剝く、カウンター向こうのミンさん。「なんかラーメン頼め、そしたらデザートで出すから」
「冷やし中華もつけ麺も始めましたよ！」

額に汗をためて忙しそうに盛りつけと皿洗いに追われながら、彩夏がいっぱいの笑顔で言う。おっさんどもは相好を崩して麺類を注文する。いいコンビネーションである。試食するしか能がないどこかのニート候補生とは大違いだ。候補生っていうな。自分で自分につっこみながら勝手口を開けて、熱い湯気の渦巻く厨房に踏み込む。

「洗濯は終わったのかい」

厨房の奥の廊下、客からは見えない位置にぬいぐるみの垣根ができていて、その向こうからアリスが僕をみとめて棘のある声で言った。

「ああ、うん、あと三十分もすれば終わるよ」

「洗濯ネットの中身を見たり触ったりしていないだろうね！」

「大丈夫だってば」

アリスはこの間洗濯槽に落っこちて以来、妙にそういうことを意識し始めた。しかし洗濯機を扱うには背丈が足りないので、洗い物を自分でまとめてネットに入れて、洗濯槽に放り込むところまでは自分でやるようになったのだ。たいへんな進歩である。その隙に僕がシーツの交換と部屋の掃除を始めたら、「ぼくの大切な友まで洗濯などさせないからな！」と言ってぬいぐるみ全軍ごとラーメン屋に避難してきたというわけ。

「ところで干すときはどうするの？」ふと疑問に思って訊いてみる。

「自分でやる。きみに任せたら現物を触るじゃないか」
　まあ、そうなんだけど。ネットに入れたまま乾燥機に放り込んでも乾かないだろうし。
「そんじゃ早めに出るかな。今日は遠出だから」
「今日もさっさと出かけるつもりかい」
　ウサギのぬいぐるみを抱きしめたアリスが、膝歩きで寄ってきた。目つきに戸惑いがある。
「うん。……なんか用事あるの？」
「用事があるかだとっ？」　アリスはぬいぐるみを抱えてしゃがんだままぴょんぴょん跳ねた。器用なやつだ。「きみはぼくの助手だろう、ドクターペッパーのプルタブをあげたりといった重要な任務がいくらでもあるじゃないかっ」
「困ったな。じゃあ前もって冷蔵庫の缶を全部開けておこうか——いやいや冗談だってば」
　アリスが真っ赤になって、手近にあったビール瓶を握って振りかぶろうとして、重さでよろける。僕はあわてて言いつくろった。
「ええと、彩夏、ひまがあったらアリスんとこに顔出してやってよ」
「自分が怠けるために彩夏に頼むとはあきれた短絡ぶりだね、ファイトプラズマだってきみに比べればまだしも自主性があるよ！」

アリスは廊下の床板を引っぱたいた。ファイトプラズマって寄生細菌の名前だっけ。僕も色んなものに比肩されるもんだなあ。

「え、ええっと。……僕じゃなきゃだめなの？」

「きっ、きみじゃなきゃだめだなんて、い、いつだれが言ったんだい！」

　激昂でぬいぐるみの城壁が決壊する。僕はぬいぐるみが厨房の床に落っこちないように拾い上げながらアリスのそばから逃げ出した。なんなんだよもう。

「いい、もうわかった！　どこへなりと行きたまえ！　きみが帰ってくる頃には風呂の栓を抜くのもゴミ袋を縛るのもパジャマを畳むのもみんなぼくひとりでできるようになっててやるからな！　きみの仕事は金輪際ないぞ、ハローワークで失業保険の説明会でも受けてきたまえ」

　そんなのもひとりでできないのかよとか雇用保険に入った憶えはないとか色々と言いたいことはあったけれど、彩夏が目配せするので僕は黙って勝手口のところまで戻った。

「お昼のピーク過ぎたらあたしが面倒見てもいいけど。でも、藤島くんじゃなきゃだめじゃないかなあ」

　なんでだよ。ドクペ運びなんてだれがやっても一緒だよ。

　厨房を出ようとしたとき、ミンさんに呼び止められる。

「今日はどこ行くんだ？　上野？　ああ、じゃあちょうどよかった。ついでに行ってきてもらいたいとこがあるんだ」

「上野に、ですか?」
「いや、北千住」
どこがちょうどいいんだ。北千住と上野って、ついでっていう距離じゃねえぞ。
「なんか文句あんのか。おまえが汚(よご)しまくったエプロンがもうボロボロで、新しいのがないと回らないんだよ。注文したのが今日できてるらしいから取ってきてくれ」
たかがエプロンでなんで北千住くんだりまで、と抗議しようとした僕の手に、ミンさんはメモ用紙を押しつける。住所と電話番号、それから『わかぎ手芸店』という店名らしきもの。
「知り合いがやってんだ。特注品なの。送るっつってたけど、今日中に欲しいし、おまえ受け取ってきて」
勝手口から押し出され、目の前で戸が閉まった。

その手芸店は、北千住駅前のマルイのそば、小さなビルの二階に入っていた。手芸店というとファンシー雑貨店の延長みたいなものを勝手にイメージしていたのだけれど、その店は入り口を入ってすぐの両手の壁にいきなり天井(てんじょう)までの高さの木棚(きだな)が並び、色とりどりのリネンや麻(あさ)の生地(きじ)がぎっしり陳列(ちんれつ)されている。卸(おろし)売(う)り問屋みたいだ。
リボンや刺繍(ししゅう)糸(いと)の一角は僕の想像していた雰囲気(ふんいき)で、女の子たちが群がってたいへんなにぎわい。あからさまに場違いな僕は、なるべく客に気づかれないようにと棚の陰を歩いて店の奥に向かった。

カウンターのあちら側には、店のロゴ入りのエプロンをつけた若い店主（たぶん）の姿があった。品よくまとめた短髪に眼鏡が似合う、さっぱりした美青年で、なるほどいかにも女性客に人気がありそう。女子高生っぽい娘たちが、さっきからずっとレジの方をちらちら見ているし。繁盛している理由はそれだけじゃないだろうけれど——と思いながら近づいていった僕は、カウンターを挟んで店主と話し込んでいるもう一人の男の存在に気づき、硬直した。

「……だから、中華柄（がら）は細かすぎてアップリケが抜けねえんだよ」
「レーザー使ったらどう？　うちにもあるけど」
「それ、千鳥ステッチでつけられるか？　仕上げのたびにいちいちここまで来るのも――」
　喋（しゃべ）っていた男も、途中（とちゅう）で言葉を切って顔を上げた。その猛獣（もうじゅう）の眼（め）と視線が合った一瞬（いっしゅん）、僕はここが手芸店だということを忘れた。殺される、とさえ思った。
「よ、……んだいめ？」
「……おまえ……なんでここに」
　さしもの少年ヤクザ組長も、あまりの事態に少し青ざめ、それだけ吐（は）き出した。店主が不思議そうに僕らの顔を見比べる。
「えっと、あの、え、え？　あの、僕はミンさんに」
　もちろん先に冷静さを取り戻したのは四代目の方だった。すさまじい形相（ぎょうそう）で歩み寄ってくると、店主さんが「ヒナ？」と呼び止めるのも無視して僕の襟首（えりくび）をつかみ、そのままカウンター奥の裏口まで引きずっていく。
「ちょ、四代目、ま、待って苦しい」
　薄（うす）暗く蒸し暑い階段室に連れ出されたところで、ようやく壁に投げつけられ、解放される。
「なにしに来た。なんでこの店知ってるんだ」
「い、いや、だからミンさんに頼まれて」

「ああ……マスターか。くそ」
四代目は煙草(たばこ)を丸呑(の)みしたみたいな顔で吐(は)き捨てる。
この人、コンクリートジャングルをうろつくスナイパーウルフ（自分で書いてて笑ってしまうが）的な外見とは裏腹(うらはら)に、趣味の手芸を部下たちにひた隠(かく)しにしているという可愛(かわい)い面があるので、アリスたちのからかいのねたになっている。
「いいか、この店のことはだれにも喋(しゃべ)るんじゃねえぞ」
襟首(えりくび)をつかまれ、ぎざぎざのナイフみたいな四代目の言葉が僕の腹に突き立てられる。
「……他にだれが知ってるんです？」
「マスターだけだ」
それは困った。僕はなぜか口が堅いと思われているのだけれど、自分から進んで他人のことを喋(しゃべ)らないってだけで、たまに独り言で思考が筒抜(つつぬ)けになっているらしいのだ。
「喋ったら殺す」
「わ、わかりましたよ……」
「とっとと用事済ませて消えろ」
「――ヒナ？　なにしてんの。だめだよお客さんに迷惑(めいわく)かけちゃ」
声がした。四代目が僕を放して振り向く。扉(とびら)が細く開いて、店主さんの顔がのぞいていた。

「そっちの子は？　ミンさんがどうとか言ってなかった？」
僕にもにこやかに声をかけてくれる。
「とにかく中に戻りなよ。ここ暑いよ」
店主さんが四代目のことを「ヒナ」と呼んでいることも仰天だったけれど、それ以上に驚いたのは、四代目の方があちらを「ヨシキさん」と呼んだことである。この人がだれかをさん付けするところなんてはじめて見た。
「アリスのぬいぐるみの眼がどうしても見つからなかったし、縫製もぼろぼろで徹底的に直さないといけないから、ヨシキさんに頼んだんだよ」
カウンターの裏手の奥まった場所、店内からは見えない位置に僕らは膝を突き合わせて座っていた。作業台にはステッチングフープにとりつけられた作業途中の刺繍生地や、彩り豊かな糸を散らした大きな針山が置かれている。
「遠いのにヒナはよく来てくれるよね」とヨシキさんは笑う。この人だけは、店番もしないといけないので、店内が見える位置の椅子に腰掛けたままだ。
「そりゃ、ここでしか手に入らない生地とか糸とかたくさんあるからな」
四代目はむくれて、座ったままジーンズのポケットに手を突っ込んでいる。

「いやぁ、そんなことないんじゃないかな。都心で探せばいくらでもあるよ、ユザワヤとか」
「べつにいいだろ、どこで買ったって」
　どういう知り合いなんだろう、と二人を見比べながら思う。ヨシキさんは肌がえらく若々しいので年齢がよくわからない。目元の感じからして、二十代後半っぽいんだけど。そのイケメンぶりにはあまりセクシーさがなくて、たとえばヒロさんの美貌をシャンパンとするとヨシキさんはペリエみたいな感じ。でも、笑いかけられるとどきっとしてしまう。
「ええと、藤島……くん？　だっけ？」
「え、あ、はい。ナルミでいいですよ、みんなそう呼んでるから」
「なんでヒナは園芸部って呼んでるの？　どういう関係？」
「あー、それは入り組んだ事情がありまして」
「組員、じゃないんだよね？　まだ高校生みたいだし」
　僕は何度もうなずく。ヨシキさんは素敵な笑顔をつくる。
「ヒナって昔から友達いないんだよ。悪さする仲間か、馬鹿な手下か、どっちか。だからナルミくんみたいな友達っぽいのは貴重だよね」
「ヨシキさん、やめてくれ。園芸部はそんなんじゃねえから」
　四代目はにべもない。
「そんなんじゃないって、じゃあどんなん？」

「あのな。こいつはアリスの助手だ。前に話しただろ、情報屋みたいなことやってるガキがいるんだよ。そのつてで何度か貸し借りつくって、なりゆきで盃交わして、ってだけだ」
「盃？　あれ、組員じゃないんでしょ？」とヨシキさんは首を傾げる。
「……兄弟盃だ」
「友達じゃないか」
「だからちがうっつってんだろ。義兄弟だよ」
「友達より濃いじゃないか」
　獣みたいに喉を鳴らして立ち上がる四代目を見て、ヨシキさんは乾いた笑い声をあげた。さらに四代目が文句を言おうとしたとき、カウンターの方から女子高生の客が呼ぶ声がして、ヨシキさんはそっちに身体を向ける。とたんに四代目は、研ぎすぎた鋸のような目つきで僕をにらみつけた。
「余計なこと喋るんじゃねえよ」
「喋ってるのは主に四代目とヨシキさんなんですけど……」
　ヨシキさんはすぐにこっちに向き直った。座ったまま接客したり僕らと喋ったり、銭湯の番台みたいだ。
「女の子たちがヒナのこと気にしてるよ。弟みたいなもんだって言っといた」
「またてきとう抜かしやがって」

「そんなに外れてもいないだろ」とヨシキさんは四代目の肩をどやしつけて、また笑う。狼の眼はどんどん険悪になっていく。

「え、ええと。じゃあヨシキさんは僕のお兄さんでもあるんですね」

　和ませようとして口にした一言が大失敗だった。四代目だけじゃなく、ヨシキさんまで一瞬固まってしまったのである。

「ごごごめんなさい、調子に乗りましたっ」

　あわてて恐縮する僕の足の甲を、四代目が思いっきり踏んづけた。

「ああ、いや、そういうことじゃなくてね。ヒナも暴力やめなさい。ほんとに昔から口と手と足が同時に出るんだから……」

「俺は殴るのも蹴るのも必要な国で生きてんだよ」

「あのねナルミくん、こいつ今はこんなにつっぱってるけど、けっこうちゃんとガキだったんだよ。ぬいぐるみ好きなのにUFOキャッチャー下手くそでさ、泣きながらお金借りに来て」

「泣いてねえよ。やめてくれ」

「あと昔はお酒弱くて——」

　ヨシキさんの口から次々と、ヒナちゃんにまつわる衝撃の事実が明かされるので、僕は笑っていいのかどうかもわからず、両膝に指をたてて二人の顔をかわりばんこに見ていた。いったいこの二人、どういう関係なんだろう。ヨシキさん、平坂組のOBとか？　でも、組は四代目が初代なんだっけ。

「ヒナ、どういう関係なのかほんとのこと教えてもいい？」

「ふざけんな」

「だってさ」ヨシキさんは苦笑するのだけれど、しれっと喋(しゃべ)り出す。「あのね、ヒナの昔の彼女が手芸好きでさ、うちの常連さんだったの」

　四代目って彼女いたの？　え？　あ、いや、そりゃ、いても不思議じゃないけど、なんか全然そういうの想像できない。喋んなっつってんだろ、と不機嫌(ふきげん)顔になる四代目を無視して、ヨシキさんは話を続ける。

「ヒナは彼女に頼まれて、よくうちにお遣(つか)いに来てたわけ。そのうち彼女に仕込まれてヒナも手芸始めて。今じゃ常連客」

　四代目はふうーっと息をついて腕組(うでぐ)みした。

「園芸部、おまえ後で記憶(きおく)が消えるくらい殴るからな」

　そんな恐ろしいことを囁(ささや)かれる。僕は言いつけられた用事もほっぽり出してそのまま逃げようかと真剣に思った。しかしそんなことをしたら、戻ったところでやっぱりミンさんに殴られるにきまっている。記憶どころか生命(いのち)が消えるくらい。

「あ、ミンさんの用事？　エプロンね、できてるよ。そうだ、その用事だったっけ。ちょっとヒナ、裏(うら)行って取ってきてくれる」

　四代目はぶつくさ言いながらも、奥からビニル包装されたエプロンを持ってきてくれた。

「ちょっとロゴデザイン変えてみたよ。のれんも作り直すなら安くしておくってミンさんに言っておいて」
「……あ、これヨシキさんがデザインしてたんですか」
「そうそう」
　平凡（へいぼん）な店名なのに、センスよくまとめるものである。真っ黒なエプロンに映える配置だし、僕はちょっと感心してしまう。
「受け取りが終わったんならさっさと帰れ、おまえはそもそも上野に用があるんだろが」
　四代目が不機嫌（ふきげん）満面で僕のすねを蹴飛（けと）ばし、立ち上がらせた。

　ビルのそばの有料駐車場には四代目の深緑（しんりょく）のマセラティが駐（と）めてあった。後部座席には緩衝材（かんしょうざい）で厳重に包まれたクマのぬいぐるみが座っているのだから、たぶん事情を知らずに街で見かけたら、一週間くらいは思い出し笑いできる。
「上野まで乗せてってくれたり……はしませんよね。いえいえ。わかってます」
「上野に寄ってるひまなんてあるか」
　僕が駅の方に歩き出そうとしたとき、四代目のポケットで電話が鳴った。携帯を耳にあてた四代目の顔がどんどん険しくなるので、僕はその場を離れられなくなる。なんだろう？
「園芸部、予定変更だ。乗れ」

携帯をポケットに押し込んだ四代目は、苦り切った顔でうめき、運転席に滑り込む。
「え、え？」
「いいから乗れ。ライヴハウスには断り入れろ、俺からも謝っとく」
「な、なにかあったんですか」
　助手席に回り、外国車のよくわからないシートベルトに苦戦しながら訊ねる。
「うちの組のやつが赤坂でゴタやった。来月のライヴやるとこだ」

　運転中の四代目にかわって、僕が携帯で組員やアリスに電話をかけて指示を飛ばした。
「うん、そう、テープは今から電柱が持ってくから、解析かけといて。え？　リッリルウ？　ってクマのぬいぐるみのことだっけ？　ああ、うん、ええと」
「材料は調達できたから明日には直るっつっとけ！　ぬいぐるみごときの心配してる場合じゃねえんだよこっちは！」運転席で四代目が毒づいた。
『ぼくの大切なリッリルウを「ぬいぐるみごとき」とはなんだい！　四代目が組を気遣う心とぼくが友を案じる気持ちとにどれほどの差異があるというんだ！』
　電話口の向こうでアリスが憤慨して髪を振り乱し飛び跳ねる様が見えたような気がした。

「僕に言われても困る……」
　僕の頭越しに二人は大声で言い合って、やがて通話はぶっつり切れた。ちょうど車は首都高にのったところで、すさまじい加速度が僕をシートに押しつける。時速百キロくらいは出ているはずの並走車が、ものすごい勢いで後ろにすっ飛んでいく。
　僕は運転席をちらと見た。ガラスの断面みたいに濁ってざらついた無表情が、狼の顔にはりついている。声をかけていいものかどうか、しばらく迷う。
　赤坂にある大規模ライヴハウスは、今回の企画のメイン会場の一つだった。そこに平坂組の黒Tシャツが十数人で押しかけ、スタッフルームを見せろと言い張り、スタッフがアポイントなしでは無理だと拒むと、暴力を振るったのだという。暴漢たちは、全員すぐに逃げた。幸いと言っていいのかわからないけれど、ホールスタッフはまだ警察に通報していない。平坂組の、悪名の方が役に立ったわけだ。なにをされるかわからない、という思いから、警察よりも先に組長の方へ連絡が入った。
　まさか、という思いがある。いくら平坂組が馬鹿ぞろいでも、こんな大切な時期に組長の顔に泥を塗るような真似をするはずがない。というか、あり得ないだろう。あいつら、会場がどこかもわかってないはずだし。
「……事務所に全員集めたって岩男が言ってましたけど」
　おそるおそる報告する。
「そっちはいい」四代目は硬い声で即答した。「アリスんとこに直接行く」

アリスのところに？　僕は四代目の顔をもう一度まじまじと見つめてしまう。

ホールの防犯カメラに、暴行者たちの画像が残っていたのだ。ヒロさんがなんとか手を回してその画像を即座に回収した。今、アリスに回して解析してもらっている。いったい、だれがそんなことをしたのか。

僕はようやく気づく。四代目は、部下がやったとは思っていないのだ。疑っているのなら、ヒロさんにそんな面倒を頼まずとも、組員を全員集めて詰問すればいい。

疑っていないからこそ——探偵に頼んだ。

気づくとマセラティは首都高から下りていた。渋滞していないバイパスを嗅ぎわけ、見慣れた街に分け入っていく。夏の陽は傾き始めたばかりで、背の低いビルが道路に色濃い影をわずかに延ばし、肩や太ももをむき出しにした女の子たちがブティックやカフェやギャラリーの並びの前を行き来している。四代目が荒っぽい運転で走らせるマセラティに、だれもがまるで運ばれていく不発弾でも見送るような視線を投げてくる。

袋小路手前の有料駐車場に四代目は車を突っ込んだ。車外に出ると、焼けたアスファルトのにおいが脇の下の汗と混じって肌にべとつく。僕らは道の向こうに見える『はなまる』の暖簾を目指して走り出した。

ミンさんへの挨拶もそこそこに非常階段を駆け上がり、NEET探偵事務所のドアを引く。ぎんぎんに冷房された部屋の中に入ると、気温差で目まいがする。

「ほんとうにリッリルウの眼(め)は調達できたのだろうね。あの奥深く愛(いと)おしい琥珀(こはく)の輝きが戻らなければ認めないよ、取りつける前に見せてくれたまえ」

ベッドの上で振り向いたアリスは、四代目をみとめるなり、キーボードを叩(たた)く手を一瞬(いっしゅん)たりとも止めずに言った。四代目が嘆息(たんそく)してポケットから取り出した、小さなビニル袋入りのボタンを目にすると、探偵は満足げにうなずいてまたモニタに向かってしまう。

「それより解析(かいせき)は終わってんのか」

四代目がずかずかと寝室に踏み込んで、ベッドの端(はし)に膝(ひざ)をついて乗り上がり、モニタの一つをのぞき込む。おそらく防犯カメラのものだろう、粗(あら)いモノクロ画像が映っている。黒Tシャツの男たちの背中。一人がカメラの方を向いて、胸の白いマークが見える。丸に揚羽蝶(あげはちょう)、平坂(ひらさか)組の代紋(だいもん)だ。音声はないので、黒Tシャツたちがホールスタッフとおぼしき若者を殴(なぐ)り倒すところも、ひどく非現実的に見える。

ベッドには、平坂組の黒Tシャツの現物が広げられていた。

たしかに、同じものだ。それじゃあ。

「これだけ粗(あら)い画像だけれど、解析して重ね合わせてマッチしたよ」

アリスが温度のない声で言って、四代目がうなずく。僕にだって、二つのことが即座にわかった。義兄と顔を見合わせ、その認識を、無言で確かめ合う。

代紋は、ほんものだ。たしかに、平坂組のユニフォームなのだ。そして――

着ている連中は、組員じゃない。見たことのない顔だ。

着信音が鳴って、四代目がポケットから携帯を引き抜く。

「……ああ。画像は見た。いい、集めて訊くまでもねえ。……組のもんじゃない。……わかってる。……なくなってるんだな？　鍵はどうなってる？　……ああ、うん、わかった。少佐に頼んで調べさせる。今からアリスがビラを作る、絶対にこいつらを捜し出せ」

通話が終わり、携帯を閉じた四代目の手つきに、ようやく僕は動揺と怒りの兆しを見つけた。ここに来るまでは、ひょっとするとわずかに部下を疑う気持ちがあったのかもしれない。それを押し殺すために、無表情を通していた。その重しが今、なくなった。

「岩男から、……ですよね？　声がちょっと聞こえました」

四代目はうなずく。

「うちのビル二階の倉庫、憶えてるか」

平坂組の事務所の、一つ下の階。二度、足を踏み入れたことがある。どちらも、ろくでもないけれど忘れられない、儀式のために。

「あそこにしまってあった、うちのTシャツの予備が消えてた」

僕はなるべく音をたてないように唾を飲み下す。もう間違いない。計画的な犯行だ。明らかに平坂組に汚名を着せるために、だれかが。

「あそこの鍵を持っているのはだれだい」

アリスが背を向けたまま訊ねた。

「俺だけ――」

　四代目の口の中で、声がこわばる。言いかけた言葉が複雑な形によじれて、表情にいくつも波紋を散らす。どうしたんだろう。なにか思い出したんだろうか。

「……四代目？　どう――」

「なんでもない」

　強くかぶりを振って、僕の声を払いのける。

「少佐も借りる。侵入経路を調べる。組をなめてる連中だ。絶対に見つけ出して吊してやる」

　四代目は僕とアリスを残して、探偵事務所を出ていってしまった。しばらく、老いぼれのエアコンが咳き込む音と、それに混じる打鍵音だけが僕を取り巻いていた。

　向き直ったとき、ちょうどアリスもキーボードから手を離して、こっちを向くところだった。ぶつかった視線に、アリスは少し気恥ずかしそうな顔になって、僕の膝に目を落とす。

「……まだ、四代目に頼まれた仕事を続けるつもりかい？」

「うん。……どうして」

「また暴力だよ。いやな予感がする。ぼくに止められない哀しみが、美しく縫い上げられたこの世界の縦糸と横糸を浸して蝕んでいくのが聞こえる」

僕にはそれは聞こえなかったけれど、アリスの目にたまったものは見えた。死人の肌（はだ）みたいな色の無力感だ。

「それに、この件は、ぼくらの友への明確な悪意が感じられる」

「……うん」

そうだ。今までの事件は、けっきょくのところどうしようもない悲劇か、どうしようもない喜劇のどちらかだった。舞台の上にいるのは迷い人と道化だけだった。

でも、この事件はちがう。

傷つけようとしている、だれかがいるのだ。そう考えるとぞっとする。

「それでもきみは——」

言いかけ、アリスはぷいと横を向く。

「ふん。日給に目が眩（くら）んだ拝金主義者になにを言おうと無駄（むだ）だね。わかっている」

「いや、べつに金のためにやってるわけじゃ」

「うちの事務所の雑用など無給だからね。いくらでもおろそかにすればいい。だからといって固定給を出したりはしないからな、ぼくにもニートの矜持（きょうじ）がある」

その矜持（きょうじ）は要（い）らないから棄（す）てちゃいなさい。しかし、なにをそんなに怒っているんだろう。いじけるアリスなんてはじめて見た。僕はそうっとベッドに這（は）い上がって、アリスの視界に回り込む。

「……ええと。ちゃんと、アリスのことも大切に思ってるよ?」

万華鏡の中に薔薇の花びらを落っことしたみたいに、アリスの顔が一瞬で真っ赤になった。

「……な、な、な、なんだとっ?」

髪を浮かせて何度も跳びはねながら、ベッドの奥の方へと後ずさるアリス。

「な、ななな、なんだきみはいったい、いきなり妙なことを言い出してっ」

「だってアリスのことおろそかにするなって」

「そんな意味で言ったんじゃないぞっ」

じゃあどういう意味だよ。アリスは僕との間にぬいぐるみを大量に積み重ねて垣根をつくり、その向こう側からわめいた。

「だいたいきみは、自分の身だって平気でなおざりにするくせに、他人の心配などできる身分じゃないだろう!」

「ああ……うん、ごめん。いっつも心配かけてるのは僕の方だよね」

「きみの心配なんてしたことは金輪際ないぞっ」

ぬいぐるみの城壁が決壊した。

「い、いいかい!　ぼくが案じているのはきみへの投資が回収できるかどうかだけだよ!　負債を給料で帳消しにしたこと、忘れているんじゃあるまいね!」

「忘れてないよ。うん。大丈夫」

ベッドの下にまで転がり落ちたウサギとイルカを拾って、アリスのそばに戻す。

僕は探偵助手なのだ。この場所のために、この小さな探偵のために、血の最後の一滴までも、使わなきゃいけない。

アリスは涙の兆しがたまった目でじっと僕をにらみ、それからキーボードの方を向いてしまう。長い黒髪がひるがえり、僕の手の甲を優しく打った。

やがてアプリケーションが作業を終えたことを示すダイアログがモニタの上に踊り、プリンタが静かに、容疑者たちの顔写真を並べた手配書を吐き出し始めた。

2

人混みと暑気が渦巻く駅前の巨大バスロータリーから、テレビ局の方へと延びる坂をいくらかのぼり、左折したところに立っている朽ちかけたビルが平坂組の根城だ。三階が事務所と書斎、二階が催事場兼物置。

赤坂での事件発生の翌日。普段はまず用のない二階の鉄扉の前で、僕と四代目は落ち合った。まだ午前十時だというのに、七月の太陽がコンクリートに食い込むぎりぎりという音が聞こえそうなほどの陽気だ。鉄扉も目玉焼きが作れそうなくらい暖まっている。

しかし暑苦しさの原因はそれだけではない。階段の踊り場までぎっしりと整列した、全員上半身裸の筋骨隆々たる平坂組メンバー。

「……え、ええと。なんで脱いでるんです?」なんかの祭りか？　地球温暖化が進むからやめてくれないだろうか。

「押忍。Tシャツ盗まれたのは俺らの責任なんで!」

「壮さんに返上しました!　犯人挙げるまで着ません!」

3

当時、十五歳で花の中卒だった平坂錬次が、高校にも行かずにストリートで組み上げた不良チームの名前は、『修羅道』といった。都会の少年のネーミングセンスとはとても思えないこのチーム名は、哀川翔が主演するVシネのタイトルに由来するのだそうだ。

「とにかく、いやもうほんと強かったですよ、あの人。四天王っスから」

平坂組メンバーの中でも最古参の電柱はそう語る。

「壮さんより怖かったですね。笑いながら殴るんで」

「おれ、その頃のことあんまり知らないんだよな」運転席でヒロさんがつぶやいた。

平坂組の事務所から『ラーメンはなまる』に戻る車の中である。座高がありすぎて、電柱の頭は助手席の天井につっかえている。

僕とアリスは後部座席で、ぬいぐるみの壁を挟んで座り、じっと黙ったままだ。

「叔父貴はちゃんと高校行ってましたからね」と電柱。

「一年だけね。そのあと、テツとつるみ始めて……もうその頃には平坂組ができてた」

「もともとこのへんのワルいのはチームなんて組んでなかったんスよ。そういうの馬鹿馬鹿しいって空気が、やっぱりあったんで」

　そりゃそうだろうな。一昔前の千葉とか神奈川ならともかく、もうそんな時代じゃない。つっぱるのも群れるのも、仮想敵あってこそだ。大人はもう子供の敵をやっている場合じゃなくなってしまった。

「でも平坂さんが、任侠やろうぜ任侠、って言い出して、なにいってんのこいつ？　みたいな見られ方してたんですけど、文句垂れたやつはボコボコにして」

　電柱自身は、『修羅道』のメンバーではなく、のさばってきた平坂錬次を疎ましく思いながらもコンビニで管を巻いていただけの中退生だったという。

　しかしそこに、大阪からやってきたもう一人の火種が加わる。

「壮さん、東京に出てきてすぐは女と暮らしてたらしいんスよ」

「ええええ」同棲までしてたの？　なんかどんどんイメージが崩れていく。あの人、恋人の前でどういう顔するんだろう。やっぱりあの眉に寄せた皺はそのままなのかな。

「あ、それはおれもちょっと聞いた」とヒロさん。「ヒモだったんだよね。彼女がお水系で、働いてる店が錬次のチームとトラブって、四代目が殴り込んで……とかそんな話だよ」

「あ、いえ、喧嘩にはならなかったそうスよ」電柱が訂正する。「後から平坂さんに聞いたんスけど、壮さんは『修羅道』のたまり場にナシつけにきて、こんな大勢抱えてるくせに、やくざがケツ持ってる店と揉める

なんてバカかっつって説教したそうです」
「喧嘩じゃん」ヒロさんがつっこむ。
「そこは平坂さんも度量がビッグなんで。そっから二人で組んで、ケツ持ちの後藤田組っつうやくざ追い出して、かわりにチームがバックについたって」
そんな馬鹿な、と四代目をよく知らなかった頃の僕なら思っただろう。ガキの群れが暴力団に楯突いて、あげくシマの一部を奪うなんて、普通あり得ない。
「壮さん、けっこう汚いこともやる不動産屋につてがあったらしくて。俺あたま悪いからよくわかんねえけど、土地とかビルとかの書類いろいろいじって、店いただいちまったって」
やっぱりそんな手か。あの人は、自分がどう思っているかどうかはともかくとして、見事なまでに知能派やくざの資質があるのだ。
「そんで平坂さんと二人でチームやるようになって、壮さんが本気出してから一気に縄張りが増えたんで、名前も変えて、事務所借りて」
「そうだそうだ、前から知りたかったんだけど、なんで平坂の名前にしたの?」とヒロさん。
「なんか、ゴーベン会社はソンゾク会社じゃない方の名前を残すとかどうとかって壮さんが」
うわ。なんかものすごくビジネスライクな理由が出てきた。さすが四代目。
「あと、雛村って名前がいいから使おうぜって平坂さん言ったらしいんですけど、壮さん自分の苗字きらいなんで」

「実家から逃げてきたんだっけ、たしか」

大阪の実家はテキ屋らしいので、たぶん雛村組とか雛村一家とかを名乗っているんだろう。それは雛村という二字を使いたくないのもわかる。

「でも、あの二人は五分の盃なんスよ。どっちが上とか、なかったんです。俺らも盃んときには居合わせました。二人いりゃ無敵だと思ってた。それに壮さんと平坂さんは、盃だけじゃなくて、なんかもっと大事なものも交換したんだそうス」

「……大事なもの？」僕はつぶやきで繰り返す。

「なにかは、二人とも教えてくれなかったスけど。俺らはスーパー兄弟盃って呼んでます。伝説っスよ、伝説」

血よりも濃い酒。それよりも濃い、なにかでつながった二人。

僕はまだ唇に残るコーラの味を、もう薄れている神酒の味を、思い出そうとする。

「その話も錬次から聞いたなあ」

ヒロさんの声は、遠く甘く、ぼやける。

「大事なものってなんだよって訊いたんだけどさ。見せられるようなものじゃないからって。おまえらホモかよってテツがつっこんだら、錬次が『それどころじゃない仲だ』とか笑い出して、四代目めちゃくちゃ不機嫌になってさ。しまいにラーメンひっくり返して大喧嘩になって、全員まとめてミンさんに叱られた」

そんな景色が、あの暖簾の下に、あったのだ。ずっと昔の夢。
「でも」電柱の押し殺した声。「そこまでした二人が、なんで」
僕はけっきょく、四代目に言えなかった。
上野で、錬次さんと逢ったこと。ライヴハウスに近づくなと言われたこと。
あれがかつての四代目の相棒、平坂錬次だと確信に至っても。いや、むしろ、確信してしまったからこそ、言えなかった。
なんで錬次さんが——ともに平坂組を築いた人間が、あんなことを。
「平坂錬次が東京を去った理由を、きみたち組員は知っているのかい」
今までカピバラさんにあごをうずめて押し黙っていたアリスが、急に言った。僕はびっくりして、クマのモツガディートの肩越しに、彼女の顔を見つめてしまう。
「……いえ。姐さんは知ってるんですか」
「ぼくもまだ知らない。そもそもぼくが四代目と知り合った頃には、平坂錬次は東京にいなかったからね。でも、その道筋はわかる。どの墓を掘り起こせばいいのかはね」
「壮さんは、平坂さんの話になると黙って殴るんス。だから、だれも訊けなかった。……あの二人は、じゃあ——五年前に別れたとき、もう敵同士だったんスか」
「それもまだわからない」

そこでアリスの言葉は途切れた。その先には真っ暗な沈黙しかなかった。
探偵だけがたどり着けるその真実を、しかし、求める理由がない。なぜなら、だれもそんなことを依頼していないからだ。

「俺まで送ってもらって、ほんとすんません叔父貴」
ラーメン屋の前で停まった車から真っ先に降りた電柱は、深々と頭を下げてルーフに額をぶつけてしまう。
もともと同乗したのは、僕らの出がけに、電柱も『はなまる』に用があると言い出したからだった。ヒロさんが乗っていけばと言うと最初は遠慮したけれど、道中話を聞きたかったこともあって、僕からも一緒に乗るように頼んだのだ。でも、なんの用事があるんだろう？　と、暖簾をくぐる巨体の背中を見ながら思う。
「暑くて茹だってしまいそうだ」
ドアの隙間から侵入してきた熱気に、アリスは顔をしかめる。もう陽が落ちてだいぶたっているというのに、アスファルトは染み込んだ熱を絶賛放出中で、昼間よりも暑さがひどい気がする。店はアイスクリ

ーム目当ての客で今夜も満席だ。店外の、ひっくり返したビールケースに座布団をのせた席も埋まっている。
「ナルミ、マスターに氷あずきを頼んでおいてくれたまえ。それから夕食はまったく食べる気がしないが、それでも無理矢理食べさせるつもりならば冷やしつけ麺の麺ぬきで。ヒロはぼくの友を事務所に運ぶのを手伝うこと」
　僕がアリスの手を引いて車から降りたとき、店内がざわつくのが聞こえた。振り向くと、暖簾の真下で、驚いたことに電柱が土下座している。サラリーマン客が丼を抱えて腰を浮かせ、電柱から離れようとする。
「……あ、あ、あのっ、だめですよう、こんな場所で、と、とりあえず裏の席に、アイスかなにか出しますから」
　外に給仕に出てきていた彩夏が弱り果てている。僕の方に困り顔を向けてくるのだけれど、僕だって驚いて立ちつくすばかりだ。
「なんの真似だよ、お客さんいるんだから迷惑だろうが」
　カウンターの向こうで、ミンさんが眉をひそめて言った。電柱が顔を上げる。
「平坂さんが戻ってきたんス」
　ミンさんはほんの少し頬を動かしただけだった。

「うちの組の、敵に回ってます」
「だからなんなんだ。おまえら馬鹿なガキの抗争ごっこなんざ知るか」
「いくら壮さんでも、平坂さんが相手じゃ、どうなるかわかんねえ。それに俺ら、あの二人が潰し合うのなんて見たくねえス」
　中華鍋を焦がす火と煙の向こうで、ミンさんは視線を落として黙っている。
「でも、壮さんは組の内輪の問題だからって。姐さんの力も、もう借りないって言ってます。ひょっとしたら平坂さんの居場所つかんだとこで、ひとりで落とし前つけに行くつもりかもしんねえ。平坂さんが相手なら、壮さんも……無事じゃ済まない」
　僕は酸っぱい唾を飲み下す。
「マスターならッ、平坂さんも壮さんも止められるでしょう、お願いしぁす！」
「なんでそんなことしなくちゃいけないんだよ。なに考えてんだ馬鹿」
　ひどく冷たい声に聞こえた。僕も電柱の背後から、思わずなにか口を挟もうかと思ってしまったくらいだ。
「でもマスターならあの二人より強ぇんだ、他に止められるやつなんて」
「他にお客さんいるんだから騒ぐな。あのな、わたしはラーメン屋だぞ」

ミンさんはにべもなく言って、それからできあがった中華丼を彩夏に渡した。お待ちどおさまです、と彩夏は店の外の客におそるおそる丼を運ぶ。
「壮とか錬次とかがうちに来たら、ラーメン食わしてやるよ。アイスはサービスしてやる。話があるってんなら聞くし、まだくだらないことしてんなら引っぱたくよ。それくらいはわたしの仕事だ。でも」
　そこでようやく、ミンさんは電柱に目を向ける。あるいはその視線は僕やアリスに、運転席のヒロさんに、そして線路と駅を隔てた向こうの四代目に、それからこの東京のどこかにいる錬次さんに向けられたものかもしれなかった。そんなときミンさんの眼差しは、雪でつくったお菓子みたいに優しい。
「連れてくるのは、おまえらの仕事だろ」
　電柱の両手が、アスファルトの上にばたっと落ちた。うなだれる巨体をちらと見て、アリスがつぶやく。
「行こう。ぼくらには、ぼくらの仕事がある」
　裾を引っぱられ、僕は曖昧にうなずきながら、店の裏手へと歩き出す。トレイを胸に押しつけて立ちつくしていた彩夏が、戸惑った視線を一瞬だけこっちに投げてきた。でも、僕よりもずっと強い彼女は、うつむいたままの電柱に再び歩み寄る。
「あ、あの、なにか注文します？　今、もいっこビールケース持ってきて席つくるから」
　アリスがぐいぐい袖を引っぱって歩くので、聞こえたのはそこまでだった。僕らは黙って非常階段を上る。明かりと、肌をとろかす湯気と、声と、スープの香りとが、遠ざかる。
　これほどに優しい場所が、ずっとここにあった。かつては錬次さんのためにも、ここにあったはずなのだ。

それを棄てなければいけないほどの――なにがあったんだろう。

クーラーかけっぱなしで肌寒いくらいの事務所に入ったアリスは、そのままぽてっとベッドにうつぶせに倒れた。長い外出で、そうとう無理をしていたのだろう。

でも、ぬいぐるみ搬入作業が終わると、首だけこっちに向けてヒロさんに言った。

「もう大丈夫。騒がせてすまなかったとマスターに謝ってきてくれたまえ」

得心したようにヒロさんはうなずいて、ぬいぐるみをベッドの端に積み上げ、踵を返して玄関に向かう。

「おれ、もう一度四代目んとこ行ってくるよ」

三和土のところで振り向き、ヒロさんは言った。

「ほんとに依頼しないのか、もっぺん訊いてみる。四代目は脳みそがやくざ遺伝子でいっぱいだから、組のメンツとかそういうつまんないこと考えちゃうんだよ。仕事だって忙しいんだから、面倒ごとはおれたちニートに任せてくれりゃいいのにな」

「好きにしたまえ」

アリスの答えは、思いがけず冷淡だった。ぼくだってヒロさんと同じ気持ちだったし、アリスもそうだと思っていたのに。

「あーくそ、こんなときにテツはどこほっつき歩いてんだよ。あいつの出番だってのに」

テツ先輩がいれば。四代目を殴ってでも――いや、事態がもっとこじれるだけのような気もする。でも、こういう血のにおいがする事件のときに、いてくれないのはやっぱり心細い。

「アリスも、あんまり無理するなよ」

靴を履きながら、最後にヒロさんがぽつりと言った。

「生まれてこのかた、無理をしなかったことなど一瞬たりともないよ」

シーツに両腕を突っ張って身を起こしながらアリスはぼそっと答えた。

なんだかそっとしておいた方がよさそうな気がして、僕もヒロさんに続いて部屋を出ていこうとすると、鋭く声が飛ぶ。

「きみまで出ていってどうする。そこに正座したまえ」

毛布を肩に巻きつけてぬいぐるみたちに埋もれているアリスの眼は、曇っていた。だから僕は言う通りにベッドの足下に膝をつくしかなくなる。

僕が買ってあげたカピバラさんを薄い胸に押しつけ、顔を半分隠しているので、アリスの視線はかえって硬く、氷の釘みたいに僕をその場に縫い止めていた。

「ぼくが四代目から受けている依頼は、Tシャツ窃盗犯グループの手配書の作成だけだ」

親指だけで打鍵するような口調でアリスは言った。

「もう完遂した。捕(と)らえられた男も、たしかに犯行グループの一員だときみが確認した。今のぼくは情報の海面をたゆたう一対(いっつい)の眼に過ぎない。なんの力も、意志もない。だからきみに答える義務はない。それでも問う。なにを知っている？」

　僕はそのまま腰砕(こしくだ)けに床(ゆか)の上へと這(は)いつくばりそうになった。必死に腕をつっぱって、こらえる。もうアリスの目を見られない。冷房の風を浴びているはずの、首筋が熱い。

「自分で気づいていないのかもしれないけれど、きみは雛村壮一郎(ひなむらそういちろう)の眼(め)を直視できる数少ない人間の一人だ。それが、今日は目をそむけっぱなしだった。上野で、なにがあった。なにを隠(かく)しているんだい」

　様々な言葉が僕の中を巡(めぐ)った。泣き出したり、怒ったりしたらどんなに楽だろうと思った。でも、そんな理由もなかった。

　僕はただ勇気がなくて、口ごもっていただけなのだから。

「知ることは死ぬこと」

　アリスのつぶやきが喉(のど)に打ち込まれて、僕は引きずられるままに顔を上げるしかなくなる。

「きみの、その部分はもう死んでいる。だれにも癒(いや)せない。でもぼくはニート探偵(たんてい)、死者の代弁者だ。死を共有することなら、できる」

　僕の、震(ふる)える唇(くちびる)の奥の方で、こわばっていた言葉が液化する。

何度も、学んだはずだった。黙って抱えていることが、まわりの人々をいちばん傷つける。僕もその傷を負った一人だ。それなのに、アリスにここまで言ってもらわなければ、縮こまっているだけなのだ。

「……平坂錬次に、逢った」

それだけようやく言って、僕は唇を噛む。

アリスは、ぬいぐるみを膝の上に置いただけだった。その眼に宿る黒は、たぶん、だれもがひとりきりの静かな夜に見上げたことのある空の色だ。

だから、みんな話した。錬次さんとの遭遇場所はどちらも、四代目の指示で訪問した先だ。あれは、つまり、偶然じゃない。僕と錬次さんは出逢うべくして二度も出逢った。

かつて友達だった──義兄弟だった相手を、ぼろぼろにしなければいけなくて、それで錬次さんは東京に戻ってきたのだと言った。影をみんな吸い取ってしまいそうな目をして。

「……なにをするつもりなのか、わからない。でも」

あの人は──苦しそう、だった。

ずっとおちゃらけたことを喋っているか、あるいは人を殴っているか、どちらかでないと呼吸ができなくなってしまう。そんな顔をしていた。

話し終えても、アリスはしばらくなにも言わなかった。立てた膝と胸との間で、僕の買ったぬいぐるみは押し潰されていた。その視線は責めているのでも、嘆いているのでもなかった。

ただ、分かち合っているだけだ。

「……ドクターペッパーを」

ひどく長くて寒々しい沈黙の後で、アリスはようやく言った。

「持ってきてくれたまえ」

指に張りつきそうなほど冷えた赤い缶を、冷蔵庫から取ってきて渡すと、アリスはそこで、はじめてのことをしてくれた。

一口飲んだその缶を、僕の口に突きつけたのだ。

「きみも飲みたまえ。残り全部」

戸惑い、呼気を胸に詰まらせ、声の出し方を見失い、ようやくほんのわずか口に含んだその味が、記憶の中にある、錬次さんと交わした盃の味に混じる。

少量ずつ噛んで飲んだので、缶が軽くなる頃にはもう気が抜けていて、残りを一気に飲み干すと、甘さと香料の感触が喉の内側をべっとりと流れ落ちていくのがわかった。

缶を手にしたまま、立ち上がった。胃袋の中で、アリスの血が静かに僕の肉へと吸い込まれていくような気持ちになった。だから、その目をまともに見られない。

「ごめん。……ありがと」

「謝る相手は、少なくとも、ぼくではないだろう」

「そうだね」

「いいんだ。ぼくだって、助手がいつまでも無能では困るからね。犬のしつけだと思って、何百回でも何千回でも同じことを教えるよ」

「がんばる……」

「どれだけ根を張り枝を伸ばし梢（こずえ）に言（こと）の葉を広げようと、ぼくの手が触（ふ）れられる現実の世界は、ごくわずかだ」

　そこでようやくアリスの瞳（ひとみ）に、かすかな湿（しめ）り気（け）が入り込む。

「きみはそのわずかな世界の、一部なんだから」

　うなずいた。

　言葉にしなければ、僕らの世界は、この小さな手のひらの中だけで萎（しお）れていくだけだ。

　言葉にして、伝えなければ。

僕が探偵(たんてい)事務所を出て、真っ暗な非常階段を下りると、ちょうど『ラーメンはなまる』の閉店時間だった。タンクトップを脱(ぬ)いで上半身さらしだけになったミンさんが大鍋(なべ)を洗っていて、エプロンを外した彩夏(あやか)が厨房(ちゅうぼう)の床(ゆか)に水を流している。

そういえば電柱(でんちゅう)はあの後どうしたんだろう。暴れたり泣き出したりしなかったかな。

「ラーメン五杯(はい)食って、ヒロの車で帰ってったぞ」

「そうですか。ならよかった」

食欲があるのは元気な証拠(しょうこ)だよね。なんて考えていたら、自分の空腹に気づく。残念ながらドクターペッパーは腹の足しにもならない。もう店じまいか。一杯食べていこうと思ったのにな、と僕は腹をさすりながら、まだ湯気をたてている寸胴(ずんど)鍋を見る。少し恨(うら)めしそうな顔になっていたかもしれない、ミンさんが僕の視線に気づいて言った。

「なんだ、腹減ってたのか」

「ええ、まあ……最近、姉も帰りが遅いんで、飯(めし)の用意がないんですよ」

「ちょうどよかった。これ持って帰れ」

ミンさんが小さなタッパーを投げてよこす。煮卵が三つ、入っている。

「……えっと。ありがとうございます」

「お姉さんには食べさせるなよ。おまえが全部食え」

「また賞味期限切れかよ！　僕はポリバケツじゃありませんよッ」

「そりゃポリバケツは漬(つ)け物(もの)作ったりとか子供がかくれんぼしたりとか役に立つしな」
「なんかミンさん、最近……僕に冷たくないですか」
「もう遅いんだし、ちゃんと彩夏(あやか)を送ってってやれよ」
　話も聞いてないよ!
　やさぐれた僕が、店の前のアスファルト道路にウンコ座りしてしょっぱい煮卵をかじっていると、後片付けを終えた彩夏が出てきた。
「ミンさん、おやすみなさーい」
「気をつけて。また明日(あした)な」とミンさんが暖簾(のれん)の向こうで手を振る。
「待っててくれなくてもよかったのに!」
　そう言いながらも、彩夏は嬉(うれ)しそうに僕のまわりをくるくる踊(おど)りながら夜道を歩く。
「いや、どうせバス停までは一緒の道だし」
「でも送ってもらうのはじめて!」
　いや、たしか五、六回目だ。冬休みまでの僕はまだひまだったし、彩夏(あやか)も——
「あ、ご、ごめんなさい、ひょっとしてはじめてじゃないの?」
　彩夏が通せんぼするように両腕(うで)を羽ばたかせる。
「うん。実はそう。僕は彩夏が思ってるより気遣(づか)いができるんだよ」

「べ、べつに、藤島くんが気が利かないとか働かないとか甲斐性がないとか言ってないよ？」
「こっちも言ってねえよ」
　彩夏は笑いながら五歩ほど先まで逃げて、また振り向き、後ろ歩きしながら言う。
「そっか。はじめてじゃないんだ。……じゃあ、もっと嬉しい」
　僕も、そのせりふは嬉しいのだけれど、素直に喜べない。彩夏の顔は街灯の下で翳っているのに、それでもまぶしくて、見ていられなくなる。
　彩夏はこの冬に起きた事件で、色んなものを失くした。僕と出逢った頃の記憶も、その一つだ。でも、彼女は『ラーメンはなまる』に戻ってきた。僕のそばに。
　今の彩夏は、こうしてその空白にあったはずの出来事さえ、笑って触れることができる。僕がもし彼女の立場だったとしたら、とてもできないことだ。だから、まぶしい。
「そ、そう？」
「でも、よかった。なんか店に戻ってきたときの藤島くん、すっごい真っ暗な顔してたから」
　僕って他人に表情読まれやすいんだなあ、としみじみ思う。あんまりいい傾向じゃない。
「アリスのとこから戻ったら、もう元気になってたよね」
「うん……」
　単純な男でごめんなさい。
「あたしには無理だな。どうしたら藤島くんが色々話してくれるのか、わからない。アリスはすごいよね」

「え、と、その」
　本人の前で、まるで扱いづらい珍獣みたいに言わないでほしい。
「あたし、ただのラーメン屋のバイトだし、難しいことわからないから、しかたないけど」
「いや、べつにアリスもなにか特別なことするわけじゃないよ。ドクペ飲ませてくれただけだし。一口だけアリスが飲んで、あとは全部僕だったから、正直すごい不味いしつらかったけど、おかげで頭が冷えて考えがまとまったっていうか」
「ええーっ？」
　彩夏はいきなりばんざいのポーズになって仰天する。記憶を失う前と、同じ驚き方。
「飲まされたのっ？　アリスが一口飲んだやつをっ？」
「え、う、うん」
「そ、それっ、だ、だめだよ、なに考えてるの藤島くん！」
　いきなり歩み寄ってきて、腕をばしばし叩かれた。なんだいったい。なにがだめなの？
「携帯出して、アリスに電話して！」
　ものすごい剣幕で言われて、僕は言いなりに携帯電話を取り出してアリスにかけてしまう。通話がつながった瞬間、彩夏に引ったくられてしまった。
「アリス？　あたし彩夏！　藤島くんに聞いたよっドクペ飲ませたこと！」
　電話口で説教を始める彩夏。

「いーい？　間接でもだめなものはだめなの！　アリスが飲んだ缶(かん)の口に藤島くんが唇(くちびる)をつけるんだよ、どういうことかちゃんと考えて！」

　なにを喋(しゃべ)っているのか察した僕はあごが落ちそうになる。彩夏は憤然(ふんぜん)とした顔で、僕の耳に携帯を押しつけた。

『ナルミっ、こ、この恥知らず！』

　またこのパターンかよ！　気づいてなかったならそのままでいてくれないかな！

　さんざんアリスからわけのわからない罵声(ばせい)を浴びせられた後で、彩夏は電話を切って僕のポケットに押し込んだ。

「藤島くんも気をつけてよね！」

「ううん……そこまで気にするほどのことかな。テツ先輩(せんぱい)とか少佐(しょうさ)とか、金がないときは僕が頼んだラーメンを横からすすったりするよ」

「アリスは女の子なのっ」

　叱(しか)られている間に、バス停に着いてしまった。ちょうどバスがどぎついテイルランプを光らせて路肩(ろかた)に横腹をすり寄せるところだった。まだなにか言いたげだった彩夏は、「じゃあっ」と言って駆(か)けていく。砂埃(さじん)まじりの排気(はいき)ガスが僕の顔に吹きつけ、巨大な車体が川沿いを遠ざかっていく。

　とんでもなく長い一日だった。ひょっとして今の僕は、上野動物園に住むカピバラが見ている夢の中の存在なのではないだろうか。そしてまさにバクに食べられつつあるのではないだろうか。そんな馬鹿なこ

とを考えながら、川に背を向け、真っ暗な街路を歩き出す。

帰宅は零時過ぎ。その日のとどめとして、玄関に上がるなり姉に殴られる。

「何日家を空けようと、どこで飢え死にしようと知ったことじゃないけど、自分の洗濯物くらい自分で片付けなさい。どんだけ干しっぱなしだと思ってんの。あと掃除しろ」

側頭部のこぶをさすりながら、二階の自室に上がる。ベッドの上には角ハンガーにつけっぱなしの下着やシャツやタオルが山積みになっていた。それを目にした瞬間、一日分にしてはあまりに重すぎて脳が認識を拒否していた（たぶん）疲労が、まぶたや首筋や肩や二の腕や脇腹や太ももやふくらはぎを貪り尽くし、僕は前のめりに倒れて洗濯物の山に頭から突っ込んだ。もう無理。風呂にも入ってないし歯も磨いてないし腹も減ってるけど、おやすみなさい。

でも、頬にしっとりと触れた糸の起伏に、僕は閉じかけていたまぶたを開く。

白いTシャツだ。袖と裾だけが黒く、肩や脇腹には色彩豊かな放射状の刺繍が散らされている。錬次さんの着ていた服。そうだ、持って帰ってきて洗ったんだっけ。

他の洗濯物を押しのけてベッドに仰向けになり、そのTシャツを広げて蛍光灯に透かす。大事な服なのだと言っていた。返さなきゃいけない。でも、どんな顔でもう一度あの人に逢えばいいんだろう。そもそも、

連絡が来るかどうかもわからない。錬次さんの方だって、四代目のまわりを嗅ぎ回っているのなら、そのうち気づいても不思議ではない。
　僕が平坂組の協力者だということ。
　敵同士なのだ、僕とあの人は。
　けっきょくのところ、この胸のもやもやの大半の正体は、それだ。あの人を敵に回したくない。テツ先輩と対決したときとも、またちがう。錬次さんには、明らかな悪意がある。だからこそ、なおいっそうつらい。
　でも、いちばんつらいのは——
　シャツを枕元に放り投げようとして、ふとそれが目に入る。頭のすぐ横に転がっている三角ハンガーに、黒いTシャツがかけられている。平坂組のユニフォームだ。
「あ……」
　弾かれたように起き上がった。白と黒、二枚のシャツを持ち上げて広げる。
　黒の胸にプリントされた、揚羽蝶の家紋。錬次さんのシャツの刺繍。重ねてみて、ようやく気づいた。これは、放射状の刺繍なんかじゃない。揚羽蝶の家紋の一部だ。たぶん、未完成品なのだ。何色もの糸を使うので、作成途中ではこんなふうに花火が散ったような意味のわからない形状にしかならない。
　大事な服なのだと——錬次さんは、たしかに言っていた。

これなのだろうか。四代目と錬次さんが交換した、『お互いのいちばん大切なもの』。四代目は手芸が得意だから、これを手がけて……いや、でも、形があって見せられるものじゃない、とヒロさんは言っていた気がする。

わからない。僕は二枚のシャツを膝の上に落とし、再び仰向けになる。

『もう、何年生きてても、こいつより大事なダチなんてできへんやろな思て――』

錬次さんの言葉が、交わしたコーラの味と一緒に、浮かび上がってくる。

もし、そうだとしたら。

いちばんつらいのは、四代目だ。

だって、あの人も倉庫の鍵のことをしばらく隠(かく)していた。いつも冷徹で、あらゆる可能性を考慮して合理的に動く、僕よりもずっと探偵(たんてい)業務に向いているとさえ思っていた、あの人が。

信じたくなかったのかもしれない。そうだと思いたい。

それなら、僕はどうする？

そこが限界だった。凝(こ)り固まった疲労感が溶(と)け出して、春先の雪崩(なだれ)のように僕のまぶたを襲(おそ)った。夢さえ見なかった。

✿

翌日は昼過ぎから曇ってきて風も強まり、いかにも夕立が来そうな天気だったので、僕は錬次さんから預かったシャツを二重にしたビニル袋に入れて鞄に押し込み、家を出た。バンドの告知サイトとブログの更新で午前中は全部潰れてしまったので、夕方からのアポまであまり時間がなかった。

四代目は、平坂組事務所の奥の部屋――ベッドや背の低い移動式の書架や事務机や椅子がぐしゃぐしゃに押し込まれた暗い仮眠室にいた。電話しながら片手でキーボードを叩いている。以前はPCにかなり疎かった四代目だけれど、僕がちょっと教えたら、組のマシンは自分で管理できるくらいになってしまった。そんなわけで最近はこの部屋にいることも多く、おかげで二人だけになれた。好都合だった。

「おまえ、十六時からレコード店回りじゃなかったか。デザイナーと一緒に行くんだろ。用もないのに組に来るんじゃねえよ」

電話を切った四代目が、画面から目を離さず打鍵の手も止めないまま言った。こっちのスケジュールまでみんな把握しているのだから怖い人だ。

「用があって来たんですよ」

「錬次の話なら聞く気はねえぞ。ヒロも昨日戻ってきて、うるせえこと言いやがった。どうせアリスになにか吹き込まれたんだろ。おまえらには関係――」

「錬次さんに逢いました」

四代目の腰掛けた椅子が回った、と思った次の瞬間には、僕は襟首をつかまれて壁に背中を叩きつけられている。灼けた狼の両眼がすぐ目の前にある。

「いつ、どこで」

「……黙って……て……すみません、でした、でも」

「いつどこでだって訊いてンだッ」

「四代目は、錬次さんのことに関しちゃ……アリスに、なにも依頼してませんよね。だから、僕も話さなきゃいけない理由がありません」

激痛で視界が揺れた。足が床から浮いている。四代目が僕を持ち上げたせいで、後頭部を壁にぶつけたのだ。

「てめえの揚げ足取りはどうだっていいんだ。言え」

「じゃあ、アリスに……依頼、して、ください」声がとぎれとぎれになる。「僕らは探偵です。こういうときのためにいるんです」

四代目は僕の身体をベッドに投げ捨てた。

「くだらねえ。身内のゴタを外にさらせるか」

「僕だって身内じゃないですか!」

思わず声を張り上げてしまい、さっきまで絞め上げられていた喉が痛んで咳き込んでしまう。ベッドの枠をつかんで荒い息を繰り返した。
「僕にもなにも話せないんですか？　錬次さんとは仲間だったんでしょ、盃だって五分で交わしたって聞きました、なにがあったんですか、ほんとに縁切ったんですか？」
「切ったよ。もう兄弟でもなんでもない」
「どうして！」
「約束してたのを破ったんだよ。お互いに。だから錬次は組にいられなくなった。それだけだ。今でも俺を恨んでるってんなら、上等だ。殺してやる」
「錬次さんは――」
恨んでる？　今でも四代目を恨んでいる？
わからない。なにがあったのかさえも知らないのに、ゴーグルの奥の瞳にどれほど多くの傷が刻まれているのか、僕にわかるわけがない。
それでも、僕は鞄からビニル袋に包まれたそれを取り出す。広げて見せた瞬間、四代目の顔にまるで亀裂が走ったみたいになる。
「このシャツ、知ってますよね？　錬次さんが置き忘れてったやつです。僕らはほんとに偶然逢っただけなんです、だからほとんどなんにも聞いてません、でも、でも、あの人はこれを、ほんとに大事な服だから絶

対返せって言ってました」
　四代目は大きく息をついて、椅子（いす）に背中を沈める。僕はベッドをまたぎ越して四代目のすぐそばに寄った。
「お互い、大事なものを――交換したんですよね？　これ、四代目が刺繍（ししゅう）したものじゃないんですか？」
「だれに聞いたんだ、それ」
　電柱（でんちゅう）は、伝説にさえなっていると言っていた。ヒロさんも、知っていた。
　携帯電話をベッドに投げ出し、四代目は「くだらねえ」と吐（は）き捨てた。
「そんな目に見えるもんじゃねえよ。洒落（しゃれ）でやっただけだし、錬次だってとっくに忘れてるにきまってンだろ」
　やっぱり、このシャツのことじゃないのか。でも僕は食い下がる。
「この刺繍、四代目がやったんじゃないんですか、だって組の代紋（だいもん）ですよ」
「俺（おれ）じゃねえよ」
　意地を張って嘘（うそ）をついているのか、と僕は思った。でも、四代目は僕の手にあるTシャツの、脇腹（わきばら）と肩（かた）を両手でそれぞれ指さす。
「ちゃんとよく見ろ。脇の柄（がら）は、肩（かた）の柄の1・3倍のでかさだ。グラデーションの見え方が同じになるように、糸の配列が変わってるだろ。刺繍（ししゅう）パターンのデータをパソコンで拡大処理してんだよ。俺（おれ）にそんなこと

できるわけがねえだろ」

僕は呆然と、縫いかけの代紋、それから四代目の顔を見比べる。

たしかに、四代目の言う通りだ。僕が教えるまで、コンピュータを扱えなかった四代目に、この刺繍は無理だ。でも――

やっぱり四代目は、このシャツの刺繍のことを知っている。

「刺繍したのはヒソンていう女だ」

四代目は顔をそむけて言った。

……女？　ヒソン……韓国の人？　それは……四代目と一緒に暮らしていた、恋人？

「もういねえ女だよ。俺にも守れなかったし、錬次にも無理だった。それだけだ」

四代目が口をつぐんでしまうと、僕はもうなにも訊けなかった。錬次さんについても、そのヒソンという女性についても。部屋の床に冷たい水銀がたまっているような、やわらかな沈黙がしばらくあった。

「錬次には連絡とれンのか」

それが自分への質問だということに、僕はしばらく気づけなかった。

「……え、あ、あの」

首を振ろうとすると、骨まで軋みそうだった。

「あの人、携帯持ってなくて。僕の番号は、教えたんですけど」

「かかってきたら俺に教えろ。殺しに行く」

いがらっぽい唾を飲み下して、僕は今度こそしっかりと、首を横に振った。

「いやです」

四代目は、無言で僕をにらみつけた。

「錬次さんは。……原宿で偶然逢って、上野でもう一度逢って、仲良くなった、それだけの人です。僕にとっては」

「わいたこと言ってんじゃねえよ。あいつがなに仕掛けてきてんのか、わかってねえのか」

「それも錬次さんに、直接確かめます。僕はまだ信じたくないです」

「二回逢っただけなんだろ。てめえになにがわかるんだ」

「四代目だって、信じたくなかったんでしょう？　それでっ、倉庫の鍵のこと隠して」

まず視界が大きく揺れて、口から灼けた空気が叩き出されて、身が二つ折りになってベッドの上に転がり、ようやく腹部を太い痛みが穿った。四代目の拳が僕の腹を貫いたのだ。吐きそうになりながらも、シーツをつかんで震え、こらえる。

「てめえの仕事だけしてろ。アリスにもヒロにも、そう言っとけ」

四代目が出ていってしまい、仮眠室に粉っぽい暗闇と静けさが充満してしまってからも、僕はしばらくベッドの上から動けずにいた。

錬次さんから預かったシャツを指先でまさぐる。

僕の仕事。
　このまま暗い世界から目をそむけて、スポットライトの中へ転がり出ようとしているミュージシャンたちの背中だけを見つめて、そうして四代目が錬次さんを——あるいは錬次さんが四代目を、とりかえしのつかないほど壊（こわ）してしまうのを、ただ待つ。それが僕の仕事なのか。
　そんなの、絶対にいやだ。

「これ壮（そう）さんのオフィスビルですか！　すごい！」
　平坂（ひらさか）組事務所、というビル看板（かんばん）を見上げて、美嘉（みか）さんははしゃいだ声をあげた。イベントのトータルデザイナーである、あの若い女性だ。夏全開の水色キャミソールにミニスカートなので、事務所の前で待ち合わせしてしまったことを真剣に後悔した。しかし、美嘉さんが一度平坂組がどんなところか見てみたいと言うので、しかたがなかったのだ。今日、回る予定のレコード店もみんな近場だし、集合場所としては便利なんだけど。
「しかもボディガードさん付きですか！　藤島（ふじしま）さん、やっぱすごいです！　大物オーラ出まくりですよ！」
「いや、あの、これは」弱り果てて背後を振り返る。
「押忍（オス）。兄貴も客人もお守（まも）りしぁす！」「男磨（みが）かせてもらいます！」

平坂組の縦幅トップ・電柱と、横幅トップ・岩男。並ばせればたぶん核ミサイルでも防げるだろうけれど、そのかわりに目立ってしょうがない。しかも、ユニフォームの黒Tシャツ着用が禁止されているので、二人とも『侠気』とか『仁義』とか書かれたアホ丸出しの服を着ている。こんなのを連れて街を歩けるわけがない。でも、組長の命令で僕にくっついてくると言って聞かないのだ。四代目曰く、僕はすでに平坂組の協力者として錬次さんたちに認知されている可能性があるから、外出は危険だとのこと。あんだけ冷たく突き放しておいて、なにを考えてるのかよくわからない。

　ともかく余計なお世話だった。今日は僕ひとりじゃないし。

「あの、会社もお店も回るんですよ。相手の人が怖がるし、ついてこないで」

「ばっちり護衛しぁす！」「相手がぶるって口もきけなくなるくらいガンたれます！」

　もう、文句を言う気もなくした僕は、最初に赴いたタワーレコードの店内で美嘉さんにこっそり耳打ちして走り出し、電柱と岩男をまいた。

「兄貴！　兄貴どこですか！」「馬鹿おまえ落ち着け、店員に訊け！」

「な、なんですか、なにをお探しでしょうか」

「藤島だよ藤島鳴海！　え？　ジャンル？　ジャンルってなんだ」

「兄貴はあれだ、竹内力さんとかと哀川翔さんとかと同列だよ！」

「……は、はあ、それなら演歌とか歌謡曲とか映画のサントラとかですかねえ」

「よし演歌だ！」「兄貴いねえぞ！」「てめえ嘘つきやがったな！」

ごめんタワレコの店員。僕らは急いでSTAFF　ONLYの扉の中に逃げ込み、インディーズの担当者さんと平穏に挨拶を済ませることができた。もちろん打ち合わせが終わると、帰りは裏口から逃げ出す。あの二人の脳みそなら、僕の携帯に電話をかけるという解決策を思いつくのに半日かかっても不思議ではない。

「いいんですか、ボディガードさん置いてっちゃって」

美嘉さんは心配そうというよりは、残念そうな顔。ギャング連れて歩くのってそんなに面白いだろうか。

「大丈夫ですよ。組の連中は心配しすぎです。僕なんてただのバイトの高校生だし」

「でも藤島さんセンスありますよ。バイトで終わらせるにはもったいないです。高校出たら本気でこういう仕事やろうとか思わないですか？」

美嘉さんがそんなことを言ったのは、通行人でごった返す駅ナカを抜けるときだったので、聞き間違いかと思って顔をのぞき込んでしまう。

「これから行くグッズの会社の人も、バンドロゴTシャツにすごく乗り気だったし。あの黒い鳥さんをキャラもので売り出せるし。あとブログ超面白いです」

「いや、あれ実際にあったことそのまま書いてるだけで」

「でもカピバラの回とか、うちの会社全員で爆笑でしたよ！　バンドに全然関係ない話ばっかりだから笑いながら心配して読んでたら、最後にちゃんと話がつながってびっくりです」

そりゃまあ一応、オフィシャルの告知サイトのブログなので。

「物書きとか向いてるんじゃないですか！」

「ええ？　ううん……」

サラリーマンよりは向いてるかもしれない。あくまでも比較論で。でも、そんなの考えたこともなかった。

僕にニート以外の選択肢があるとしたら、なんて。

「組の人たちが心配するのもわかりますよ、藤島さんになにかあったら困ります」

「いや、あいつらはやくざごっこしたいだけなんです。僕はべつに、そんなボディガードが要るようなタマじゃないですよ」

でも僕の認識は間違っていた。四代目の勘を信じるべきだったのだ。

新南口に抜けると、人通りは急に少なくなる。グッズの制作会社は有名なゲームのキャラクターものなんかも扱っている大手らしいのだけれど、八幡宮のそばのあまりオフィス街らしくない静かな一角にあるのだそうだ。

明治通りを左折し、場外馬券場のそばを通りかかったときだった。平日なので馬券売り場は暗く閑散としており、僕ら以外に通行人の姿はない。それでも僕は美嘉さんに言われたことを考えていたせいで、寄ってくる足音に気づかなかった。

不意に、人影が左右から僕と美嘉さんを追い越した。僕はその瞬間、いやな予感がして立ち止まり、美嘉さんのハンドバッグの紐を引っぱった。

「え、なに——」
美嘉さんが振り向こうとしたとき、僕の腹を太い衝撃がえぐった。倒れそうになり、肩をきつくつかまれて強引に身を起こされる。目に入るのは、黒い服の胸に白抜きされた揚羽蝶の代紋。雑に脱色したプリン状のぼさぼさ長髪に、濁った目と鼻ピアス。だらしない口もとがにたりと笑って、僕の襟首をつかみ、腹を膝で突き上げる。
「——がッ」
身をくの字に折ったところで背中に肘かなにかを叩き込まれ、道路にうずくまる。ガードしようとした腕の間から爪先蹴りが脇腹に突き刺さり、胃液が喉を躍り上がる。
「や、やめて、なにもうっ」
美嘉さんの悲鳴が聞こえ、僕ははっとして起き上がろうとした。アスファルトですりむいたらしい腕がぬるい血で濡れている。痛みで何重にもぶれた視界の中、ハンドバッグとヒールの高い靴が弾き飛ばされるのが見えた。美嘉さんの小柄な身体はもう二人の黒Tシャツに組み伏せられて見えない。襲撃者が三人だということに、そこでようやく気づく。
「お、おまえッ、はなせッ」
血唾混じりの声を吐き出して男の背中につかみかかろうとした僕は、真横から蹴りを入れられて植え込みに頭から突っ込んだ。目に揚羽蝶の代紋が焼きつく。やつらだ、組のユニフォームを盗んで暴力事件を起こした——錬次さんの——

もがきながら植え込みを抜けだした僕は、首根っこをつかまれ、陽光で灼けた道路にうつぶせに押しつけられた。視界の端で、口をふさがれた美嘉さんが手足をばたつかせている。どこか切ったのか、首筋まで流れた血がキャミソールを汚している。

「どうする。骨何本かやっとくか」

「こいつらPR担当なんだろ。口きけなくした方がいいんじゃねえか」

「殺しちまったらどうするんだよ。平坂さんもそこまでやれって言ってねえぞ」

「二ヶ月くらい入院させりゃいいだろ」

　黒Tシャツたちがにたにた笑いながらぞっとする会話を投げ合う。僕は腕を濡らしていく血に身体中の熱を吸い取られるような思いを味わいながら、悟る。

　僕と美嘉さんを狙っていた——つまり、尾けられていたのだ。おそらく平坂組の事務所を出たときから。四代目の懸念が正しかった。僕はまだ甘く見ていた、その結果がこのざまだ。背中に回された腕を引っぱり上げられ、肩の関節が悲鳴をあげる。助けを呼ぼうとした口に靴先が叩き込まれて血の味が声を圧し潰す。美嘉さんが泣き叫ぶくぐもった声が耳に刺さる。なにやってんだ僕は、動け、暴れろ、やられっぱなしなのか、激痛が肩胛骨から脳天にまで抜けて僕の気力を根こそぎにし、再び僕は自分の血で汚れた地面に這いつくばる。骨が軋む音さえ肉を伝わって聞こえてきた。

　けれど、不意に僕をおさえつけていた重みが消え失せる。

地面が揺れた。黒い影が僕のすぐ横に落ちてきて転がる。黒Tシャツの薄汚い男の一人が白眼をむいて倒れたのだ。
呆気にとられて見上げた僕の、半分血で塗り潰された視界を、強い陽光が切り裂く。それを遮って、大きな背中が、僕と美嘉さんとの間に立った。
「神聖なるWINSの前で、なにしてんのおまえら」
シャツの背を盛り上げる張りつめた筋肉、エレベーターを吊すワイヤのように太く、けれど引き締まった腕。よれよれのジーンズの尻ポケットにささった、競馬新聞とパチスロ情報誌。
「おいナルミ、こいつら見たことない顔だけど、新しい組員？」
「テ……ツ先輩っ？」
裏返った声が出てしまう。振り向いたその顔は、たしかにテツ先輩だった。
「なんで真っ昼間からこんなとこで平坂組と喧嘩してんだよ、あれか、モテねえからナルミのこましぶりに怒って——」
美嘉さんを押さえ込んでいた右側の男が、あせってその腕を変な方向にねじろうとする。口を手で押さえつけられたままの美嘉さんが苦痛に顔を歪めてうめき声をあげた。その瞬間、テツ先輩の拳が空を裂き、ぞっとするほど気持ちの良い音をたてて男の顔に突き刺さった。鼻血を散らして男がのけぞり美嘉さんの腕を放した、と思った次の一瞬には、左側の男も首筋に先輩の裏拳を叩き込まれてアスファルトに崩れ落ちている。

「なんだよおい。姉ちゃん大丈夫か？　おいナルミ、けっこうやられてんのか？　寝るな、おい、こっちの姉ちゃんも血ぃ出てんぞ、こら！　俺いま携帯止められてんだよ金なくて、電話貸せ、救急車必要か？」
　テツ先輩のごつごつした声がこのときほど心地よく感じたことは、後にも先にもない。僕のポケットから携帯を抜き取ってあっちこっちに電話した先輩は、両肩に僕と美嘉さんをほとんど担ぎ上げるようにして、駅の方へ歩き出した。

「新潟競馬場はめちゃくちゃきれいでさ。こう、芝の直線コースが青い空の下をすばばばーって続いてんの。あんま観客いないし、けっこう涼しいし、居心地よくてさあ、正門の前で寝袋生活、十日くらい続けた」
「テツ、ホームレスまっしぐらだね」
　ヒロさんが苦笑いする。
「昨日の最終レース負けたら歩いて東京まで帰ってくる羽目になってたぜ」
「新潟で暮らせばよかったんじゃないの？」
「冬になったら凍死すんぞ」
　僕はといえば、硬い椅子の上で身をこわばらせ、診察室の戸をじっと見つめたままで、軽口につきあう気なんてとても起きなかった。

美嘉さんが歩けないくらいの容態だったので、テツ先輩がヒロさんの車を呼んで、そのまま僕と一緒に最寄りの病院まで運んだのだ。かつて彩夏が入院していた、あの大病院だ。僕の傷は大したことがなかったけれど、美嘉さんはまだ診察が終わらない。消毒液のにおいの中で、僕は身体ぜんぶがぺしゃんこになりそうな思いを噛みしめる。

「なんかもう、外れ馬券が散らばってる上で寝るのが身に染みついてさ。こっち戻ってきてからも、ふらふらっと吸い寄せられるみたいにＷＩＮＳに寄ろうとしちまって。そしたらナルミが知らない女連れて、おまけに組のやつらにボコられてんだぜ。どこからつっこんでいいのかわかんねえ状況だろ」

「ナルミ君、運がよかったよね……」

ヒロさんがため息みたいに言って、こっちを見る。

そう、運が良かっただけなのだ。あそこでテツ先輩がいなければ——どうなっていたか、わからない。擦り傷のできた二の腕を、包帯の上から握りしめる。

ほんとうに、考えが甘かった。四代目に『僕だって身内だ』なんて豪語しておきながら、どうして自分は暴力には巻き込まれないなんて思っていたんだろう。

「で、どうなってんの。なんで四代目に連絡しないんだよ、内輪のもめ事なんだろ?」

「ああ、ええと」ヒロさんは僕に目配せしてくる。テツ先輩はまだ事情を全然知らないのだ。あの黒Ｔシャツのやつらも、平坂組のメンバーだと思っている。

説明するのは骨だったし、四代目に知らせるのはもっと気が重かった。

でも、どちらも僕の仕事なのだ。

テツ先輩にことの次第をみんな語り終えて、病院を出る頃にはもう陽が傾きかけていた。駐車場に向かう間、三人とも一言も口を利かなかった。ヒロさんも、硬い表情になっていた。僕がずっと前から錬次さんに逢っていた、というのを聞かせるのは、はじめてだったから。

ヒロさんがようやく口を開いたのは、車が明治通りに差しかかって渋滞につかまったあたりのこと。

「おれは明日も病院に行くけど、ナルミ君は？」

助手席の僕は、テープとガーゼの巻かれた手をじっと見つめ、首を振る。

美嘉さんは大事をとって一晩だけ入院することになった。内出血がどうとかいうことらしいのだけれど、医者の話を聞いたのはヒロさんなのでよくわからない。高校生の僕が出ていくと色々めんどくさいので、待合室で亀みたいにうずくまっていたのだ。

今さら美嘉さんに、どんな面を見せればいいのかわからない。

後部座席で、テツ先輩が大きく息を吐くのが聞こえた。

「なんかめんどくせえことになってんのな。それで、なんで四代目は俺とかに助けを求めないんだよ。知らせてくれりゃすぐに飛んでったのに」

「テツにも何度も電話したよ！　新潟行ってておまけに携帯止まってたんだろ！」

ヒロさんがステアリングをばしばし叩いた。

「そりゃそうだ。あっはっは。……って、ヒロ、おまえがつっこんでどうする。ナルミの仕事がなくなっちゃうだろ。……おいナルミどうした？　元気ねえな、頭も怪我したのか？」

「……元気あるわけないじゃないですか……」

自分で聞いて気持ちがますます萎えるほど弱々しい声が出てきた。

「なんでこいつ、こんなに落ち込んでんの」

「女の子の前でかっこ悪いとこ見せちゃったからじゃないの」

ちがうわ。いや、それもちょっとはあるかもしれないけど。

「なんか、……自分が口ばっかりなんだなって思って」

「なにを今さら。ナルミなんて口八丁以外なんも取り柄ねえの、だれだって知ってるっつの」

「おいテツ、ほんとのことだからってそこまで言うなよ。ナルミ君泣きそうだよ」

ヒロさんもじゅうぶんひどいよ！　僕はシートの上で膝を抱える。

四代目にはおれから報せようか、というヒロさんの申し出に、僕は黙って首を振る。テツ先輩の言う通りだ。言葉さえ押し殺してしまったら、僕はほんとうに役立たずになる。自分でやらなくちゃいけない。それで、その後はどうする？

「ナルミ君、この仕事まだやるの？　手ぇ引いた方がいいよ」

ヒロさんの言葉に、僕は首を振った。自分でも、つまらない意地っ張りだとわかっている。

「……ん。そうか。なら、口は出さないよ。ナルミ君が決めることだし」

僕がいったい、なにを決めたんだろう、と思う。

両手で顔を覆っていると、首筋や腕の傷口がじくじく痛み出す。

あいつらは錬次さんの命令で動いていたのだ。その事実が、僕の喉につっかえている。

昨日までの僕は、四代目をなんとか説得して、この事件の解決をアリスに依頼させたいと思っていた。ライヴが迫っている今、四代目にとっては大事な時期だ。こんな面倒ごとに関わっていられないだろうし、なにより実力行使なんて話になったらカタギの世界向けの信用に傷がつく。

探偵への依頼ということになれば——アリスだけでなく、テツ先輩もヒロさんも少佐も動けるようになる。それまでは、ハードボイルド・ニートたちは、ただラーメン屋の勝手口前で風に耳を澄ませていることしかできない。それは、あの心地よく乾ききった世界を危ういバランスの上で保たせている、一人一人のプライドの問題。

でも、今、たとえ四代目がアリスに事件を託したとして。たどり着く先は、どこなんだろう。錬次さんの血が流されなければ、もうこの事件はおさまらない。そんな結果のために、僕は探偵助手として働けるのか?

二度逢っただけなんだろ。てめえになにがわかるんだ。四代目の声が耳の中で蘇る。その通りだ。あの人はただの敵だ。そう思えたらどんなに楽だろう。

ほどける兆しすら見えない僕の中のわだかまりに、テツ先輩のつぶやきが染み込む。

「なあ、ナルミ。錬次、元気そうだったか？」
　顔を上げられない。振り向けばすぐそこにあるはずの、先輩の目と向き合って、その優しい言葉を正面から浴びるのが、怖い。
「あいつ金銭感覚ゼロなんだぜ。ちゃんと飯食ってそうだった？　あいかわらずつまんねえボケ飛ばしてたか？」
「……ええ」
　かすれた声で、なんとか答える。
「ならよかった。どんだけまわりが最悪でさ、話なんて通じなくなってても」
　テツ先輩の拳が助手席の裏側にぐっと強く押しつけられたのが、背中の感触でわかった。
「元気で生きてりゃ、まだ大丈夫だ。殴り合える」
　これ、ナルミに教わったんだぜ。テツ先輩が付け加えた一言で、僕はほとんど泣きそうになってしまう。
　生きてさえ、いれば。

『はなまる』の近くの有料駐車場で車を降りたところで、少佐とばったり顔を合わせた。
「なんだ藤島中将が入院したわけじゃなかったのか」
　開口一番がそれかよ。

「おっとテツさん、ほんとに帰ってきてたんですね、どうでしたか新潟競馬場は！」
　少佐は、小柄（こがら）な身体（からだ）の倍くらいの幅があるバックパックをもっさもっさと揺らして、後部座席のドアに回り込んだ。
「北国かと思ってたら普通に暑いんだぜ。おかげで野宿できたけどな」
「五稜郭（ごりょうかく）で籠城戦（ろうじょうせん）想定訓練を七日間やったことのある自分に言わせれば、新潟など裸（はだか）で寝ても平気なくらいの南国ですよ」
　おまえの頭が平気じゃないよ！　五稜郭は特別史跡なんだからサバゲーに使うなよ！
「浮かせた宿代と新幹線代を三連複の四頭ボックスにぶち込み続けてさ、いやもう最終レースで写真判定になったときは、負けたらそのまま日本海ダイブしようかと思ったぜ」
「万馬券だったんだよね？　どんくらい儲（もう）けたの」
「一撃（いちげき）でプラスになったから、グリーン車で帰ってきた。これだから競馬やめらんないよ」
　ラーメン屋の方へ歩いていく三人を、僕はじっと見送る。足が動かない。
　ビルに近づいたら、監視（かんし）カメラに映ってしまう。アリスに見られたくなかった。病院にいたときから携帯に何度かかかってきているのだけれど、なんと答えていいのかわからなくて出ていないのだ。
「おいテツ聞いたぞ万馬券だって」店の中からミンさんの声が飛ぶ。「たまってるツケ払（はら）え」
「いや、これは明日（あした）からの軍資金（ぐんしきん）だから」「うるせーつべこべ言わずに払え！」

テツ先輩は勝手口から飛び出してきたミンさんにたちまち捕まってヘッドロックをかけられ、店の裏に引きずり込まれる。少佐とヒロさんが笑いながらその後に続いた。

僕は、ヒロさんの車の陰にじっと立ちつくして、ビルの隙間から聞こえてくるニート探偵団の声を聞いていた。

「ちくしょう財布がぺらぺらだ。四代目呼んでなんかギャンブルやろうぜ、あいつ最近金回りいいだろ」
「だから今たいへんな時期なんだって。ナルミ君の話聞いてなかったのかよ」
「アリスに依頼してきてるわけじゃねえんだろ？　ならほっとけよ」
「テツさん、呼び出してチンチロで金むしるのは『ほっとく』とは言いません」
「テツは呼吸するみたいに人にたかるからね、ほっとくのとほとんど同じなんだろ」
「というか最近の四代目はけちですよ。なにせこっちは事務所の鍵を調べただけで仕事が終わってしまいましたからね。大した金額もらってません」
「あれ、少佐も今なんもしてねえの？　盗聴とか」
「頼まれてないんで」
「ならしょうがねえな」「しょうがないよね」「まあ、深刻になってるとこ邪魔すんのも悪いし三人麻雀でもやりに行くか」「いいですよ。自分、最近ようやく新しい牌の流れ理論を――」

楽しげな会話が、耳の中の靄に吸い込まれていく。みんないつも通りだ。四代目も、それからかつての錬次さんも、仲間のはずなのに。なんとも思ってないようにさえ見える。

いらだっている自分に気づく。おまえら、やっぱりなんにもしないのかよ。依頼がなけりゃそうやっていつまでものんきに遊んでるのかよ。こうしてる間も、錬次さんが——

血がにじみそうなほど、唇を噛む。八つ当たりだと、わかっていた。この憤りは、自分に向けたものだ。テツ先輩たちがなにもしないのは、ニートの誇りゆえ。僕は？　なにもできないどころか、なにをしたらいいのかさえ、わかっていないだけじゃないか。

*

家に戻ってから、夜までずっと、ベッドの上で丸くなって携帯電話に息を吐きかけていた。

アリスから、きっちり一時間に一度、五回も着信があった。最後のには留守録つき。

『なんで出ないんだ！　いいかい、定時連絡、定時連絡だからな！　なにがあったか知らないが入院したわけじゃないんだから電話くらいかけられるだろうっ』

なにがあったか知ってるんじゃないか。ていうか定時連絡なんてきまりは聞いたことがないぞ。こっちからかける気にもなれず、「大丈夫」と三文字だけのメールを打つ。

それから、美嘉さんへの謝罪メール。たった三行ほどなのに、一時間もかかった。あの人がこれを読むのは、明日退院できたとして、会社に出てからだ。なら、病院に直接行けばいいのに、それもできない。僕のせいで巻き込んだのに。
錬次さんから電話があったのは、僕が携帯を枕元に投げ出し、電灯もつけたままぐったりしているときだった。
番号非通知だったけれど、錬次さんからだとほとんど確信に近い直観があった。
『ナルミか？　これナルミの携帯？』
耳に当てた携帯から流れ込んでくる、心地よく乾いた声。
「……そう、です」
『お、よかった。俺こう見えてきれい好きなんや。なんべんも手ぇ洗ってたらメモった番号消えかけてな。よう読めんから、もう二十回くらいトライしたわ。やー、よかったよかった』
胸の中で、溶けてはいけないなにかが溶け出しそうになり、僕はぐっとこらえて携帯を逆の手に持ち替えた。
『怪我はどうやった。重いんか？』
いきなりシンプルに訊かれ、僕は粘っこい唾を苦心して飲み込む。
「……いえ。大したことないです。ちょっと切ったり、すりむいたり」

『ほか。ならよかったわ』
それだけ？　と僕は思った。実際に訊こうかとさえ思った。でも、それで正しいのだ。謝られたら、なんて答えたらいい？
『俺ら、二度も逢えたの、偶然やなかったんやなあ。原宿も上野も。おんなし場所に用事があったんやからな。巡り合わせがよかったのか悪かったのか、わからへんけど』
　錬次さんの声の調子は、僕らがまだお互いになにも知らないまま笑い合ったりどつきあったりしていた昨日までと、ほとんど変わらなかった。それが強さなのか弱さなのか、僕には区別がつかない。両方かもしれない。そのどちらでもあるものが、この世の中にはけっこうたくさん存在するのだ。
『ほんで、ナルミはいつひま？』
　カピバラの夢がいま終わったのだろうか、と僕はふと思った。錬次さんに二度目に逢ったあのときから夢が続いていて、この瞬間目覚めが訪れたんだろうか。ライヴハウスの火災も、美嘉さんと一緒のところを襲われたのも、みんな――
　でも、携帯を押しあてた頰がざらっと痛む。夢なんかじゃない。
　だから僕は、硬い声を押し出す。
「いつでも大丈夫ですよ。明日でも」
『ほな明日にしよか。んー』

錬次さんと僕は、まるでできたての傷に触らないようにそのまわりを水で洗い流すみたいな口調で、待ち合わせの場所と時間を確認しあった。

『壮に知らせるな、ちゅうんは無理な相談やろけど』

最後に、錬次さんの声は細く幼くなる。

『何人連れてきてもええから、あのTシャツだけは持ってきてな。あれ、ほんとに大事な服なんや』

「平坂組どころか、僕が警察に報せるとか考えないんですか」

声がかさかさになってしまうので、僕は何度も唾を飲み込んで喉を湿らせた。

「なんで直接。どこかに送らせて受け取るとか……　すればいいのに」

『そやな』

ぽつりとした相槌の後に、しばらくの沈黙があった。なにを迷っているんだろう、と思う。同時に、僕はほんとうにそんなことをするつもりか？　という自問も、舌の付け根から染み出してくる。

『そやけど、送ってくれ、で済ませたら、ナルミに逢えへんやん』

僕はベッドから下りて、フローリングの上で膝を抱え、太ももを腹に強く押しつけた。そうしなければ、喉までせり上がってきた熱いものをそのまま吐き出してしまいそうだった。

『ちゃんともっぺん逢って話さんと』

「そう……ですね」

床の上に無造作に広げられた、あの刺繍入りの白いTシャツをぼんやり見つめる。

「ひとりで行きますよ。僕も錬次さんと話さなきゃいけないことがあるから」

『おおきにな』

電話が切れると、僕はようやく立ち上がった。錬次さんから預かったシャツを拾い上げる。羽が足りずに飛べない蝶たちが、雪の上に散らばっている。

まだ、夜明けはずっと先だ。

でも僕はシャツを畳んで鞄にねじ込み、家を出た。自転車のサドルには、まだ昼間の日光の熱がぼんやり残っていた。

「よくもまあそんなしょぼくれた顔をぼくの前にさらしに来られたものだね！」

冷房の風が吹き下ろすNEET探偵事務所のベッドの上に仁王立ちになり、アリスはふくれっ面で言った。

「ぼくの警告も聞かずに無秩序な世界に触れて、当然のように暴力に巻き込まれて、間抜け面に包帯巻きつけて、それできみは恥知らずにもなにをしに来たんだい。こんな時間なのに」

「こんな時間って、アリスはずっと起きてるんだろ？」

いつも通りのアリスらしい反応に安心して、するっと軽い文句が出てしまう。

「サーバのメンテナンスが集中している時間帯だよ、パスクラックのゴールデンタイムだ。きみみたいな、脳みそに白昼夢しか詰まっていない人間の相手なんてしてるひまはない」

「……そっか。ごめん。……いや、とくに用があって来たわけじゃないんだ」

さしものアリスも、呆けたような顔になる。なにせ深夜の二時である。用がないのにふらっと押しかけていい時間ではない。

「どうかしてた。なんか、アリスの顔見たくなって」

「な、な、なんだいそれはっ」

アリスはベッドのいちばん向こう端まで跳びすさった。

「ぼくは忙しいんだ、物見遊山なら駅前やセンター街にいくらでも夜鷹が集っているだろう」

ここまで怒られるとは思っていなかったので、僕はしょんぼりする。しかし、考えてみれば当たり前だ。錬次さんのことでもうどうしていいのかわからなくて、アリスになにか話せば頭の中の靄が晴れるような気がして、ここに来てしまったのだけれど。

「悪かった。帰る……」

鞄を肩にかけ直して立ち上がると、アリスはぱたぱたとシーツの上を這ってきた。

「そのまま帰ってどうするんだ、この能なし！　もっとましな理由くらいこの場で思いついてきとうに並べたまえよ！」

「いや、だって……邪魔だろ？　出てけってんだろ」
「邪魔だとも出ていけとも言っていないぞ！」
　意味わかんねえ。
「せ、せっかく来たんだからっ」
　アリスは座ったまま、ベッドをトランポリンがわりにして何度も跳ねる。
「ドクターペッパーをまとめて三本持ってきたまえ。……あっ、き、きみにあげるんじゃないからな、ぼくがひとりで全部飲むからな！」
　わかってるよ。僕が冷蔵庫から運んでプルタブを上げてやったあの毒々しい炭酸飲料を、アリスは立て続けに飲み干してから、空き缶をサイドテーブルに積み上げる。
「だいたいなんなんだきみは。いつまで泥の中で季節外れの鰻みたいにのたくっているつもりだい。やるべきことはとっくに見いだしたのじゃなかったのかい？」
　そう。見つけたはずだった。四代目から、アリスへの依頼をもらう。そうして、錬次さんとの潰し合いに僕らも身をねじ込む。
　でも——
「まさか、ぼくがなんべん言って聞かせてもわからなかったのに、ちょっと小突かれてすりむいただけで、暴力の恐ろしさに気づいて尻込みを始めたのじゃないだろうね」
「いや、そうじゃなくて……そういう意味もあるのかもしれないけど」

殴られて、ようやく気づいたことは、たしかにあった。

四代目と錬次さんを隔てている、絶望的に深くて広い憎しみだ。どちらも、殺す気でやっている。自分にその敵意が降りかかって、しかも美嘉さんまで巻き添えにして——ようやく気づいた僕は、ほんとうに救いがたい。

四代目がアリスに探偵を依頼するとしたら。僕も、テツ先輩もヒロさんも少佐も、錬次さんを叩き潰すために走らなくてはいけない。僕にそれが耐えられるだろうか。

アリスが、あきれかえった顔をして息をついた。それから、口を開く。

「……南池袋に、『エクス・エリア』というスポーツ用品店がある」

僕は戸惑った目で探偵の口元を見つめる。

「まだ二十五歳の若い男が経営している店だ。この男は、数年前までは窃盗グループを率いていた貧相な小物でね、まだ東京にやってきたばかりだった雛村壮一郎と衝突して、グループ壊滅の憂き目に遭っている」

なんの話だろう、と僕はベッドの手前に膝をつく。

「平坂錬次はこの店にいる。経営者が、おそらく平坂の一味なのだね」

立ち上がろうとして、危うく膝をベッドにぶつけるところだった。

「……錬次さんっ？　……な、んでそんなの知って」

「なぜって、調べたのだよ。きみの目の前にいるのが何者だと思っているんだい」
ニート探偵――世界の血脈に流れるすべての情報を、このわずか十七平方メートルの城の中から掌握する、小さな女王。
「きみの連絡先だけは教えていたのだろう。着信をチェックしただけだよ。平坂はぼくがテツや四代目と知り合う前に東京から消えてしまった。だからあの男は、たとえ非通知でも発信元を特定できる、全知無能の探偵の力がここに存在していることを知らない。でも、ぼくはあの男をよく知っている」
アリスの声が、墓所の冷たい土を踏みにじる足音に聞こえる。
「どれほど残忍で阿漕な人間かも知っている。妨害工作に使っている連中は、結成して間もない頃の平坂組に潰されたチームの者ばかりだ。いいかい、四代目と平坂が二人で叩きのめし、街から追い出した相手なのだよ。でも今は平坂の下についている。自分への恐怖と、四代目への憎悪だけを抽出して拡大させたんだ。四代目が拉致した男も、そう証言している。そういう真似が平然とできる人間のいることを、ぼくはよく知っている。危険な獣だ」
「錬次さんはっ」
声を荒らげ、アリスの冷ややかな視線にぶつかり、僕は腰を浮かせたまま固まる。
錬次さんは――なんだ？　なにを言おうとしていた？　僕ごときに、あの人と四代目との間にあったことの、なにがわかるっていうんだ。四代目の言う通りだ。一回逢って、少し話しただけなのに。なにを知っているっていうんだ。僕は――

なにも知らないのなら、確かめるしかない。
僕は背後にあった鞄（かばん）を引き寄せると、蓋（ふた）を開いた。くしゃくしゃに丸められた白い塊（かたまり）を取り出して、ベッドの端（はし）に置く。アリスがかすかに首を傾（かし）げ、哀（かな）しげな目を向けてくる。
「預かってて、くれないかな」
「……それはなんだい」
「錬次さんのシャツ。これ返すために、さっき電話で呼び出されたんだ。夜が明けたら、行ってくる」
「行ってくるだってっ？　なぜ正直にほいほい呼び出されるんだ、昼間きみ自身が暴行を受けたのを忘れたのかい、平坂（ひらさか）の指示だったのだよ？」
「わかってる。でも、これは錬次さんにとってすごく大事な服なんだ。それを取り戻すために呼び出したんだよ。滅多（めった）なことはしないよ」
「わかるもんかっ、だいいち、それならなぜぼくに預け――」
憤（いきどお）りで赤く染まりかけたアリスの顔は、不意にしゅうと熱気を失う。
「……人質（ひとじち）がわり、のつもりかい」
「うん……ちょっとちがうけど、似たようなものかな」
アリスが拾い上げて広げたシャツの胸に、僕はじっと目をやる。
「だって、これ返したら錬次さんとの糸が切れちゃう」
もう、あの人と逢って話す理由がなくなる。

果たされない約束は、どんなに最悪の形であっても、胸の底の砂に食い込む錨になる。その鎖を伝って、僕らは何度でも巡り逢える。

生きてさえ、いれば。

だから僕はもう一度、この身と、言葉と、耳だけで、錬次さんに逢いにいく。

「……きみはいつも、そうやって」

アリスがとぎれとぎれの声でつぶやく。目にははっきりと涙がたまっている。

「どれだけ愚昧なんだ。チンパンジーだって、蟻塚をまさぐるのに木の枝を使う智慧があるというのに、きみはなぜにいつも自分の骨を削って挿し込むんだい」

「うん。……ごめん。馬鹿だから。……他に、やり方を知らないんだ」

むっと声を詰まらせたアリスの顔を、さまざまな感情がよぎった。僕が心配になって下からのぞき込もうとすると、ふいっと背を向ける。ひるがえった長い髪先が僕の鼻を叩いた。ベッドの奥まで這っていってもぞもぞとなにかを探っていたアリスは、やがてシーツの上を膝歩きで戻ってくる。

僕の鼻面に押しつけられたのは――

「……フクロウ?」

両手にすっぽり収まるくらいの、卵形でふさふさしたぬいぐるみは、たしかにフクロウだ。

「そうだ。名前はミネルヴァといってね、戦う者たちの守り神だよ。きみのその、無根拠で蒙昧な安全見通しよりはよほど頼りになる」

「う……うん」
　僕はアリスの顔と、フクロウの慎(つつ)ましやかな瞳(ひとみ)とを、何度も見比べる。
「……ありがと」
「いいかい、貸すだけだからね！　無事に持って帰ってこなければ、減給どころの処分では済まないと思いたまえ！」
　うなずき、フクロウを慎重(しんちょう)に鞄(かばん)の中にしまった。すると、いきなり背後から頭になにかがかぶせられて視界を遮(さえぎ)る。
　毛布だ。びっくりしてはねのけ、ベッドの方を振り向く。
「話も済んだしさっさと寝たまえ」
　いつの間にかキーボードの前に戻っているアリスは、こっちをちらと見ながら言った。
「きみの顔色に比べれば、東京湾のヘドロだってもう少し健(すこ)やかな色をしているよ。最近ろくに寝ていないのだろう。そんな状態で深夜に自転車に乗るなんて愚行(ぐこう)にもほどがある」
「あー……うん」
　立て続けに言葉を浴びせられて、ほんとうに頭がぼんやりしてきた。
「ええと、じゃあ、ちょっと寝かせてもらう……」
　この冷房漬(づ)けの中で眠(ねむ)るのは少し不安だったけれど、真夜中に家を出たので上着も持ってきている。毛布を借りれば大丈夫(だいじょうぶ)だろう。家に戻って寝直すよりはずっとましだ。どこで寝ようか。冷蔵庫にもたれて

寝れば少しは冷房被害が軽減できるかな。そう思って僕が毛布を肩にかけ、寝室を出ていこうとしたとき、アリスがもそもそした声で言った。

「……シーツのにおいを嗅いだりしないというのなら。……べつに、ベッドの隅っこの方を使ってもかまわないぞ」

　僕自身としてはかなり葛藤したつもりだったけれど、怪我と疲れであっさりと天秤は傾いた。どうせ何度も上がってるベッドだし。僕はアリスの背中にすぐ手が届きそうなほどの近くで、懐かしいにおいにくるまれて、束の間の眠りに落ちた。

4

池袋にはあまり来ないので、夏休みの昼前だというのに、明治通りを外れて一本入るだけでがくっと人通りが減ることに少し驚いていた。僕の地元に比べれば、ずっと人口密度が低い。ラーメン屋がたくさん並ぶ道から、ガストのある角を曲がると、正面に公園が見えてくる。濁り水が溜まったまま死んだ噴水、やけに目立つ公衆トイレの日焼けした壁、葉を茂らせて懸命に木陰をつくる桜の樹、陽の照りつけるベンチで黙々と将棋盤を挟んで向かい合う老人たち。

僕は、フクロウのぬいぐるみだけを入れた鞄を、汗ばんだ手で肩にかけ直す。

噴水の手前に、背の高い人影があった。髪のメッシュは強い陽射しがそのまま張りついたみたいに見える。晴れた真昼の空の下、サングラスは目の色を完全に隠している。おや、と僕は思った。錬次さんが携帯電話を手にしているのだ。僕に気づいたのか、早口になる。

「……切るぞ。……そのくらい自分で考えろ、今日中じゃなくていいんだ。……人が来てんだよ、うるせえな。すぐ戻る」

錬次さんはそう吐き捨てて携帯を閉じた。この人、電話のときは標準語が出るんだな。僕との通話ではそんなことなかったけれど、まるで別人だ。

訪れるのは春休み以来だったけれど、その集合住宅の入り口にある『ハロー・パレス』と書かれたプレートを見ると、懐かしさに思わず足を止めてしまう。あの事件が、もう二年くらい前のことみたいに思える。

僕が正式にアリスの助手になってから、はじめて舞い込んできた依頼。暴力団と丁々発止するまでに発展した、マネーロンダリング事件。その舞台が、この集合住宅だった。まさかもう一度訪ねることになるとは思っていなかったけれど。

携帯で時刻を確認する。十七時。約束の時間ぴったりだ。まだまだ昼間の暑さは街路樹の根元にもガードレールの継ぎ目にもアスファルトのくぼみにもしつこく残っていたけれど、横長の四階建ての陰はだいぶ涼しかった。

それでもエントランスに入るのに勇気がかなり要る。なにせこれから逢うのは――

「――助手さんっ?」

いきなり背後から女の子の声がして、僕は飛び上がって振り向く。太い三つ編みの女の子が目を丸くして立っている。ぱっつんぱっつんの半袖シャツとデニムのホットパンツ姿に珈琲色の健康的な肌がまぶしい。

「メオ?」

「助手さん久しぶり！　どうしたの？」
　駆け寄ってきて腕に抱きつかれる。あいかわらず全身無防備というかなにごとにも全開な娘である。
『猫』の名を持つこの娘こそが、春休みの事件の依頼者だった。
「メオに逢いにきてくれたの？」
「あー……いや」そのまっすぐな視線は、今の僕には正視できず、目をそらす。「実は、そのう。……お父さんに、逢いにきたんだ」
「えーっ？」
　僕の腕をつかんだまま飛び跳ねるのはやめてほしい。肩がはずれる。
「それじゃメオに逢いにきてくれたのとほとんどおんなじだね！」
　そのポジティヴさを一割くらい分けてほしい気分だった。それ以上は要らないけど。
「でも、どうしてお父さんに？　なんの用？　ひょっとしてあれかな、『ムスメさんを僕にください！』っていう」
「なんの話だ。ちがうってば」
　メオの父親。かつて僕が、はったりとごり押しで助けた元暴力団員、草壁昌也。
　なぜそんな人に今さら用があるのかというと、もちろん四代目のせいである。
「とにかくあがってあがって！　助手さん晩ご飯は？　メオが作るけど一緒に食べる？」

嬉しそうに僕を玄関の中へと引っぱっていく。さて、草壁昌也と顔を合わせたら、いったいどうやって話を切り出そうか。そう考えながら、僕は昨日、四代目から依頼を受けた後のことを思い出す。

テツ先輩たちがアリスの指示を受けて街に散っていくのを見送ってから、僕は四代目に、ようやく報告した。錬次さんから聞いたこと。

あの人はヒソンという女性のことで四代目を恨んでいる。四代目がヒソンを身代わりにして死なせてしまった。その後、暴力団と取引して口止め料を受け取り、ヒソンの存在を抹消する片棒を担いだ。そう信じ込んでいる。

「四代目も認めたって、錬次さんが言ってました。でもそんなの」

「その通りだよ。俺だって死にたくなかったから、ドス持った野郎が部屋に踏み込んできたときにヒソンの後ろに隠れた。あいつは俺のかわりに刺された」

嘘だ。そう叫ぼうとした僕の声は、喉の途中でよじれて途切れる。

「だからどうした。おまえには関係ない。嗅ぎ回るなっつってんだろが。錬次を止めることと、イベントのPRだけ考えてろ」

僕の胸に拳をぐりっと押しつけ、鈍い刃みたいな声を耳に突き立てると、四代目は立ち去ってしまった。

僕はひとりになってしまった後も、非常階段の二段目に腰を下ろしたまま、じっと沈んでいた。四代目の言葉が汗と一緒に顔に粘りついていた。

死にたくなかったから、隠れた。かわりに刺されて死んだ。

信じろっていうのか、そんなのを。

卑怯な手だったかもしれないけれど、アリスには僕から依頼した。

「なぜにきみが、そのヒソンなる女性のことを知る必要がある？」

事務所のベッドに戻ったアリスは、キーボードを叩きながら言った。少し意地の悪そうなその口調は、とっくにわかっていることを僕に訊ねるときの癖だ。

「だって、四代目は嘘ついてる」

「ちがうよ」

僕に背を向けたまま、アリスはきっぱりと言った。

「テツのときのことを思い出したまえ。きみは、同じことを言っていた」

テツ先輩の、事件。園芸委員会を潰す原因になった生徒死亡事件で、あの人は自分が死なせたと嘘を――

「だから、それはぼくときみが暴くまで、嘘じゃなかったんだ」

アリスの言葉が僕の物思いを断ち切る。

「きみが、嘘だと信じた。ぼくがそこに言葉を与えた。だから嘘になった。あれは――半ば、探偵の仕事じゃなかった。人の心の中にしかない要素が、深く関わりすぎていたからね」

　ひどく沈みきったアリスの声。悔やんでいるのだろうか。

「きみのそれは、ぼくにはない力だ。きみが造り出す現実の雛形は、ときに呪わしい。探偵がしてはならないことを、きみは平然と、その手でしてしまう。それが『物語』だ。自覚はしていないだろうけれどね」

　胸に痛みを感じて、拳を肋骨に押しあてる。黒髪が揺れ動き、アリスが振り向いた。

　柔らかく、笑っている。

「でも、いいだろう。探偵助手は探偵にできないことをしなければ存在価値がない。きみの依頼はつまり、きみの友、平坂錬次のためだね？」

　僕は喜びと申し訳なさがない交ぜになった感情を腹に押し込めながら、うなずく。アリスの手がキーボードの上で踊って、モニタの一つにテキストファイルを呼び出した。

「ヒソンという韓国女性が働いていたのは、新大久保にある『楼蘭』というキャバクラだ。有名女優と同じ名前なので、本名をそのまま源氏名としていたようだね。この店が平坂錬次率いるチーム『修羅道』に襲撃された事件は、新聞記事にもなっているし警察の記録にもある」

「……な……んで調べてあるのっ？」

「今、調べたんだ」

探偵は素っ気なく言った。
「どこを調べればいいのかは、もうずっとずっと前から、知っていたけれどね」
その優しい詭弁に、僕はほうっと息をついてしまう。
「あとはきみが足で情報をかき集めてきたまえ。幸いなことに、この店はぼくらとわずかながらつながりがある」
「……え？」
「アジア人女性が勤める水商売の店、だ。心当たりがあるだろう」
記憶を探る手が、なにかにぶつかる。僕のあごが落ちる。
「ほら、これが草壁昌也の携帯番号だ。さっさと電話したまえ」

草壁昌也はもともと、関西の暴力団の幹部だったが、組の体質に嫌気がさして脱退。アジア各国を放浪し、結婚相手を連れて日本に戻ってきた。その旅の過程で知り合った様々な女性が、そろって彼を頼って日本に出稼ぎに来てしまい、しかたなく草壁昌也は、女たちの面倒を見るために会社までつくってしまったのである。
よくよく考えてみればヒロさんさえ可愛く見えるくらいのモテぶりである。なにせ大勢の女の人が海を越えてまで追いかけてきたのだから、半端ではない。

以前に見たときは逃亡生活の真っ最中で、まったくぱっとしない風采だった。しかし今、こうして机を挟んで向かい合っている草壁昌也は、紫色のスーツというとんでもないものを着ているくせにまったく浮ついたところのない引き締まった印象で、いつぞやメオがヤマネコみたいだと評していた通り、野性の中にほんの少しの甘味が感じられる危険な中年男性だった。ちょいワルどころではない。ガチワルおやじである。

「仕事に出るまで時間がないから手短にしろよ」

　面会場所は、草壁とメオが住んでいる部屋ではなく、『ハロー・パレス』の一階にある事務所である。ここ最近、草壁昌也は高級クラブの経営に携わってるらしく、完全に夜のお仕事。かなり忙しいらしくて、出勤直前のこの時間しか逢えるタイミングがなかったのだ。

「あの、『ハロー・コーポ』はどうなったんです？」

「まだある。俺はけじめで手を引いた。そんな余計な話してる場合か」

　僕は首をすくめる。マネーロンダリング事件のその後は詳しく知らないのだけれど、少なくともこの集合住宅はまだ無事なのだし、なんとかうまく収まったのかな。それとも沈没までの時間的余裕がちょっと延びただけなのかも。

　とにかく、僕は僕のことだけを考えないと。

「電話でも言いましたけど。新大久保の、『楼蘭』ていうキャバクラ。知ってます、よね？」

　草壁はかすかに眉を寄せて、うなずいた。

「うちの系列だ。田原組の下の、後藤田組ってのがケツ持ってた。だいぶ前に独立してる」
僕は細く息をつく。
「あれですよね、不良チームといざこざ起こして、そのチームに店乗っ取られたって」
「なんでそこまで知って——」
草壁の顔色が変わる。目つきが猛獣のそれになる。
「あれやったのは、おまえの知り合いか。あの、雛村とかいう」
「え、ええ。実は」
その当時は平坂組という名前じゃなかったし、実動メンバーも多くは錬次さんとその手下だったろうし、今の今まで草壁も気づいていなかったわけだ。ほんの数ヶ月前に自分を助けてくれた少年やくざが、実は五年前の乗っ取り首謀者だった、なんて。
もちろん四代目も気づいてなかった。『ハロー・コーポ』とその背後の田原組、そして周辺の関連会社は、マネーロンダリングのために馬鹿みたいに複雑な組織構成となっているのだ。アリスが手繰らなければ、この奇妙な縁に、永遠にだれも気づかなかったかもしれない。
草壁の舌打ちが二度聞こえた。
「……まあいい。昔の話だし、俺にはもう関係ない。『楼蘭』がどうした」

もうとっくに手を離れている店のことだし、憶えていないんじゃないかと思いながらも、僕は上目遣いで訊ねる。

「その店で当時働いてた、韓国の人で、ヒソンていう」

「……殺された女か」

知っていた。殺されたことまで。僕は机に手をついて身を乗り出した。

「だれに殺されたのか、わかりますか」

「知るか。後藤田組のだれかだ。だから組がもみ消したんだろ。俺も噂で聞いただけだ」

肩を落とす。それはそうだ。まわりに知られないように、文字通り闇に葬ったのだから、むしろ殺されたということを知っているだけで大したアンテナである。

「四代目は、後藤田組の恨みを買ってたわけですよね。店乗っ取られたわけだし」

「雛村が首謀者だったってんなら、そうかもな。殺しにいくほどのもんかと思うが」

「四代目はそのヒソンさんと同棲してたんだそうです。事件の日も、部屋に一緒にいたって。ヒソンさんがかばったのか、それともなにか事故があったのか、わかりませんけど」

「なんでそんなこと探ってんだ。おまえ高校生だろ。そんなに早死にしたいのか」

「昔の仲間が……疑ってるんです。四代目がヒソンさんを盾にしたんじゃないかって」

「雛村本人に訊けよ」

もう訊いた。返ってきた痛ましい答えは、思い出したくもない。

「なら、それで正しいんだろ」

「そんなことする人じゃないんです。なにか隠してて、それで」

「馬鹿か。べつにサツに濡れ衣着せられたわけじゃないんだろ。おまえらの仲間内でごちゃごちゃやってるだけなら、勝手に話し合いでも殴り合いでもやればいい」

僕は蒸気が抜けたみたいに、椅子に腰を落とす。

ほんとにその通りだな、と思う。

話し合いでも、殴り合いでも。できるのなら、それでいい。四代目のいるリングに、錬次さんが立ってくれるのなら。でも、今のままじゃ無理だ。錬次さんは明らかに、正面切って戦うつもりじゃない。

錬次さんを引きずり出すだけなら、テツ先輩や少佐やヒロさんの力が、強引にそれを成し遂げてしまうだろう。でも僕は、錬次さんに選んでほしかった。真実を知った後で、もう一度。四代目と向き合うのか、それとも背を向けたままでいるのか。

知ることは、死ぬこと。アリスが何度も口にした言葉を思い出す。

僕が追いかけているこの真実は、たぶん、まただれかを致命的に損なう。四代目や、錬次さんや、それから僕自身をも。

それでも、この手や足を止めるわけにはいかない。

草壁昌也（くさかべまさや）は、黙（だま）り込んでしまった僕を斜めににらんで、鼻を鳴らした。
「とにかく俺は詳（くわ）しいことは知らない。おまえには借りがあるから、後藤田組のやつにあたってみてもいいが、なにも喋（しゃべ）らないにきまってるぞ」
「そう……ですよね」
部外者に喋ってもいい事件であれば、そもそも揉（も）み消したりしない。
「あとは金の流れ調べればなにかわかるだろ」
「……金？」
「後藤田（ごとうだ）から雛村（ひなむら）に金が支払（しはら）われたってんなら、たとえ現金手渡しだったとしても、絶対にどこかに痕（あと）が残ってる。おまえらはそういうのを調べるのが得意だろうが」
僕は口をぽかんと開けたまま、うなずく。かなり間抜けな顔になっていたと思う。なるほど。全然思いつかなかった。
「やってみます、ありがと――」
「ダチなくすぞ」
草壁（くさかべ）に遮（さえぎ）られ、僕はぐっと言葉に詰まる。
「金の流れってのは、そいつの本性だ。わかってんのか」
「……わかってますよ」自分の手の甲に、視線を落とす。「でも、なんにもしなくたって、またべつの友達がいなくなるんです」

じっとしていたら、手の届かないところにいってしまう。それなら。
「ろくでもないな、おまえも」
草壁昌也に言われてしまうと立つ瀬がない。
「メオに金輪際近づくなよ。ろくでなしは俺一人でたくさんだ」
「はあ……」なぜにいきなりメオの話。
草壁が腕時計を確認しながら立ち上がったとき、背後でドアが開く音がした。
「クサカベさーん、ミンハイが来てるってほんと？」
振り向き、入り口に立っていたミニスカート姿の女性と目が合う。
「――ミンハイ！」
事務机を回り込んで駆け寄ってきたその人は、僕の隣の椅子にどしんと座った。
「もう、お店に来てよって言ったのに全然顔見せないんだから！」
「いや、僕は十六歳ですから」あんたの店は連れ出しパブだろうが。
この大陸系美人は依林さんといって、やっぱり草壁昌也の事件のときにかなりお世話になったお水のおねえさんである。見た目は大学生でも通りそうなくらい若いのだけれど、日本に来て長いらしく、日本語にえらく堪能。ただし僕の名前はなぜか鳴海と中国語読みする。
「それじゃ、わたしこれから出勤だし、同伴する？」

「話聞けよ。十六歳だっつってんだろが」あと手を握(にぎ)ってくるな。びっくりするでしょうが。

「同伴じゃないなら、なにしに来たの。あー、メオが目当てか。なんでもう世の中ロリコンばっかりなのかなあ」

草壁(くさかべ)さん助けて。どうやったら女に言葉が通じるのかわからないよ！

「依林(イーリン)。おまえ五年前っていうと新宿に住んでなかったか」

草壁が、まったくなんでもなさそうな顔でぼそっと言った。

「新大久保の『楼蘭(ろうらん)』て店にヘルプで行ったこと、何回かあるだろう」

「あるけど。え、またヘルプ行けってこと？　ていうかあの店ってまだあるの？」

「そうじゃない。そいつの用事だ。韓国(かんこく)人で、ヒソンて女がいたの、憶(おぼ)えてないか」

依林さんは僕と草壁を見比べて不思議そうな顔をしながら小さくうなずく。

「……いたいた。えらく美人で指名ナンバー1だったな。よく憶えてる。けっこう話したよ」

僕は思わず依林さんの手を握(にぎ)り返してしまう。

「どんな人でしたっ？」

「どんな、って。ミンハイその頃小学生でしょ、え、なに、どういう関係？」

「あの、その、ヒソンさんて人の――彼氏が、僕の知り合いで」

「ヒソンの？　って、ええっ？　だってあの娘のオトコって後藤田さんでしょ？　ミンハイって後藤田さんと知り合いだったの？」

　僕はあんぐりと口を開けたまま固まった。なんだ。なんの話だ？　後藤田？

　自失していた僕のかわりに、草壁昌也が腰を浮かせて依林さんに訊ねる。

「後藤田って、組長か」

「……う、うん。その話してたんじゃないの？　ヒソンて後藤田さんの愛人だったって。自分で言ってたよ」

　愛人。

　店のケツ持ちだったやくざ組長の、愛人。

　奇妙に頭が冷めていく。なるほど。それで四代目とも錬次さんとも、なんにもなくて、まるで三人姉弟みたいに暮らしてたわけか。二人とも知ってたのかな、これ。いや、知っててあんな無邪気な約束はできないか。それとも、四代目が隠していたのは、これか。

　それじゃあ、どうなる？

　僕がぼんやり思い描いていたのと、全然べつの絵ができあがるんじゃないのか。もっとおぞましく入り混じった欲望の色で。

「助手さん、晩ご飯食べてかないの？」

外の玄関まで見送りにきたメオが、僕の服の袖を引っぱった。

「おいメオ、俺がいないときに知らないやつを部屋に入れるな」

車の運転席から顔を出した草壁昌也が、きつい口調で言った。

「助手さんは知らないやつじゃないよ!」「いいから言うこと聞け」

親娘の言い合いを尻目に、車の後部座席に乗り込もうとしていた依林さんが、僕の耳元に顔を寄せて囁いた。

「一応、当時の知り合いにあたってみるけど。みんな店変わっちゃったり、この仕事やめたり、国に帰ったりしてるから、わからないな。ヒソンと同じアパートに住んでた娘も何人かいたはずなんだけど、連絡先わかんないし」

「……すみません。お願いします」

「ねえ、……殺し、なんでしょ? もう、そういうの関わらないようにしたら?」

ヒソンさんが刺されて死んだという事情は、けっきょく依林さんにも教えないわけにいかなかった。すると、やっぱりこんな心配をされる。

「そうできたら、いいと思うんですけど」

ほんとうに、心底そう思う。どうして僕らは、ただのぐうたらなニートとして、あのラーメン屋の暖かい路地裏で馬鹿騒ぎをするためだけに出逢えなかったんだろう。

二人を乗せた車が、排気ガスの熱い塊を残して走り去ってしまうと、メオがもう一度僕の腕を引いた。

「ほんとにご飯いいの？」

「……うん。ごめん」食欲どころじゃなかったし、あとお父さんの言う通り、部屋にあげるのはなんかこうまずいと思うよ？

「だって探偵さんの部屋には入り浸りでしょ？」

「うーん。あれは……探偵事務所だし」

　自分で言ってて、答えになってねえなあと思う。アリスの寝室であるのはたしかだし、あいつ常時パジャマだし。今さらながら、そういうのって気にした方がいいのだろうか。

「メオもいつでも大丈夫だから！」なにが大丈夫なんだ。「元気ないときは、うちでも、バイト先のレストランでも、来てね。まだ助手さんに全然恩返ししてないもん」

「……ありがと」

　もう少し明るい声が出せないのか、と自責する僕に、メオは真夏の太陽もかすむくらいの笑顔を向けてくる。

「待ってるから！」

✿

ヨシキさんはたいへん仕事が早く、八月の頭にバンドロゴTシャツが届いた。僕は美嘉さんに呼ばれて、デザイナーズオフィスまでサンプルを取りにいった。
「もーすごいですよ、めっちゃかっこいいです」
美嘉さんをはじめ、オフィスのスタッフたちもみんなさっそくロゴ入りTシャツに袖を通している。公式サイトのURLを記したQRコードが、和風柄の中にまったく違和感なく収まっているのだから、職人芸としか言いようがない。
「藤島さん、何着要ります？　三十着くらい？　いくらでも持ってってください、藤島さん顔広いからいっぱい配れますよね」
いや、僕はべつにそんなに顔が広くない。でもヒロさんに頼まれているので、ありがたく三十着いただく。
「あとこれ、ヨシキさんが藤島さんに、って」
そう言って美嘉さんがべつの袋から取り出したのは、ビニルで丁寧に包装された、同じバンドロゴTシャツ。
……いや、同じじゃないぞ？　柄はそっくりだけど、これ……
「刺繍？」

信じられない思いで包装を解いて、手触(てざわ)りでたしかめる。プリントされているのではなく、バンド名もQRコードもそのまわりの柄も、刺繍なのだ。

「え、な、なにこれどうしたんですか」

「これ『原版』なんだそうですよ」

原版？

「どうしても柄に刺繍のテイストを出したいから、ってヨシキさんが作ったんですって。これスキャンしたのと、もともとデザイン画像を合成して、とかなんとか言ってましたけど、さすがによくわかんないです」

僕は唖然(あぜん)とする。そこまでしてくれたのか。そういえば、刺繍にした方が映える図案だとは言っていたけれど。もう一度、シャツの表面をなでる。畳(たたみ)の目のようになった、密度の高いしっとりした刺繍だ。どれだけの手間なのか見当もつかない。

「……で、でも、なんでこれ、ここにあるんです？」

「だから藤島さんに渡してくれってヨシキさんが」

「えええええ？」

「だってこのTシャツ、藤島さんのアイディアですよ。それに藤島さんはPR部門のボスなんですから、オリジナル着るのは藤島さん以外にいないですよ！」

たいへんなものを押しつけられてしまった。軽々しく着られない。かといって返すわけにもいかないし、しかたなく受け取ってオフィスを出る。これライヴ終わった後でネットオークションに出したらいくらつくか

なあ、なんて一瞬考えてしまったせこい自分を殴りたい。

　自転車を飛ばして『はなまる』に戻ると、勝手口前にヒロさんがすでに来ていた。さっそくサンプルをまとめて渡す。

「いいね、これ。『エラン・ガバ』の初オリジナルTシャツってことになるんだろ。店頭より三日先に手に入るってだけで、女の子たちみんな喜ぶよ」

　ヒロさんは色とりどりのシャツの束を大張り切りで大量の紙袋に分けて詰め込む。これから知り合いの女の子たちにサービスで配りに行くのだという。

「来月あたり雑誌にも載るんだろ?」

「ええ……なぜかそうなっちゃいました」

　驚いたことに、バンドとは全然関係のないはずのファッション誌から取材の申し込みが入ったのだ。ヨシキさんが、表に顔を出したくない、取材なんて絶対に無理、と言ったので、僕と美嘉さんとでなんとか丸く収めたのが昨日のこと。さすがに雑誌の発刊はライヴには間に合わないのだけれど、CDの売り上げのためにも知名度はいくらでもほしいところ。金もかけずに宣伝になるのだから、パブリシティの重要さを痛感する。あっちこっちのニュースサイトだの雑誌社だのにメールを打って、あとは釣果待ち。ようやく手すきになった。

　広報の仕事がぎちぎちに入っているときはいいけれど、一段落ついてこの路地裏に顔を出すと、気分が沈んでしまう。ヒロさんだけではなく、少佐とテツ先輩もたいがいやってくるからだ。その日も、二人そろ

って昼過ぎに顔を出した。
「このチームはとっくに解散してんですが、平坂(ひらさか)が集めさせたみたいですね。リーダーだったやつはバイクショップでバイトしてるんで、仕事帰りに襲(おそ)えば」
「ンなまだるっこしいことやってられっか。そのチーム、何人だ？」
　テツ先輩は少佐のノートPCをのぞき込みながら、腕(うで)の包帯(ほうたい)を巻き直している。最近のテツ先輩は生傷(なまきず)が絶えない。
「定期的に集まってるのは五人ですね。さっき平坂からの指示があったのを盗聴(とうちょう)したんで、東口のカラオケでミーティングの予定でしょう」
「ならこれからカチ込もうぜ。その方が早いよ。一匹(ぴき)ずつ潰(つぶ)すとかやってられん」
「スタングレネード使います？」
「馬鹿、カラオケ屋なんだろ。通報されるだろうが」
「なら催涙弾(さいるいだん)で。これなら音も光も出ません」
「煙出るだろうが」「涙(なみだ)も出ますよ」「鼻水もな」「まあ、顔から出るものだけなのでさほど不潔では。スタングレネードだとちびるやつもいるんで」
　話し合い（？）を終えた二人は立ち上がり、僕とヒロさんの脇(わき)を通り抜けようとする。テツ先輩は僕の迷子(まいご)みたいな視線に気づいたのか、立ち止まって苦笑する。

「べつに全員病院送りにしてるわけじゃねえぞ？　殴った後で話し合ってるからな？」
「ほんとに？　口がきけないくらい殴ってんじゃないの？」とヒロさんが疑いの目。
少佐がICレコーダーを取り出し、その『話し合い』を聞かせてくれる。
『……ンだよ。あの人、目がやべえんだよ、ゴーグル外すだけで、こっちは殺されンじゃねえかって。わかるだろ。どっかに飛んだっつってたから安心してたのによ』
『そりゃ平坂組はうぜぇし、こっちは色んな店を出入り禁止にされたし、恨みもあったよ。それに平坂さんは金もけっこう気前よかったし。でも、そういう問題じゃねえよ。とにかくあの人は怖いんだよ。やれって言われたら、やるしかなかった。警察沙汰？　そりゃなるよ、火事まで起きたんだろ。でもあの人の方が怖いんだよ』
『痛ぇな！　わかってンよ、もう手は出さねえ。おまえらみたいなのに関わってられっか』
何人かの男の声がぐちゃぐちゃに聞こえて、よく状況がわからないのだけれど、どうやら上野のライヴハウスを襲った連中らしかった。
錬次さんがやつらを従わせるのに使っているのは、金と──そして、畏怖。
「実際に錬次に殴られたってやつは、今んとこ一人もいないんだけどな」
テツ先輩がつぶやく。
「おかげで俺が殴ると効果覿面で言うこと聞くわけ」

先輩と少佐のここのところの活動は、もはや探偵団でもなんでもなかった。錬次さんの息がかかっている連中のねぐらを順繰りに襲って、説得（先輩の弁による）しているのだ。

「四代目は表のビジネスで大事な時期だし、平坂組もイベントスタッフだから下手なことできないしな。おいしいとこは全部俺がもってくぜ」

「平坂捕まえられなきゃゴミ拾いしてんのと一緒ですよテツさん」

「っつったってなあ、どこにいるかわからんからしょうがない。あいつともいっぺん勝負つけときたいんだが。携帯もまた替えたんだろ、あいつ」

「我々の間では平坂が飛び抜けてホームレス資質ありましたからね……」

二人は路地裏を出ていってしまう。僕は少佐が残していった、錬次さんの協力者リストを手にとる。半分くらいに×印がついている。ぞっとする手際である。

でも、のぞき込んできたヒロさんは沈んだ口調でつぶやいた。

「……なんで、こんなに大勢動かせるなら、もっと直接やってこないんだろうね」

僕はヒロさんの顔をちらと見上げ、またリストに目を落とす。

ヒロさんの言う通りだった。錬次さんは手下を使って細かい妨害工作を繰り返している。ライヴ予定会場は、すべてなんらかの形で襲われた。ゴミ捨て場を荒らされただけというところもある。

報告を聞いた四代目は、犬がなわばりににおいをつけただけだろ、と皮肉を言った。でも、それぞれのイベント会場に組員を配備して、ほぼ二十四時間態勢の警備を敷かないわけにはいかなくなった。

平坂組にとっては痛い。でも、やっぱりいつかの疑問に戻ってきてしまう。
錬次さんは、なにをしようとしているのか。
イベントを潰したいだけなら、もっと他にやりようがある。なにせかなりの資金力があるらしいことがわかっているのだ。四代目の信用を貶めたいなら、もっと急所はいっぱいある。
なんでこんな、けちな真似ばかり。
「ま、考えるのはアリスに任せよう。おれらは手足になって調べるだけ」
ヒロさんは立ち上がりかけ、ふと付け加える。
「ああ、そうだ。依林から電話あったよ」
「ええっ?」
変な声になってしまう。依林さんは、ヒロさんの元彼女。そしてこの人はスケコマシなので、女性との別れは例外なく後味が悪い。依林さんもたしか、携帯から番号消したとか言ってたはずなんだけど……。
「ヒソンて人の、隣の部屋に住んでた娘と連絡がとれたんだって」
僕は立ち上がった拍子に木台の角に膝を思いっきりぶつけてしまう。
「ちょ、ま、待ってください、なんでヒロさんに知らせるんですか、僕じゃなくてっ?」
「おれに未練があったからじゃないの?」
ええええ。なにそのポジティヴ思考。

「ていうのはともかくとして、ナルミ君はそろそろ自分が高校生だってのを思い出した方がいいんじゃないかな」
「そろそろ永久に忘れそうです」
　春休みも同じことを思った。新学期からちゃんと学校生活に復帰できるだろうか。このまま路地裏にへばりついて生きていくんじゃないだろうか。
「とにかく、やくざがからんでる殺しなんだから、ナルミ君は嗅ぎ回るなって。危ないよ。初対面の女からそんなディープな話聞き出すなんて、おれの仕事にきまってるだろ」
　僕は腰を下ろして、両膝の間に重たい息を吐き出す。ヒロさんの言う通りだった。依林さんも心配してヒロさんの方に話を回してくれたんだろう。
「ナルミ君はちゃんとやってるよ。大丈夫」
　ヒロさんの、思いがけず力強い手が、僕の肩に触れる。
「イベントだって盛り上がってきてる。美嘉ちゃんも誉めてるじゃん」
「でも、どんだけ盛り上げても、爆弾が一つ落っこちてくるだけで、みんなだめになっちゃうんですよ」
　僕は三回も錬次さんに逢った。もっと、なにか。なにかできたんじゃないのか。
「そういうところは、アリスに似なくてもいいんだよ」
　ヒロさんは心底おかしそうに笑う。

「アリス、に……？」
「なんでも自分のせいだって思い込むのは、そっちの方が楽だからなんだってさ。ほんとは、他人に預ける方が勇気が要る」
優しい顔で言われ、僕は地底まで落ち込んだ。
ヒロさんが勝手口前から出ていってしまった後で、僕はひとり古タイヤに腰掛け、元気のない蟬の声を聞きながら考える。ふさいでいたってしょうがないのだ。僕は、現状では錬次さんと接点がある。考えるしかない。
うなだれて物思いにふけっていると、勝手口からミンさんが顔を出す。
「おいナルミ、アリスの昼飯できたぞ。冷やし中華の麵と卵とハム抜き、出前頼む」
それだけ抜いてなにが入っているのかと思いきや、冷たいスープにキュウリだけが浮かんでいた。なんつう料理だ。ただでさえローテンションなんだから、こんなもの運ばせるのはやめてくれないだろうか。見ているだけで哀しくなってくる。
「後藤田組長のポケットマネーとおぼしき口座の動きを洗ったよ」
ベッドの上でキュウリをしゃくしゃく嚙みながらアリスが言った。背後のモニタには、どれもびっしりと数字が並んでいる。

「店のマネージャー経由で毎月の支払いがあり、これがヒソン失踪と同時に止まっている。傍証に過ぎないが、愛人だったという可能性はあるね」

「うん……」

「それからヒソン失踪の月に、一挙に二千万円の不透明な支出がある」

僕はぞっとして、草壁昌也の言葉を思い出す。金の流れは、人間の本性。ほんとうにその通りだ。ニート探偵の手で、なにもかもがさらけ出される。

「このうち、一千万の振込先は医者だ」

「……医者？」

「この医者の身元だけは簡単に割れた。後藤田が懇意にしていた外科医だよ。ヒソンの治療を試みたのだろう。口止め料なのか、死体処理代まで含めているのかわからないが……残念ながらかなりの高齢だったので、もう他界している」

僕はがちがちにこわばった唾を飲み下す。

「もう一千万は、足立区にある不動産業者に振り込まれている」

「……不動産？」

「この業者が、四代目とつるんでいた悪徳業者でね」

そういえば、電柱がそんなようなことを言っていた。ケツ持ちの後藤田組を追い出すとき、四代目が不動産屋と組んで、ビルや土地の権利関係でなにか工作をした、と。

「じゃあ、その一千万が、四代目への口止め料？」

「可能性はある。四代目は当時、まともな銀行口座を持っていなかっただろうからね」

僕は嘆息して、冷蔵庫からドクターペッパーを取ってきてやる。

ほんとうに、口止め料をもらっていたのか。こうして金の流れというたしかな証拠を挙げられてしまうと、認めるより他にない。四代目の——本性。

「もう一度確認したい。平坂錬次は、こう考えているわけだね？　後藤田組のだれかが四代目を殺そうとしてアパートに押し入り、同居人だったヒソンが四代目をかばうか、あるいは四代目がヒソンを盾にしたかで、誤って刺された。四代目は口止め料をもらい、ヒソンという女の存在そのものが最初からなかったことになった」

僕は痛ましい気持ちでうなずく。でも、ドクターペッパーを一気に飲み干したアリスは、眼を細めてさらに言った。

「ぼくはきみのように、仁義などというあやふやなものに立脚して四代目を評価しているわけではない。でも、至る結論はきみと同じだ。どうにもこれはおかしい。筋が通らない」

「……え？」

「だってそうだろう。なぜ後藤田組は、四代目もそのまま殺さなかった？」

探偵の、冷えきった顔を見上げる。その言葉の意味が、冷房の風と一緒に、ゆっくりと僕の肌に染み込んでくる。

そうか。たしかに、変だ。

後藤田組は、四代目が率いる平坂組によって、キャバクラ『楼蘭』のみかじめ料徴収権を奪われた。しかも四代目は組長愛人の浮気相手だ。狙われてもおかしくない。僕はそう納得していた。

それなら、なぜ四代目を生かしておいて――あまつさえ口止め料まで。

「……四代目を殺そうとしたのは、部下の暴走で、後藤田の指示じゃなかったとか」

「何千万も払ってそんな部下をかばうのかい？　組の看板を守るにしたって、もっとべつのやり方がある」

それもそうか。組の意思で四代目を殺そうとしたと考えるより、さらに筋が通らない。

「前提が、間違っているのだね。おそらく」

「……どこの？」

訊ねながら、ふと思い至る。

四代目と後藤田組が、最初から敵対関係でなければ――辻褄が合うんじゃないのか。

いや、でも。まさか。それじゃ今度は、四代目が狙われる理由がなくなる。

「まだわからない。あるいは、すべてかもしれない。ヒロが聞いてくる情報を待つしかないよ。どうなるにせよ」
アリスのつぶやきが、プランクトンの屍骸のように、冷房された空気の底に積もっていく。
「これがなにかを隠すための嘘なのだとしたら。その下にある真実は、これよりもずっとひどいということになる」

✻

しばらく姿を見せなかったヒロさんが、『はなまる』に戻ってきたのは、その翌週のことだった。僕と少佐は、勝手口前で膨大な量の盗聴データを分類している最中だった。
「調子どう？　ミンさんにアイスもらってきたよ」
路地裏の日陰に入ってきたヒロさんの口調に、僕は不自然な明るさを感じる。少佐も同じように勘づいたのだろうか、ヒロさんの手からカップに入ったヴァニラアイスを受け取っても、全然嬉しそうな顔をしない。
「平坂の立ち寄る場所は五箇所まで絞れたんですがね」
固い、事務的な口調。

「寝泊まりしている場所がわからない。携帯さえわかりゃGPSで一発なんですが、また携帯替えたみたいだし電源もこまめに切ってるみたいで」

「アリスが携帯から居場所割り出せるってこと、知られちゃってんじゃないの」

　少佐はふうっと息をつく。

「かもしれません。我々もこの街ではあまりに無敵すぎましたからね。名が売れてしまった。我々の圧倒的な技術力について、だれかが平坂に教えたとしても不思議ではない」

　アリスの探偵力は、携帯電話という重要個人情報の塊に対するアプローチが非常に大きなウェイトを占めている。携帯を捕捉できない相手に対しては、かなり弱いのだ。

「それに、そもそも平坂たちは八月に入ってから動きが全然ない。先手も後手も停滞です」

「ライヴ当日に暴れるつもりじゃない？」

「かもしれないですね。警備の手が抜けない。平坂組の連中はどうせ他にやることありませんし、かまわないのですが。ところでヒロさんの方の収穫は？」

「ああ、うん」

　木台に寄ってきたヒロさんは、ポケットから短い銀色の棒を取り出す。ICレコーダーだ。少佐が改良したので、超小型で集音性能抜群。ニート探偵団の必携品である。

　でもヒロさんは、レコーダーを少佐に手渡すのをひどくためらった。手のひらにのせてじっと見つめたまま、僕のすぐ隣に立ちつくしているのだ。

この人でさえもこんな、見ているだけでつらい顔になってしまうときがあるのだな、と僕は思う。
「アリスに聞かせる前に、自分らに？」
少佐が訊(たず)ねる。ヒロさんはようやくうなずいた。
「うん。聞いといてほしいんだ。それで、ほんとにアリスに聞かせるべきなのか――ああ、いや、もちろん聞かせなきゃいけないんだけどさ、とにかく」
ヒロさんは口ごもる。少佐は黙(だま)ってうなずき、ノートPCにレコーダーをつないだ。スピーカーに接続されたときのノイズは、まるでまぶたの裏にまで響(ひび)く注射針の痛みのようだった。
『……ねえ、ほんとに、組の人じゃないんだよね？』
くたびれきった、女の人の声。だれだ？　僕はヒロさんをちらと見る。
「ヒソンの隣(となり)に住んでた人。見つけるのに一週間かかった。今は普通のOLだったよ」
僕は息を呑(の)む。見つけたのか。依林(イーリン)さんが言っていた、事件当時に隣室(りんしつ)にいたという女性。
『絶対喋(しゃべ)るなって言われて。……え、や、やめてよ、会社には！　言わないで、わ、わかったから、話すから』
「……おれも焦(あせ)っててさ。悪いことしちゃったな」
ヒロさんが苦い顔をする。こんな脅(おど)し文句はたしかに、ジゴロの流儀(りゅうぎ)じゃない。
『でも、ほとんどなにも知らない。寝てたし。……そう。仕事に出るちょっと前。夕方』
ヒロさんが訊(たず)ねる声がかすかに聞こえる。

――ヒソンと同じお店で働いてたんだよね？
『うん……でも、その頃ヒソンほとんどクビになりかけてた』
――なんで？
『生理休暇っていって一ヶ月休んでた。生理なんて嘘じゃない。店長に言われて調べてたんだけど、ゴミにナプキン出たの見てなかったし。でも具合悪いのはほんとだった。腰痛すごくて立てなかったみたい』
――病気かなにか？
『わかんない。もう全然動けないくらいだったらしくて、たまに男の子が来て、面倒見てた』
――それって髪を白く染めたやつじゃなかった？
『うん、そう。知ってるの？　……ごめん、もう訊かない。……うん。その日もその子、来てたみたい。隣でいきなりすごい音がして、女のものすごい声が聞こえて……すぐに車が来た。組の連中。見たことある黒服が何人か。ドア開けてのぞいたら、血だらけのヒソンが運ばれてた。ドスがお腹に刺さったままだった。抜くと血が止まらなくなる、とか黒服が言ってた』
　僕は無意識にドラム缶のふちをつかんで、かがみ込まないようにこらえていた。
『あと、男の子。肩から血流してて。……そう。……刺したやつ？　ううん、見なかった。見てたら無事じゃ済まなかったかも。……そう。うん』
――ヒソンの悲鳴以外に、だれかの声は聞こえなかったの？

ヒロさんが質す声は、どんどんか細くなっていくような気がした。

『え？　……ううん、ヒソンじゃない。ヒソンの声じゃなかった』

僕は目を見開いた。ヒロさんに、それから少佐の顔に、視線を移す。

『ちがう女の声。赦さないとか、殺してやるとか、こそ泥、とか』

女。

刺したのは、女？

やがてレコーダーは停止する。指一本動かせないほど濃密な沈黙が、ビルの谷間にみっしりと充満していた。

ここに三人もいて、録音された死を共有できたことが、よかったのか悪かったのか、わからない。最初に少佐が動いた。レコーダーのデータをPCに移し替えて、接続を切った銀色の棒をヒロさんに投げ返す。キャッチしたヒロさんが立ち上がり、何度も矯めつ眇めつしたあとで、やがて非常階段に向かって歩き出す。

僕は、ドラム缶に尻を押しつけたまま、じっと動けない。

ヒロさんの足音が、やけに遠く聞こえる。少佐がまたヘッドフォンをかぶってキーボードを叩く。どこかに穴が開いて、ぬるい水が流れ出している。でも砂漠はまだずっと続いていて、歩き続けなきゃいけない。そんな奇妙な感慨にとらわれた。

立ち上がった。少佐に呼び止められたような気がする。それでも僕は、声を振り切ってビルの隙間から飛び出した。八月の強い陽光が目を刺激する。全身から汗が噴き出す。首筋に粘りついているのは、レコーダーに刻まれていたあの女の人の声だ。

有料駐車場の隅っこに置いてあった自転車を道路まで引きずり出して、スタンドを蹴り飛ばす。ペダルの一踏みで、あの女の声は切れ切れの風の中に呑まれて遠ざかる。

平坂組の事務所には、四代目しかいなかった。テーブルを挟んで向かい合ったソファがまったく空っぽのところなど、はじめて見た。五つあるライヴ会場すべてに交替で警備を送っているので、事務所でたむろしている人員の余裕などないのだ。

請求書の束と格闘していた四代目は、僕が入っていくと、ちらと目だけを上げた。視線が合うと、僕は思わず頭を下げてしまう。

「……すみません、勝手に来て」

「おまえは身内だし鍵だって持ってるんだから、勝手もくそもねえだろ。今日は新聞の取材が入ってるんじゃなかったか」

「あ、それは美嘉さんに投げました」

「なら、おまえも二、三日休んでもいいぞ。鍊次もしばらく黙ってるし、ヤサ探すのは少佐とアリスにしかできねえ。おまえは日給制なんだからどんどん休め」
「四代目ってほんとお金にうるさいですよね」
「ケチな親に育てられたからな」
　どうやって育てたら、こんないびつなリアリストに成長するんだろう。
　あんな真実をひとりきりで呑み込めるような人間が、どうやってできあがるんだろう。
「なんだよ。世間話しにきたのか」
「……いえ」
　僕は目を伏せ、握り拳の中で汗を押し潰し、また顔を上げる。ソファとデスクを迂回して、四代目に近づく。いつもの黒メッシュ生地の袖なしシャツなので、両肩がむき出しで、二の腕の入れ墨の代紋もはっきり見える。
　思わず、指を伸ばしてしまう。四代目は請求書から僕に視線を移した。
「なんだっつってんだ」
　黙って代紋に触れた瞬間、四代目が立ち上がって腕を振り払った。弾き飛ばされた僕の手にじいんと痛みが浮かぶ。
　でもたしかに、指先で感じた。傷痕だ。入れ墨で隠された、深い裂傷のあと。
「おまえ――」

襟首をつかまれたけれど、僕は四代目の憤りに燃える目をまっすぐ見つめ返す。

「狙われたのは四代目じゃなかったんですね」

狼の目の中で、炎が強く何度か燃え上がり、それから熾火に変わる。

「なに言ってんだ、おまえは」

「ヒソンさんの隣に住んでいたっていう女の人に、ヒロさんが逢ってきたんです。事件があった日のことも聞きました」

四代目の喉が低く鳴る。鎖骨の裏を引きむしられるような痛み。僕は唇を噛んで、続く言葉を探る。

ヒソンは腰痛と腹痛で動けないくらいの状態だった。四代目をかばって腹を刺されるなんてこと、できなかったはずだ。そして、事件後の後藤田組の奇妙な動き。なぜ四代目を殺さなかったのか。

ごくシンプルな答え。

「狙われてたのは、最初からヒソンさんだったんだ」

自分でその一言を突き立てておきながら、僕は四代目の顔が見られない。

「それを四代目の方が、かばおうとして。肩を斬られて。それでも」

でも、守れなかった。

その言葉は、吐き出せずに僕の肺の中にたまって、身体を内側から刺す。

「おまえの勝手な想像だろ」

僕の身体を押しやって、四代目は椅子に腰を下ろした。

その通りだ。僕が勝手に辻褄を合わせただけだ。それに、こんな真実は、なんにもならない。錬次さんに教えられるか？　無理だ。そんなの、つらすぎる。

「だから余計な詮索すんじゃねえっつったんだ。馬鹿か」

四代目の言葉が僕の肋骨の間をえぐる。知らないままでいるべきだったろうか。わからない。だって、知らないままの錬次さんはやっぱり苦しんでる。

ねえ、アリス。僕は探偵にはなれそうにもないよ。なにも言わずに飛び出してきてしまったけれど、これからどうすればいいのか、全然わからない。ヒソンさんのことをほんとうに好きだったはずのあの人に、なにをどう伝えればいいのか。あるいは、どんな笑えない嘘を叩きつければいいのか。

「俺だってわかんねえんだ。おまえにわかってたまるか」

僕は壁に背中をべったりはりつけて呆けたまま、四代目の横顔を見つめる。それは僕がこれまでに聞いた中で、いちばん優しい彼の言葉だった。恥ずかしくていたたまれなくなり、出口に向かおうとして、ソファの背もたれにへたり込む。

このまま、錬次さんとただの敵として接して、殴り合って、お互いにぼろぼろになるのが正しいのじゃないかと、そう思えてきた。

いや、なに考えてんだ。いつか四代目に吐いた言葉、忘れたのか。まだ、あの家紋の刺繡のTシャツはアリスに預かってもらっているままだ。あんな真似までして錬次さんとのつながりを必死で繕ったのに。なにも伝えないままで、終われないだろう。

「俺もあいつのことはよくわかんねえんだ」

四代目がぼそりとつぶやく。

「一緒に色々と馬鹿やったし、喧嘩もしたし、貸し借りも数え切れないくらいだった。でも、なに考えてんのかわかんねえやつだった」

「そんな、よくわかんない人と。盃交わして、約束も交わして。よくわかんない人のために、みんな汚れひっかぶって、馬鹿みたいな嘘ついたんですか」

「わかってんなら黙ってろ」

平坂組の事務所を出ると、『はなまる』には戻らず、そのまま家に帰った。バンド公式サイトのブログを更新する。せいいっぱいの明るい言葉を並べて、来週に迫った祭りへの期待を煽る。不思議なものだ。こんなに頭の中がぐちゃぐちゃなのに、文章をタイプしていると落ち着いてきて、いくらでも嘘が出てくる。美嘉

さんの言う通り、物書きに向いてる部分があるのかもしれない。だとしても、こんなうそ寒い仕事を生涯（しょうがい）続ける気にはなれないけれど。

記事のアップロードを終えると、ベッドに寝転がる。

もう、アリスはヒロさんが持ち帰ったあの録音を聴いたはずだ。

彼女なら、どう判断を下すだろう。もう昔のアリスじゃない。無知によって平穏（へいおん）を保つことの大切さを、知っている。錬次さんの抱（いだ）いている憎悪（ぞうお）が誤解だということも、知っている。

錬次さんに伝えて、傷つけるか。

伝えないままに、朽（く）ちさせるか。

どちらの答えも、アリスの口から聞きたくなかった。

✻

『「はなまる」まで来ておきながら顔も出さずに帰るとは、どういう了見（りょうけん）だいっ！　しかも何度かけても出ない、どうせいぎたなく惰眠（だみん）を貪（むさぼ）っていたのだろう』

翌朝、そんなアリスからの電話で叩（たた）き起こされた。

「……うむ。むにゅむにゅ」

なにか言おうとすると、寝ぼけた声が出てくる。

『せめて地上に存在する知的言語のどれかを使いたまえ』
「ええと。なんか用事が――あ、あぅう、いやごめん」
用事などなくても助手なのだから顔を出せと、また怒られるところだった。
「あの。なんか、あれ聴いた後だと、その。アリスと顔合わせづらくて」
一緒にあの録音をもう一度最初から聴くなんて、想像しただけでしんどい。
『だれとどんな時間を過ごそうが、真実は減ったりしないのだよ。ただ積み重なって湿気(しつけ)を吸って膨張(ぼうちょう)していくだけだ』
「それがつらいんだってば」
『この腰抜(こしぬ)け。ミジンコだって水圧と浸透圧に耐えているというのに、なんだいきみは』
ごめんなさい。「……悪かった。今から行くよ」
『む、む、来いとは言ってないぞっ』
じゃあなんで電話かけてきてんだよ。
「わかったよ、邪魔(じゃま)するのも申し訳ないから、今日は一日寝てる」
『いいからとっととドクターペッパーを一箱買って持ってきたまえ!』
どっちなんだ。電話が切れた後で、僕はようやく昨日(きのう)帰ってきた服装のまま爆睡(ばくすい)してしまったことを思い出す。やばい、風呂(ふろ)入らないと汗臭(あせくさ)くて死にそう。おまけにPCつけっぱなしだった。ブログ更新完了の画面のままである。

ブログには早くもトラックバックがいくつかついていた。あのバンドロゴTシャツを着た写真つきのエントリもある。『エラン・ガバ』の店頭を写した記事も。

もうすぐ祭りなのだ。僕が投げ込んだ火は、街中に広がっている。もう止められないところまできている。

シャワーを浴びた後で寝室にまた戻り、ヨシキさんが送ってくれた、豪華な刺繍入りTシャツを取り出した。僕が、最初に灯した火だ。やっぱり、着ないわけにはいかないだろう。

風呂上がりの肌に、刺繍の裏地がしっとり張りつく。

なじみの酒屋に寄ってドクターペッパーを買い、『はなまる』に行った。店の脇に自転車を駐めて勝手口の方に回ろうとすると、店頭に水を撒きに出てきた彩夏と鉢合わせする。

「おはよう藤島くん！　って。……わあ」

僕のTシャツの胸をじろじろ見て、彩夏はしばし口ごもり、あわてて付け加える。

「Tシャツはかっこいいね！」

Tシャツは、ってどういう意味だおい。

「それヨシキの手製だろ？」と、暖簾の向こうからミンさんが言う。

「ええ……わかるんですか」
「見りゃわかる。全然似合ってないな。服がかわいそうだ、手間かかってんのにもったいない」
うるさいな、なんだよ二人がかりで！
探偵事務所に顔を出すと、ベッドの上で振り向いたアリスがさらに追い打ちをかけてくる。
「やけに見事なTシャツが宙に浮いてると思ったら、ナルミじゃないか。服に比べて存在感が皆無だから見誤ったよ」
なんなの？　示し合わせて僕のファッションを馬鹿にするのが流行ってるの？　ふてくされながらも、箱から出したドクターペッパーの缶を冷蔵庫に移し替える。
「どこから盗んできた服だい？」
「ヨシキさんが作ってくれたんだよ！　僕専用なの、あいにくとね！」
頭にきたので、ドクペを五本まとめて持っていってサイドテーブルに並べ、みんなプルタブを上げてやる。ベッドの端に腰掛け、アリスがどんな反応をするか陰険な気持ちでうかがっていると、平気な顔で五本立て続けに空にされてしまった。あの身体のどこに二リットル近くも液体が入っちゃうんだろう？
でも、缶を塔にして積み上げたアリスは、ふとさみしげな目になる。
「……きみは、がんばったね」
「え？　ええ？」なんだいきなり。

「四代目の手伝いの仕事だよ。手伝いとは呼べないくらいの働きだ。客観的に見て、そう思う。ひょっとしてきみはニートではない道を選べるのかもしれない。そう錯覚（さっかく）するほどだ」
「いや、錯覚じゃなくてもいいんだけど……」
　アリスにそんなことを言われるとは思わなかった。でも、どうしてそんな、ひびの入った氷みたいな瞳（ひとみ）でいるんだろう。
「ときおり思う。きみを探偵（たんてい）助手に縛（しば）り付けているのは間違いじゃないかと。きみはもっとべつの何者かになれるんじゃないかとね」
　なんで。なんで今、いきなりそんなことを言うんだ。
「……ええと。昨日（きのう）、顔出さないで帰っちゃったの、怒ってる？」
「怒ってない」
「怒ってるよね……」
「怒ってない！　ただ、考え直してるだけだ」
　僕のすぐそばで、アリスは正座して膝（ひざ）に両手を押しつけ、むすっと横を向いている。そんな顔をさせてしまっていることに、胸が痛む。
「ごめん。悪かったよ。たしかに最近、イベントの仕事で忙しくてアリスのこと」

「なんだそれはっ」アリスは頬を染めて髪と声を震わせる。「ぼくはだれかにかまわれてないと死んでしまうウサギじゃないぞっ」

「ああ、うん、いや、そういうことじゃなくて」

「そういうことじゃない、はこっちのせりふだよ！　いいかい、ぼくが省みているのは、きみという特段に強靱な精神を持ち合わせているわけでもない男に、死者の言葉の重みを安易にも負わせてきたことについてだ」

　アリスは僕の胸にその細い指を突き立てて言う。

　死者の言葉の重みを、安易に負わせてきた？　だって、それが僕の役目じゃないのか。探偵助手は、ただ探偵のそばにいて――

　探偵助手に、縛り付けられている？　僕が？　そういうこと？

　アリスの濡れた瞳を、見つめ返す。

「僕は」

　言葉を一つ一つより分けながら、口にする。

「たぶん、探偵にはなれない。今回のことで、わかった」

　アリスの瞳はそのまま海の中に溶けそうになる。

「たしかに、僕にはアリスみたいな強さはないよ。いつも、なにかひどい事情を知るたびにおたおたして、藪の中を走り回って勝手に傷だらけになる。馬鹿だし、視野も狭いし。でも」

シーツの端を、無意識にきつく握りしめる。

「探偵助手のままで、ずっといていいなら。……半分か、三分の一か、どれくらい背負えるかわかんないけど。だって。……アリスだって、全然平気なわけじゃ、ないだろ」

アリスはいきなり目を伏せ、僕のTシャツの胸にごつんと額を打ちつけた。

「——痛っ。……アリス？」

「なにを」探偵の声は、さっきよりもさらに震えている。「えらそうに。知ったような口を。なんだって？　ぼくの重荷を、きみが背負うだって？」

僕の膝に、アリスの熱っぽい言葉がぼたぼた落ちて、肌を灼く。

「どれだけ厚顔なんだ。靴の中にネズミ花火を入れられても気づかないくらい鈍いくせに。思い上がらないでくれたまえ、半分だって？　三分の一？」

「あ、あの、ごめん——」

小さな握り拳が、僕の鎖骨の下にぐっと押しつけられる。顔を上げないまま、アリスが吐き捨てるようにつぶやく。

「……きみのそのせせこましい肩（かた）じゃ、五パーセントがせいぜいだ。……ないよりまし、以外の表現は思いつかないよ」
「あ……」
　僕の声も、安堵（あんど）と嬉（うれ）しさとで、ぶれそうになる。いないよりもまし、それでもいい。この小さな肩（かた）を苛（さいな）む痛みが、少しでも軽くなるのなら。
　アリスのかすかな体重を胸で支えながら、しばらく冷房の回る無機質な音に耳を澄（す）ませ、アリスの次の言葉を待った。僕の肩に、その五パーセントが委（ゆだ）ねられるのを。
　やがてアリスは、僕の胸を両手で押し戻し、頭を離す。
　言葉は、僕らの間にぽつりぽつりと浮かぶ。
「後藤田（ごとうだ）組の組長のことを調べた」
「うん」
「組長の妻（つま）は五年前に離婚して、実家に戻り、精神科に入院して今も療養（りょうよう）中だ」
「……うん」
「後藤田の主治医が他界している以上、状況証拠（しょうこ）しかない。離婚がヒソン殺害事件の直後であるとか、ヒソンの隣室（りんしつ）の女性が聞いた『女の声』とかね」

でも、それが真実なのだろう。そうでなければ、四代目があれほどの犠牲を払って錬次さんの目から隠したりはしない。
　だから、僕から訊ねる。たぶん、これが僕の担う五パーセントぶん。
「……ヒソンさんのお腹にいたのは、組長の子供――ってことだよね」
「たぶんね」
　僕の胸につっかえ棒にしているアリスの腕が、弱々しく痙攣する。
「だから組長の妻は、腹を狙ったんだろう」
　もう言わなくていいよ。僕はそうアリスに言ってしまいそうになる。でも、言葉にしなくてはいけない。なぜなら、これは四代目の痛みだ。たとえこの場にいないとしても、共有しなくちゃいけない。
　四代目が守ろうとして、守れなかったもの。
　それで、どうすればいい？
「……錬次さんに、伝えなきゃいけないかな」
　自分ではどうしても答えの出せなかったその問いを、僕はアリスに預ける。きっと彼女にも答えは見つけられないだろう、と思いながら。
　アリスは僕の胸に手をあてたまま、首を振る。
「それは、ぼくにも――」

でもそのとき、アリスの目が見開かれて、唇の上で言葉が凍りつく。アリスの小さな手が、その細い指が、何度も何度も僕の胸を──刺繍されたバンド名のロゴをなぞる。
「……これ……」
「どうしたの」
　アリスの手がシャツを強く握りしめた。自分のいのちのために使わなければいけないはずの彼女の体温が、流れ出して布地に染み込んでいくような気がして、僕は不安で押し潰されそうになり、その手首をつかむ。アリスは僕の手を振り払い、シーツの上で立ち上がった。
「……そう、か。……そういうことか」
「アリス？」
「わかった。みんなわかった」
　なにが？　その問いは、僕の喉に押し込まれる。青ざめたアリスの顔から、あの奇妙な生気が放たれているのに気づいたからだ。
「告げなくちゃいけない」
「……え？」
「平坂錬次に、真実を告げなくちゃいけない。四代目は間違っている。それがどれほどの痛みであっても。嘘の蜜で傷口を塗り固める方が、どれほど楽であっても。──それは、間違っている」
　アリスはかがみ込み、僕の両肩にぎゅっと手を置いた。

「平坂錬次を見つけるんだ。絶対に！」
探偵事務所を出て非常階段を下りると、勝手口の前に人影が三つ集まっていた。驚いたことにヒロさんもテツ先輩も、少佐さえも、バンドロゴ入りのTシャツを着ている。
「……な、なんか不気味なんですけど」
偽らざる感想が、つい口を突いて出てしまう。
「おまえも同じシャツ着てて、よく言うよ」とテツ先輩は肩をすくめる。
「着て歩き回るだけで宣伝になるからね。あと一週間ないけど、少しは貢献しようと思って」
ヒロさんは真っ白な歯を見せる。
「知り合いの憂国軍全員にこのシャツを配って真っ昼間から新宿で銃撃戦を展開すればさぞかし話題になると思うんですがどうでしょう」少佐がやる気満々で言う。
「逮捕されるときはシャツ脱いでくださいね……」
僕はため息をついて、非常階段の二段目、ヒロさんの隣に腰を下ろした。
「アリスんとこでなんかあったの？」
ヒロさんが顔をのぞき込んで訊いてきたので、僕はどきりとして腰を浮かせる。

「なんか、って」
「ナルミ君、珍しくやる気が顔に出てるから」
「ああ……」
　珍しいのか。そりゃそうか。しかも、こんな状況でようやくやる気があるように見えるのか。もうちょっと潑剌とした人間になりたいな。
「錬次さんを絶対見つけろって、アリスに言われました」
　理由はなにも口にしなかった。僕だってよくわからない。アリスはなにに気づいたんだろう。しかも、このTシャツを見て。
　錬次さんに、伝えなければいけない真実。
「それだけ？」
「それだけ、って……ええ、まあ。それだけですけど」
「ふうん？」なんでヒロさん愉しそうなの？
「見つけろ、って気軽に言うけどよ。ほんとに、さっぱり動きがなくなったぞ」
　テツ先輩が氷あずきを乱暴にかきこみながら不機嫌そうに言う。その腕にはガーゼや湿布がべたべた貼ってある。そういえば最近は新しい傷が増えていないような。
「当日、会場で待ち伏せするしかないんじゃね？　錬次が自分で来るかどうかわからんが」

「ライヴは当然、我が軍の技術の粋を結集させて警戒態勢をとりますが。入場する者は即座に入り口で爆殺するくらいの」やめろ馬鹿。お客殺してどうする。

「ほんとに当日、邪魔しに来るのかな」

ヒロさんが腕組みした。

「錬次がなにしたいのか、この期に及んでもさっぱりわかんないよ。あんな細かい騒ぎいっぱい起こさないで、当日にガツンと電気系統ぶっ壊すとか放火するとかした方が、ダメージでかいのに。警備が厳しくなるだけじゃんか」

不吉なことは言わないでほしかったが、ヒロさんの言う通りだった。木台に肘をついて、思い返す。錬次さんの今までの言動。その結果。それぞれのライヴ会場を襲って、けちなアヤつけをした。まずそこがおかしい。

いや――それ以前にもっとおかしいことがある。

錬次さんが首謀者だと、すぐに判明したことだ。

わざわざ平坂組の黒Tシャツを倉庫から盗んだことから、この事件は始まっている。今まで顧みてなかったけれど、これがそもそも変だ。だって、犯人がすぐにわかるからだ。部外者で鍵を持っていた人間は錬次さんしかいないのだから。

なぜ正体を隠そうともしなかった？　チンピラが暴れているだけだと思わせておけば、油断したかもしれないのに。敵がかつてのヘッドだと知ったおかげで、平坂組は最上級の警戒態勢を敷くことになった。人員をすべて会場の警備に割いて——

「……あ」

ふと漏らした僕の声に、三人ともが顔を上げる。でも、その視線を気にしている余裕はなかった。頭の中で組み上がっていく推測が、いやな軋みをたてた。

それが、錬次さんの目的だとしたら？

会場をそれぞれ襲って、警備のために組員を分散させる。ライヴハウスは襲いづらくなるだろう、でもそのかわりに。

僕は立ち上がって携帯を取り出す。「ナルミ？」とテツ先輩がつぶやく。四代目の番号をコールし、汗ばんだ手で握った電話を耳に押しつける。虚しい呼び出し音が何度も何度も繰り返されるのを聞くうちに、息苦しいほどの動悸の音が耳の内側から混じってくる。出ない。出てくれ。出てくれよ。僕があきらめて電話を切った瞬間、着信音が手のひらの中で鳴り響く。

電柱からだ。僕の不安が喉の奥で凝固する。

『——兄貴。壮さんが』

心臓の音で、電柱の声はかき消されそうになる。

『壮さんがやられました。今ッ、病院にッ』

僕は最後まで聞かずに走り出す。「おい、ナルミ！」「藤島中将(ふじしまちゅうじょう)どうした！」声が追いかけてくるのを振り切り、自転車のスタンドを蹴(け)り上げた。

6

病院に着いたとき、すでに平坂組のメンバーたちほぼ全員が、消毒液のにおいのする廊下にぎっしり集まっていた。
「兄貴！」
電柱が最初に気づき、こっちに駆け寄ってくる。額に巻いた包帯には血がにじんでいる。
屈強な少年やくざたちがそろって、巣穴を踏み潰されたネズミみたいに憔悴しきった顔をしているのを見て、きっと自分はもっとひどい顔なんだろうと思い、僕はなにも言葉が返せなくなる。
「伯父貴も、来てくれたんスか！」
背後からテツ先輩たちの足音。ヒロさんの車で、僕の自転車を追いかけてきたのだ。
「四代目、どうなんだ」テツ先輩が電柱にほとんど噛みつく勢いで訊ねた。
「集中治療室に」
「バットとかでやられたみたいス」「意識なくて」
「くそ、俺らが」「俺らがついてりゃ——」

五日目の新宿公演が終わると、僕の体力はソファから立ち上がるぶんすらも残っていなかった。統括というのは要するに、想定していないあらゆる問題が持ち込まれる役職なのである。素人の多い組織にあっては、身体が三つあっても足りない激務だった。
「藤島さん、楽日なんですし打ち上げ行きましょうよ打ち上げ！　バンドメンバーのみんなも藤島さんと飲みたいって！」
　控え室に飛び込んできた美嘉さんが僕の手を握ってぶんぶん振りながら言う。
「いや、無理です帰って寝ます。あと僕、未成年」
「お店、東口の方なんで！　ちょっと予約の時間過ぎてますし、あたし先に行ってますね」
　人の話聞けよ。
「んじゃ、おれがかわりに行こうかな」
　控え室の片付けをしていたヒロさんが言う。
「いやあもう五日間ずっと口説くの我慢してたから。仕事だし。でも終わったから解禁。バンドの娘たちみんな可愛いし迷うな」

「あんたなに考えてんだ！」
「いいですよヒロさんも大歓迎です！　予約の席増やしてきますね！」
　美嘉さんは飛び出していってしまった。僕はバンドメンバーのみなさんの貞操を守るために、憔悴しきった身体に鞭打って、宴会に参加することになった。
「ただ酒なら俺も行く。いっぱい働いたからなあ」
「テツ先輩とくになにもしてませんよねっ？」
「空調室におびき寄せたやつら、俺ひとりでボコったんだぜ」
「一日目だけじゃないですか、あとはずっとパチンコしてたじゃないですか警備係なのに！　ちゃんと知ってるんですからね！」
「おーおー、さすがナルミは統括だけあるな。パチの負けも経費にならねえ？　一応、業務中の損失なんだけど」
「ふざけんな！」
「自分も当然の参加ですよ」
　警備の連中からインターカムを回収し終えた少佐も、控え室に戻ってきて言う。
「つまり四代目の出した金で飲めるのでしょう。こんな美味い酒はそうそう味わえない」
「少佐、チェーンの居酒屋だと必ず小学生だと間違われるじゃん。やめとけって」

テツ先輩がからかう。
「はっはっは、実はもう二十歳になったのですよ！　そして自分には学生証があります！」
自慢するほどのことでもないと思うが。ていうか、こんなんでも成人になるんだなあ。当たり前か。僕だってあと四年で、まったく自覚も覚悟もない、法律上のおとなになる。
美嘉さんが予約してくれていた飲み屋は個室だらけのおしゃれな店で、女子大生ばっかりのバンドメンバーのみなさん、あとはヒロさんあたりまでなら似合うけれど、僕の横にテツ先輩、少佐、そして電柱に岩男、と並べると、もういたたまれなくてしょうがなかった。料理は美味しいけど量が少ないし。
ただ、日本酒はなかなかのものがそろっていたので、テツ先輩は大喜び。
「四代目にも酒持ってってやろうぜ。『十四代』がボトルで頼めるし」
「いやいや。怪我人なんですってば。医者にめちゃくちゃ怒られて病室に鍵かけられたとか言ってましたよ」
なにせ集中治療室を出て五日目という重篤患者のくせに、病院を勝手に抜けだして、しかも喧嘩までやったのである。このうえ見舞客に酒を持ち込ませたなんて発覚したら、鉄格子付きの病室にぶち込まれてしまうかもしれない。
でも、忙しいのはありがたかった。
だって、この四日間は、錬次さんのことを思い出すひまもなかったからだ。

こうして串焼きのにおいと煙草のけむりに顔をあぶられ、ジンジャーエールの泡を数えながら、飲み屋特有の混沌とした騒がしさに身を浸していると、どうしようもなく浮かんでくる。軽薄なメッシュ入りの髪と、ゴーグルで隠された針みたいな視線。浮ついたエセ関西弁。少し背を丸めて歩くシルエット。一緒に眺めたペンギンとシロクマ。交わしたコーラの盃の、甘ったるさ。
あの人は、あれからどうしたんだろう。だれも教えてくれないのだ。

そのまま飲み屋で気絶するように眠ってしまったのだという。気づくと自宅のベッドの上だった。姉によれば、『いつかのチャラい男』が車で送り届けてくれたのだそうだ。ヒロさん、わざわざ運んでくれたのか。って、それ飲酒運転じゃないの？　いや、あの人は本気で女の子を口説くときには酒飲んだ振りだけで酔っぱらわないようにするとか言ってたっけ。
まあ、なんでもいいや。疲れた。
僕の夏休みはもう一週間も残っていなかった。しかもイベントの楽日から丸二日、ベッドの上で浪費してしまうことになる。

＊

身体のだるさがとれて、『はなまる』にようやく顔を出せるようになったのは、八月最後の火曜日のこと。まだ準備中で客のいない店内に入ると、カウンターテーブルの上に真新しい赤の暖簾が広げられていて、びっくりする。

「ああ、なんかヨシキがサービスでやってくれたんだ。しかも刺繍なんだよ。ちょっと派手すぎる気もするけど、なかなかいいだろ。今日からそっち使うつもり」

　スープの仕込みをしていたミンさんが、なんでもなさそうな口調で言う。ちょっと派手すぎる、では済まされない手の込んだ上物だった。手触りを確かめる。僕がもらったTシャツと同じ、畳の目のような細かい刺繍だ。生地よりもわずかに光沢の強い赤糸で、レリーフのように一面に描かれているのは、鳥獣戯画からとったのだろうか、蛙やウサギや猿がたわむれる水墨画風の下地模様だ。その真ん中に白糸で、『ラーメンはなまる』と書かれている。

　僕はくたびれきった身体を椅子に預け、暖簾から目を上げ、忙しく厨房の中を行き来しているミンさんの肩を見つめる。

　この人も、知っていたはずなのだ。ヨシキさんの――ほんとうの名前。

「なんだよ、じろじろ見たって食い物はなんにも出ないぞ。準備中だってのに、なにしに来たんだ。おまえも彩夏を見習って、家で夏休みの宿題済ませたら?」

「い、いえ……アリスに呼ばれて来たんです」

「なら、さっさと上行けよ」

でも。訊かなきゃいけないことがある。

訊いていいことなのかどうかは、わからないけれど。

うつむく。視線を外したはずみに、ふとその言葉がこぼれ出る。

「ヒソンさんは、なにか言ってましたか」

「なにか、って」

「四代目のこととか。錬次さんのこととか」

「なんにも」

そうか。僕は細く息をつく。そうだろうな。なんにも言えるはずがない。

でも、ミンさんはカウンター越しに手を伸ばしてきて、暖簾の右隅を指さした。

ウサギや蛙たちの間に、僕はそれを見つける。二匹の狐——いや、狼だ。ご丁寧に、片方はサングラスをかけているので、なにかこみ上げてきそうになり、僕は暖簾を畳んでしまう。

これが、あの人の答えか。

なにも言葉にせず、みんな織り込んで、今のままの自分を続けていく。

「……最初から知ってた、んですよね」

しばらく、スープのたぎる音と換気扇の回る音しか聞こえなかった。だから、顔を上げられない。そこにミンさんのどんな顔があるのか、確かめるのが怖い。

「知ってたよ」

香り高い湿気に、ミンさんの声が混じる。僕は膝の上に置いた拳を固くする。自分でも馬鹿な質問と、わかってはいた。でも、続けないわけにはいかなかった。

「なにかしようと、思わなかったんですか」

「なにか、って、なんだよ」

　少し怒ったようなミンさんの声が僕のうなじに押しつけられた。それから、いきなり前髪をつかまれ、顔を引っぱり起こされる。

「あのな。わたしはラーメン屋だ」

　ミンさんのつり上がった目が、すぐそこにある。僕は喉の奥で声をしぼませる。

「人になにか食わせる以外のことは、やらないしできない。そんなの当たり前だろ」

　思いっきり手加減したデコピンで、僕は突き放された。そう、当たり前のことだ。だって他にどうしようもないじゃないか。僕らはみんなちっぽけで、自分のことに手一杯で、勝手に苦しんで勝手に生きて勝手に死ぬしかないのだから。

　ミンさんの言葉を、それでも冷たいと思ってしまうのは、あのときに少しだけ触れた、アリスの思いがけない激情のせいだ。

　生きているのだから、選ばなければいけない。

　あれは、まるでアリス自身の哀しみから出てきた叫びみたいだった。なにがあったんだろう。あの小さな身体の中に、僕の知らない暗黒を、いくつ抱えているんだろう。

アリスは、真相を前もって僕に話してくれなかった。苦しみは一度で済ませたい、と言って。今の僕では、痛みを分かち合う器にはなれない、という意味なんだろうか。たとえ五パーセントでも、その苦痛を僕に背負わせてほしいと思うのは――ただのわがままなんだろうか。

それは、哀(かな)しすぎる。

ミンさんが、ラーメンとアイスを食べさせることしかできないのと同じように。探偵(たんてい)助手は、探偵のそばにただ黙(だま)ってついていて、耐えかねて吐(は)き出される言葉を受け止めることしかできないんだろうか。

でも、黙って立ち上がった僕の視界の端(はし)に、それが引っかかる。椅子(いす)に手をついて、目をしばたたかせる。

カウンターの端っこ。並べられた日本酒の空き瓶(びん)の一つに、ゴーグル型のサングラスが引っかけられている。駆(か)け寄り、震(ふる)える手で抜き取る。間違いない。

「ああ。昨日(きのう)、来たよ」

顔を上げてミンさんを見る。スープをかき混ぜながら、苦笑する。

「あの野郎(やろう)、五年前の味しか知らないからさ。こんなの『はなまる』の味じゃねえとか、あの不味(まず)さを返せとか抜かすんだ。おまけにグラサンつけたままラーメン食おうとすんの。何度言っても聞かないんだ。だからぶん殴(なぐ)ってやった」

おまけに忘れ物癖(ぐせ)も全然なおってないしさ。ミンさんは声をたてて笑う。

今度逢(あ)ったら、それ渡しといてよ。

僕は手のひらの中で、ゴーグルの感触を何度も転がして確かめる。
「……なにか」
「ん？」
「なにか、他に言ってなかったんですか。これからどうするのか、とか」
「だから、あいつはラーメン食いに来ただけだ。とびっきりのを食わせてやったよ。他になにか必要なのか？」
僕は口ごもり、ゴーグルを握りしめたまま、店を出る。

「遅い！　ラーメン屋でなにをしていたんだい、着いたならさっさと上がってきたまえよ！」
探偵事務所に入るなり、冷房の風と一緒にアリスの怒声が吹きつける。パジャマ姿の探偵はベッドの上で仁王立ちになり、眉をつり上げている。
「ごめん……ちょっと、ミンさんと話してて」
「もう発車時刻まであまりないのだよ、遅れたらどうするんだい」
……発車時刻？
「平坂錬次が乗る新幹線だよ。品川発、十六時だ」
僕は目を見開く。

「な……んで知ってんの？」

「携帯でチケットを予約しているんだ。ぼくにはみんな筒抜けだ。幸い、頼んでいたものはなんとか間に合った。彼の忘れ物だ、届けてきてくれたまえ」

投げつけられた包みをキャッチできず、顔で受け止めてしまう。

「なんだい、今日はいつにも増して呆けきっているね。燃え尽き症候群かい？　老人ホームの空室状況を調べたいなら格安で請け負うよ」

「い、いや、そうじゃなくて」

紙包みを胸に押しつけ、膝歩きでアリスに近づく。

「あの、あのとき——」

言いかけた言葉は僕の喉の途中で曲がって、へし折れて、熱で鋳潰され、溶けたまま肺に逆戻りする。なにを言おうとしたのか、自分でもわからない。なにを訊こうとしていたのか。なにを求めていたのか。アリスの澄んだ瞳でまっすぐに見つめられると、僕の胸はそんな煩悶や戸惑いと一緒くたに押し潰されそうになる。

だって、僕はただ、吹きすさぶ風や横殴りの雨がアリスの体温を奪わないように、すぐそばにいたいだけで。アリスが哀しむのを、ひとりで苦い記憶を呑み込むのを、見ていたくないだけで。でも、ほんの五パーセントも受け止めきれないくらい、ちっぽけだから。

「なんにも説得力ないかもしれないけど。……がんばる、よ。僕はずっと、アリスのそばにいたいから。アリスも、僕が隣にいていいって、思ってくれるように」

　アリスは一瞬、放心したような顔になり、それからぬいぐるみの山を後ろ手でかきわけて、ベッドの奥へと後ずさった。

「え……あ、いや、ごめん、その、だから」

「な、な、な」その頬がみるみる赤く染まる。「なんだい、いきなり！　なにを言ってるんだ、きみは最近どうかしてるよ、生来ニート気質のくせに働き過ぎだから、頭がおかしくなったのじゃないかいっ」

「ぼくがなんだってっ？　隣にどうしようもないプランクトン並みの鈍さの探偵助手がいることを、ぼ、ぼくが、どう思ってるかだってっ？　これだけ一緒にいてもわかっていなかったのかい、あきれはてたよ！　きみなんて、きみなんて！　ぼくがどれだけ――」

「……どれだけ、ええと、なに？」

　落雷に怯えて頭を手で覆いながらも、おそるおそる訊ねてみる。アリスは耳まで真っ赤になり、そしていつものようにドクターペッパーの空き缶が飛んできた。

「いいからさっさと行きたまえっ」

　髪をびりびり震わせ、ニート探偵は玄関を指さす。

「間に合わなかったらどうするんだ、どれだけの想いが無駄になると思ってるんだい！」

僕は預かったものをゴーグルと一緒に鞄にねじ込むと、探偵事務所を飛び出した。

品川駅の23番線乗り場に、金色のメッシュを走らせた髪を見つけた。売店の裏手の壁に寄りかかって、気だるそうに駅弁をかっ込んでいる。頭上ではひっきりなしに案内音声や発着チャイムが飛び交い、列車がレールを踏む音が途切れることなくその足下を支えている。

「――錬次さん！」

階段を駆け上がり、スーツケースを転がす乗客たちの間を縫って走りながら、大声で呼んだ。錬次さんは顔を上げ、僕をみとめ、それからまた弁当に目を落とした。箸のスピードがわずかに上がる。

僕がすぐ近くにたどり着いて膝に両手を押しあてながら荒い息を整えていると、錬次さんは箸をへし折って弁当箱を潰し、ゴミ箱に押し込んで戻ってきた。

「見送りなしでさみしいなあ、東京砂漠やなあ、って思っとったところや」

笑い顔は、はじめて逢ったときと同じだ。ただ、今は両方の頰に、赤あざと青あざがある。僕のまじまじという視線に気づいたのか、錬次さんは手を顔にあてた。

「ああ、これな。右のはナルミも見てたやろ、壮のパンチ。左がミンさんや。イエス様やないっちゅうねん。東京土産これだけか思たら涙出てくるわ」

まだ、いがらっぽい呼気が肺の中でからんでいる。

「あの野郎(やろう)、たいがいボロボロの怪我(けが)人やったくせに、なんやあのパンチの切れ。甘(あま)く見とったわ。これで何勝何敗やったかな。負け越しで逃げるんはもっと泣けるなあ」

僕は切れ切れの声で訊(たず)ねる。

「これから、どうするんですか」

「大阪あたりに逃げようか思てな。居心地よさそうや」

歯を見せて笑い、それから頬(ほお)の痛みに顔をしかめる。

「おまえらが赤坂で俺(おれ)の手下(てした)どもボコボコにしたやろ。あん中に柳原(やなぎはら)会からの監視(かんし)役がおってな。おかげで逃げられたわ。やっぱ借金返すなんて俺のキャラやないし」

「東京に……いれば、いいじゃないですか。みんなで手伝えば、借金くらい」

「けじめ、つけんとな」

漂白(ひょうはく)されたみたいな目をされて、それを遮(さえぎ)るサングラスすらないので、僕はもうなにも言えなくなる。

「ええねん。前にも言ったやろ。ナルミに逢(あ)えたし、パンダおらへんけどペンギンとシロクマ見た。あと、あのバンドええ曲歌うやんか。ＣＤ出たら買うわ。東京で二ヶ月。俺のどうしようもない人生ん中じゃ、けっこうな収穫やで。グラサンと、ダチと、好きやった女はしっかり失(な)くしたけどな。差し引きで……」

僕は、聞いているのがつらくなって、鞄（かばん）に手を突っ込み、ゴーグルを差し出す。錬次（れんじ）さんの目が丸くなった。

「……あー。あー、『はなまる』か？　あそこに忘れたか。いやー、おおきにな。助かった」

錬次さんの両眼（め）は、ゴーグルの下の薄闇（うすやみ）に沈む。

「いえ」

僕は弱々しく首を振った。もっと、できることがあった気がする。でもたぶんそれは勘違（かんちが）いなのだ。僕らはそれぞれが勝手に苦しんで、勝手に生きて、勝手に死ぬしかない。なにかの偶然（ぐうぜん）でふと触（ふ）れ合ったときに、その人にしてあげられることなんて、自分のつまらない枠（わく）の中のせいいっぱいしかない。

間抜けな探偵（たんてい）助手が最後にできることは、だから、パシリだけだ。

紙包みを取り出し、錬次さんの手に押しつける。

「土産（みやげ）か？」

「いえ、そっちも忘れ物だそうです」

錬次さんは紙包みを開いた。不意にプラットフォームの端（はし）からやってきた風が、錬次さんの手から包装紙をもぎ取る。すんでのところでその指が包みの中身をつかみ、真っ白な布地が風に広がってはためく。

Tシャツだ。白地で、袖口（そでぐち）と裾（すそ）だけが黒い。肩（かた）や脇腹（わきばら）に、微細（びさい）なグラデーションのついた刺繍（ししゅう）で、平坂（ひらさか）組の代紋（だいもん）が描かれている。もう、散り散りの火花じゃない。今にも飛び立ちそうな、揚羽蝶（あげはちょう）だ。

そうか。これか。アリスがヨシキさんに、頼んだのだろうか。
「忘れたのも、忘れとったわ」
錬次さんの笑いは、今度は口だけだ。
「この代紋決めたときにな。ヒソンが、刺繍してあげるゆうて。そやけど俺、あの頃貧乏で、Tシャツこれしか持ってへんかったんや」
湿った声が、錬次さんの指先から、シャツに染み込んでいく。
「そやからアパート遊びに行くたびにちょっとずつ縫ってもらってた。途中で、ヒソンは」
言いかけ、錬次さんの顔に影が差す。僕はがんばって笑い顔をつくり、首を振る。
「完成まで五年も、かかっちゃいましたね」
錬次さんも嘘笑いで答えてくれる。
「そやな。ひょっとしたらまだ俺に惚れて――」
言葉を途中で呑み込み、錬次さんはシャツを鼻に押しあてる。
「……なんや。ヒソンが続きやってくれたんちゃうわ」
僕は首を傾げた。
「消毒液くさいわ。あのアホに逢ったら、病室では安静にしろ言うとけ」
「あ……」

喉（のど）が涙（なみだ）で灼（や）ける。

錬次さんだけサングラスをしているのはずるい、と思う。しっかり泣いてるくせに、到着した新幹線の方へと後ろ歩きで遠ざかっていくと、まるで──笑っているようにしか見えないじゃないか。

押しつけがましい風を残して、列車が行ってしまった後も、僕は線路際（ぎわ）の太い柵（さく）につかまって、涙が乾（かわ）くのを待っていた。太陽はビルの壁面に反射して、濡（ぬ）れた僕のまつげの上で、七色の光の粒に散らされていた。目に映る景色がみんな空の青に焼きついてしまいそうな、そんな八月の終わりのまぶしい午後だった。

〈了〉

あとがき

日本が所有権を持っていた最後のジャイアントパンダ、リンリンが上野動物園で死亡したのは、このシリーズの3巻が発売されるよりも一ヶ月と少し前――二〇〇八年の四月末のことでした。

テレビとまったく縁のない生活を送っていた僕は、このニュースを一年近く知らないままでいました。なにせ、白黒熊にはさしたる興味がなかったのです。二年ほど前に上野動物園に行ったときにも、おそらく檻のガラスに張りつく子供たちの背中越しに存命中のリンリンを観たと思うのですが、まったく記憶にありません。木立の間を元気に走り回るレッサーパンダの愛くるしいふさふさ尻尾ばかりが印象に残っています。

とにかく、彼女の死を知ったのは、この4巻を書いている最中でした。そして、今でもその事実を実感できずにいます。あまり興味がないといいながらも、僕の意識の中ではパンダと上野は分かちがたく結びついており、しかも今なお上野駅には大小のパンダ像が掲示され、パンダ口やパンダ橋といった地名もそのままに残されているのです。

それはたぶん、いつかその記憶を頼りに戻ってくる人のための、道標なのでしょう。だれかのための場所を残しておくのに、なにより大切なのは、まず名付けて、それを守ることです。

この『神様のメモ帳』は、これまでに書いてきた四巻とも、すべてそういう物語となっています。だれかのために名付けた場所を、その人が戻ってくるまで守る。たったそれだけの物語です。これを機に読み返していただければ、根底に流れるテーマに気づくことができるかもしれません。

前のシリーズが完結してから、担当編集さんと次作について打ち合わせをしたのですが、僕自身は完全な新作を始めるつもりでした。二つ三つ新企画の腹案があったからです。しかし編集さんは電話で言いました。

『メモ帳4ていう線も考えておいてよ』

NOと言えない日本人である僕は、じゃあそれも含めて企画書つくって順次送りますねと答えてしまったのです。続刊のことなどなにも考えていなかったのに。

まあいいか、新企画を先に送って、そのどれかが通ればいいんだし。

ところがいざ机に向かってみると、やる気満々だったはずの新企画はどれも空回りで、形になりません。気づくと空白のテキストファイルを見つめながら、ナルミやアリスのことを、四代目のことを、それから『彼』のことを考えている自分がいます。

そして僕は、本棚（だな）から第1巻を抜き出し、231ページを開きます。

はっきりと思い出せます。その四代目のせりふを書いたとき、僕はたしかに『彼』のことを考えていました。『彼』と四代目との別れのことを。それから、描けるかどうかはわからないけれど、いつか巡（めぐ）り来るであ

ろう二人の再会のことも。
頭にあったはずの新企画たちをみんな蹴散らして、そのプロットが組み上がりました。後回しにするはずだったメモ帳4の企画を、いの一番に編集さんに送ることになったのです。
そして、通った結果もご覧の通りです。
たぶん四代目や『彼』のために名付けられたあの場所が、編集さんの中にも、僕の中にも、残っていたからなのでしょう。これは、そういう物語なのですから。

なんて得意げに語ってしまいましたが、もちろんここまでの能書きはほとんど全部、たった今思いついたものです。ばっちり後付けのでまかせです。真剣に受け取って読み返そうと思い立ってくれた方、ほんとにすみません。べつに「シリーズ四冊目のあとがきは通底テーマについて大嘘を並べる」などと決めたわけでもないのですが、どうにも虚言癖が抜けないようです。今回はついに二ページ半も真面目ぶった嘘を連ねてしまいました。あとがきだけで本を壁に叩きつけられても文句は言えません。
それと、ここまで狼少年を繰り返していると信じてもらえないかもしれませんが、『彼』のことについてはほんとうです。昔から書くつもりだったんです。なので今は、一つ大きな荷を下ろせた。そんな想いでいっぱいです。
他にも色々と謝らなければいけないことがあるような気はしますが、まずは、またしても一年間お待たせしてしまったことをお詫び申し上げます。その間なにをしていたのかというと、ご存じの方はご存じの

通り、メモ帳はほっぽってべつの話を書いていました。すみません。

そのかわりといってはなんですが、本編中に少しだけ登場した古着屋にまつわるお話がドラマCDとして同時期に発売される予定です。僕は原案として参加しております。そちらもあわせてどうぞお楽しみください。

今回は、これまで書いた中でいちばん長い話になりました。執筆期間も然(しか)りで、担当編集の湯浅(ゆあさ)さまには短編のしめきりも含めてたいへんご迷惑をおかけしました。イラストレーターの岸田(きしだ)メルさまにも、多忙(たぼう)なスケジュールの中、素敵(すてき)な絵をつけていただきました。また、韓国(かんこく)語版翻訳(ほんやく)者であるノ・スルギさまには、資料に関してご協力いただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

二〇〇九年五月　杉井(すぎい)光(ひかる)

杉井 光

1978年、東京生まれ。池袋に引っ越してきてから、心の潤いを求めて楽器やDTM機材を次々と買いそろえているが、写真を撮ってブログに載せるだけで満足して、早くも埃が積もり始めている。電子ピアノが鍵盤カバーつきでよかったと安堵しきり。

岸田メル

1983年生まれ、名古屋在住。好きな食べ物はラーメン。好きな飲み物は水。趣味は教育テレビを見ること。絵を描いてるときもずっと見てます。ホームページはhttp://maigo.jp/

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.jp/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
電撃文庫編集部
「杉井 光先生」係
「岸田メル先生」係